

第五章 にかほ市域の獅子舞番楽

第一節 伊勢居地番楽

(一) 所在地

伊勢居地番楽（いせいじばんがく）…秋田県にかほ市伊勢居地

(二) 上演時期・場所

現在は、延命地藏尊（写真1）の堂内で六夜待ちの獅子舞（八月二十六日、延命地藏尊）が行われ、他に神送りが十一月下旬に行われる。かつては四月一日の神降ろし、八月十三日の初棚供養、六夜待ちの獅子舞、二百十日、十一月十五日の神送りに獅子舞が行われた。また、延命地藏尊の祭りの宵宮で数番舞っていたが、近年より休止した。



写真1 延命地藏尊

(三) 当該地域の概要（地勢・人口・戸数・生業・歴史的文化的特性など）

伊勢居地は白雪川中流域の低地にあり、東側には冬師山が連なる。戸数は全八七戸（平成二十七年国勢調査による）。生業の多くは会社員や農業である。伊勢居地の地名は、伊勢神宮に依るものと思われ、この地が伊勢御師の活動拠点となったことが村名の由来と考えられている。また、伊勢居地は平沢、塩越などの海岸部と、矢島を結ぶ重要な中継点であった。室町・戦国期には由利十二頭の仁賀保氏の拠点の一つであったといわれ、『由利郡中慶長年中

比見出検地帳』に仁賀保郷の一村として村名がある。元和九年（一六三三）に最上氏の支配となり、同年より再び仁賀保氏が治め、寛永八年（一六三二）に仁賀保良俊が亡くなると一時は酒井家の預かりとなる。その後、寛永十七年（一六四〇）に本荘藩が幕府に領地交換を願い出て、交代寄合（三〇〇〇石以上の無役で参勤交代をする旗本）生駒高俊の領地の矢島一七村と本荘藩の向郷・玉米郷・下村郷一六村の交換を行った。この時に伊勢居地村は一部が本荘藩に移り、以後は本荘・矢島・仁賀保二千石家の三氏による相給の村となった。万治二年（一六五九）には、生駒高俊の次男・俊明に伊勢居地二〇〇〇石が分け与えられ、伊勢居地生駒家を興した。伊勢居地生駒家は、代々江戸定府の旗本で直接領地に足を踏み入れることはなく、伊勢居地に所を置き、家老池田吉兵衛が領地を治めた。

集落の中央には延命地藏尊があり、伊勢居地生駒氏の庇護を受けた。また、この地藏は今でも地元信仰が厚く、七月二十四日の縁日の今でも賑わいを見せている。地藏堂の隣には宝積山遊仙寺がある。この寺の本寺は紀州高野山心南院で、伊勢居地生駒氏だけでなく、本家である矢島生駒家代々の祈願所とされ、矢島生駒家の記録にも当家が遊仙寺で祈禱を執り行った旨が記されている。地藏尊の裏手には神明社があり、これがおそらく伊勢居地の地名の興りとなった伊勢信仰の拠点と思われる。また、境内には初午祭の時の祭神となる稲荷社、古峯社などが鎮座する。

(四) 歴史・由来

伊勢居地の番楽幕には「伊勢居地獅子舞保存会」とあり、かつての団体名は「伊勢居地獅子舞保存会」で、これが後に「伊勢居地番楽保存会」と改称された。伊勢居地番楽の創始時期は不明である。由利本荘市矢島町荒沢上針ヶ岡に建てられた「獅子舞翁碑」（高さ155cm、巾155cm、厚さ20cm）（写真2）は、明治二十七年（一八九四）に七七歳で亡くなった荒沢獅子舞の師匠・

金子左治工門を顕彰したもので、この金子左治工門の名は、荒沢の明治二年（一八六九）の佐藤家蔵の掛軸「奉祭本海流系譜」にも荒沢獅子舞連中のひとりとして確認することができる。この石碑を建立した門弟中として、矢島町荒沢村・仁賀保伊勢居地村・本庄新屋敷村が名を連ねており、この石碑は伊勢居地番楽の名を確認することができる最も古い資料である。また、伊勢居地番楽は荒沢獅子舞から伝わったという伝承があるが、この伝承を裏付ける資料であるとも考えられる。



写真2 獅子舞翁碑

ところで、伊勢居地番楽が所蔵する獅子頭は、生駒家の家紋である波引車紋（半車紋）を額に戴いている。こういった領主の家紋は、領主との関係性を強調し、神楽の由緒を権威付けする説明がなされる場合があるが、伊勢居地番楽での聞き取りでは領主との関係性を示すような話も聞かれない。また、近世の伊勢居地領主の伊勢居地生駒家は江戸定府の旗本で、伊勢居地の地を訪れることがなかったため、領主が番楽を見る機会もなかったものと考えられる。前述の「奉祭本海流系譜」の掛軸を所蔵する荒沢の佐藤家には、掛軸のほかに荒沢獅子舞で用いた獅子頭が残されている。この獅子も生駒家の家紋を額に戴いている。前述の掛軸には、幕末の矢島領主・生駒親敬が新政府軍として戊辰戦争に参戦する際、矢島の金毘羅神社と八幡宮で荒沢の獅子舞連中が戦勝祈願を行い、明治に改元した十月に親敬が無事に帰城し、軍功により石高を増され一万五〇〇〇石となり、先祖と同じく従五位下讃岐守に叙せられたことから、金毘羅神社で大願成就の獅子舞を行い、以後、荒沢の獅子が矢島藩の「御用獅子」とされたことなどが記されており、荒沢獅子舞が矢島家の庇護を受けたと伝えられている。ただし、近世の記録で矢島家の家紋を賜った獅子頭は、現在、由利本荘市鳥海町上笹子の秋葉神社に伝

わっている獅子頭一点のみである。これは近世の修験常学院の獅子頭で、矢島領主・生駒親睦が参勤交代の途上で病になった際、常楽院が祈禱を行って平癒したことにより獅子頭を下賜されたと伝えられ、史料にも「御紋付御獅子」と記されているものである。この秋葉神社の獅子頭は額に生駒家紋が金地で記され、上顎の裏には「生駒監物（生駒親睦）」の名が記されている。常学院の獅子頭のように生駒家の紋が刻まれた獅子頭で、近世の作と確認できるものは残されておらず、その多くは明治以降に製作されたものである。伊勢居地番楽の獅子頭もこれらと同様に明治以降に製作されたもので、荒沢の獅子頭に倣って作られた結果、生駒家の紋を戴いたものと思われる。

(五) 現在と過去の状況

(1) 六夜待ちの獅子舞

(1) 舞台

八月二十六日の晩に、六夜待ちの獅子舞が伊勢居地延命地藏尊堂内で行われるが、堂内の本尊左手の外陣の壁に番楽幕を張り、そちらを番楽の正面とする。舞手は内陣から出入りをし、お囃子は内陣内で奏する（図1）。

(2) 行事故次第

八月二十六日の六夜待ちの獅子舞の調査は平成二十七年八月二十六日と平成二十八年八月二十六日に二回に渡って行っている。

その際の演目の次の通り。なお、両日ともに地藏堂内で獅子舞を奉納する前に、地藏堂前に保存会員が集まり、参道からお囃子を奏でながら練り歩く「小路渡り（足面渡り）」で地藏堂へと入堂

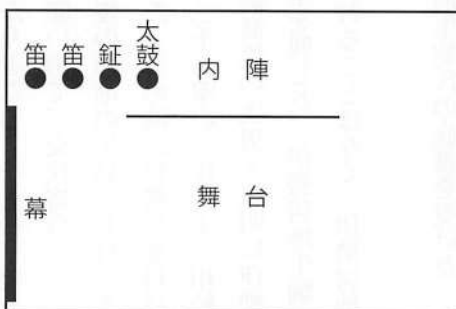


図1 舞台図

した。

- ◎平成二十七年八月二十六日 午後七時三分より午後八時二十八分まで
- ①神舞、②三番吉奈戸、③番楽、④鳥舞、⑤よらしやら、⑥三人餅搗、⑦番楽太郎、⑧熊谷次郎、⑨やさぎ獅子、⑩空白舞
- ◎平成二十八年八月二十六日 午後七時より午後八時十九分まで
- ①神舞、②三番吉奈戸、③鳥舞、④三人餅搗、⑤よらしやら、⑥うれしきま、⑦やさぎ獅子、⑧空白舞

(3)上演演目

次に、実際の上演演目について見ていくことにする。なお、本文中の歌は『伊勢居地獅子舞神歌』（昭和六十三年八月）による。また、伊勢居地の舞は、舞台上に登場した舞手はどの舞でも前歌の間は舞台上で動かず、お囃子が舞の歌に変わると舞い始める。ここではまず、地藏堂入堂の奏楽である小路渡りについて述べた後、番楽の舞の分類に添って演目について紹介することにする。

①小路渡り（足面渡り）…入堂の際の奏楽。

（通節）

へ打てば鳴る 打たねば鳴らぬよ此の鼓 調べの糸心しめたり 心しめたりやー

へ最上川あなたこなたに呼ぶ声は土砂の声 川の鳴瀬や川の鳴瀬や やー

へあの家めらすめめも形もよけれども 背中のこぶたまにきずあり たまにきずかりやあー

へおゝ鳥海 道辺に立てば国見れば 四界は広し国はおだやか 国はおだやかやー

へへへしまう夜風に吹かれて寒かろうや へへの綿帽子 へへの綿帽子やー

A 獅子舞

②神舞…にかほ市内の番楽には獅子舞がないが、伊勢居地番楽には獅子舞があり、この神舞の中で獅子が舞われる（写真3）。

本海流獅子舞番楽と同じく舞の最初に獅子舞が舞われる。神舞は舞手と幕取りが登場する。二人は肌着に袴姿という仕度だが、幕取りは立烏帽子を被り、黒式尉の面を口に当てた独特な姿となっている。最初に左手に獅子頭を持ち、幕を左肩から後ろに流し、幕取りが尾を持つ。舞手は前方に向かって、獅子頭を歯打ちさせた後、幕を潜る。そして、幕取りの退場となり、獅子舞は舞手の正面に安置され、以後は一人舞となる。まず手舞となり、時折印相のような手を結びながら舞う。次に扇を持ち、扇を掲げながら時計回りに廻りながら舞う。途中で、右爪先で三度円を描くような所作と、同じく左爪先で三度円を描く。扇の次に剣の手となる。剣の舞では剣を抜いて振りながら舞う。扇と同様に左右の足でそれぞれ地に円を描くような所作が見られる。次に手拭いの手となり、手拭いを両手に持って舞う。この同様に左右の足で円を描く所作がある。手拭いの手を終えると正面に安置した獅子頭を両手で抱えて退場し、舞が終わる。三番叟面を口に当てた幕取りに独特な仕度や、獅子舞から神舞へと移る所作など他にはない独特な獅子舞となっているが、神舞とは番楽における獅子頭を被る前の清めの舞のことで、おそらくは伊勢居地でも神舞、獅子舞の順で舞われていたものと考えられる。これは古老の聞き取りをまとめた『獅子舞を語る』¹⁾でも、大正九年頃に復活した当時の演目として神舞、後獅子の順であり、ここからも神舞、獅子舞の順に舞われていたことがわかる。また、神舞や獅子舞の所作は本海流獅子舞番楽の所作を臆気ながらも感じさせ



写真3 神舞

るものがあり、神舞の神歌も「舞に来て…」のように、本海流獅子舞番楽と共通する神歌も歌われ、荒沢からの伝授と言われているのも頷ける。伊勢居地の神舞の所作は、本海流獅子舞番楽の神舞の所作にも共通する。神舞で爪先で円を描く所作は、本海流獅子舞番楽でも申や忠という字を描く。また、伊勢居地の手拭いの手はおそらく襷の手で、かつては幕を被る前に襷掛けをしたのかもしれない。それから、先に述べたようににかほ市の番楽には獅子舞がないが、伊勢居地番楽は矢島の荒沢獅子舞から伝わったために獅子舞がもたらされたものと思われる。

(神舞の歌)

へ舞に来て此このお庭に振りこめば 黄金が落ちる 足にからまる 足にからまるやー やれ面白 足にからまる 足にからまるやー
 へ拝めや拝めや四方浄土 拝めれば如何なる神 おがさなるもの おがさなるものやー
 へ扇取りさむさのいかりを鳥立てて 歌へば開く天の岩戸じゃ 天の岩戸じゃ やー
 へびしゃもん様は左脇差瘦男 やれおそろし かついで抜けや 抜いてさいしようかやー
 へ十七八若いたなをば誰が持つ 今はやりのそめあげのたな そめあげのたなやー

③やさぎ獅子・番楽の最後に舞われる軽妙で動作の速い獅子舞。伊勢居地では神舞の時の獅子頭よりも小振りのものを用いて舞う。舞手は神舞と同じ衣装だが、幕取りは肌着、股引、頬被りに道化面という格好で舞う。幕を何度も潜る激しい舞で、獅子が歯打ちをしている時は幕取りは舞手に背中を向け、滑稽な仕草をして笑いを誘う。最後に幕取りも幕に入り、四方に獅子が歯打ちをして舞い納める。

(やさぎ獅子の歌)

へ獅子の仔は生れておちる 頭振り振り 頭振り振りやー
 へ天晴れ拍子 拍子をそろえ うたのかけ初め うたのかけそめやー
 へ沖のかもめはふらりひやらり 波を枕に波を枕にやー

B 式舞

④翁・狩衣、袴、立烏帽子を被り白式尉の面を着けた翁がゆったりと舞う祈禱の舞で猿楽に由来する。神歌を見ると観音、薬師、阿弥陀、釈迦の四方の浄堂（浄土）とあるように四方の浄土を拝して舞うというように、神歌も神道化の影響が少なく、仏教的な文言が残されている。中歌の後はテンポの速い舞となる。

(前歌)

へ此ここはどこここは何処の雲の下 天飛ぶ鳥は羽根をなす よなよなきりやどしやたらりとや きりやどしやたらりとや 翁が先にと生れつつ 松が先にと生まれつつ いざさらば いでて年較べせんや 姫小松ヨーイヨーイヤナー

(中歌)

へ翁がひげの長きよを若きみの五葉の久しさよ
 へそれ東の空をこう見み奉れば 観音の浄堂や月高く見えますます
 へそれ南の星をこう見み奉れば 薬師の浄堂や月高く見えますます
 へそれ西の星をこう見み奉れば あみだの浄堂や月高く見えますます
 へそれ北の星をこう見み奉れば 釈迦にしゃ門の浄堂や月高く見えますます
 す
 へそれ天笠の松代河原の池の亀はそれ三極の星を戴き 光にて四海の波にたどうたり
 へ春に来て秋行くつばめすきの戸を玉の湯殿に巢をかけて 下には繁昌黄金の調子をえらしようと 我も孔雀の翁殿や それ萬床の翁殿や たびの御前に畏まり

(舞の歌)

へやーおーぎな祝の五らい十郎 あいの川せいに伏しあなたも十郎こなたも十郎 十郎さいろう さいらう十郎 遠望山にて代々久しき翁なり

⑤三番吉奈戸…三番叟の舞で、神舞の幕取りと同じ仕度で頭に立烏帽子を被り、顔に三番叟面を着ける。三番叟は後ろ向きに中腰になり、腰を振るようになりに舞い始める。四方固めの舞とされ、扇を開き、大きく振りかぶった後、前にしゃがみ、扇の要で大地を突くような特徴的な所作を四方に繰り返す。中歌の詞に合わせて身体を前後ろに揺らし、次に扇を畳んで手に持ち、同じように扇の要で四方の大地を突くような所作を繰り返し、軽快に舞い納める。

(出の歌)

へ赤石田もてで稲刈れば 稲も刈らねで猿子手招ぐ 猿子手招ぐ テへ口

テへ口

(舞の歌)

へ吉奈戸や吉奈戸や鶴と亀とかんまくれば さいさ廻るとて流れこむ、ア

エサー サ

(中歌)

へそれ長調と大獅子舞なれや おゝ祭や祈禱舞いて候 祈禱舞いての御利生には それ目出度い事を申そうか 久しい事を申そうか それ目出度い事に通り返しては先に舞ひたる大きな事なれ

へ只今舞ひたるは三羽猿公にて候 先に舞ひたる大きなは背も高き色も白し 只今舞ひたる三羽猿公は背も小さく色も黒いしなれども 先に舞ひたる装束にはいかに劣らんとして候 それ此の所百余百度十五万才までしっとりあんのんとして踏み固めたる吾がための三羽猿公にて候

へそれ天笠の本立川原に登り登って見てやれば 一段登れば不動の浄堂 二段登れば仁王の浄堂 三段登れば釈迦の浄堂 釈迦の上に召したる麻の

衣をつくづくと見てやれば 手の毛で織ったる錦の事なれば 法華経の坊主ばかり心も言葉も及ばんとして候

へ直正直は人できでもうきさすや 吹く笛も吹きさしや 吾等どうどうおかしさよ あはつはと大笑い候

へそれ何ひたるしきのおつとる顔にひきあててびひびげ ほっしくきりきり長々と大廻り候

へ我等が拍子は鹿島で習うたや鹿島拍子 三島で習うたや三島拍子 上の拍子や八拍子 下の拍子も八拍子 合せて十六拍子 太鼓の拍子ですとんとんと大パイ候

(舞の歌)

へハア浜の浜松 浜の松女才祭こそ目出度さよ

⑥鳥舞…肌着に羽織、袴姿、頭に鳥兜を被り、白布で口を覆った仕度で舞う二人舞(写真4)。二人が向き合い、前に屈んだ後、両手で兜の羽根を掻き上げる所作が鳥の羽ばたきを思い起こされる。「とりら とりら」という呪文のような神歌に合わせて舞う。中歌の間は向き合って座り、中歌の詞に合わせて兜の羽根を掻き上げる。中歌の後には「去って去さらば」の歌に合わせて軽快に舞い納める。

(前歌)

とりら とりら よはやとりら あよいよいよ あのよ このよ えんや
そら

(中歌)

へ 日本の神々は 善光寺の如来の塔のその庭に 中にも優わし諏訪の明



写真4 鳥舞

神はらんかと明けて踊うたりや 高天原に神遊ぶ やーら面し後番は舞
星は明星 夜星 光星 御番にあたって舞さぶろうや 明星 夜星 光星
御番ならとりとのえて 拍子を揃えやー

(舞の歌)

へ去つて 去さらば日に三度の尺丈来たらば 天間天上かんざしたりそれ
を思えば高天原に神遊ぶやー ステンテンテン テテテ ヨイリライソ
ラ

⑦ ばんがく…肌着、袴、左右に日月を描いた立烏帽子を被り、白い男面を着け、扇を手に持つという仕度の番楽太郎の一人舞で(写真5)、露祓いの舞とされる。四方に扇を振り上げるように大きく舞い、力強い足踏みで大地を踏み鳴らす。



写真5 ばんがく

⑧ よらしやら…よらしやらは肌着に股引姿で、顔に黒い道化面を着け、手拭

いで頬被りをし、扇を手に持った仕度で、「よらしやら」という囃子詞に合わせて足を踏んだり、飛び跳ねたり、始終軽快に飛び跳ねるように舞う。他の番楽では「品ごき」「ゆらゆら」などとも呼ばれる。他所では腰に刀の鞘を差している場合があるが、伊勢居地では刀の鞘は差さない。

⑨ 番楽太郎…肌着、股引、頬被り姿で道化面姿の番楽太郎の舞。お囃子の「そーりや、そりや、番楽太郎、すなごき太郎」の歌に



写真6 三人餅搗

合わせて飛び跳ねるように滑稽に舞う。

⑩ 三人餅搗…よらしやらと同様に肌着、股引姿で、手拭いで頬被りをした三人の舞手が、右手に扇、棒の先に襷を吊した搗き棒を左肩に背負って登場する(写真6)。三人の舞手が三角形を描きながら軽快に舞う。次に、搗き棒に吊していた襷を肩に掛け、搗き棒を使って餅搗きの様子を演じるかのよう
に舞う。餅が搗き終わると再び搗き棒の先に襷を吊し、扇を手に持つて舞い納める。

(三人餅搗きの歌)

へあのめらす めめも形もよけれども そーらよけれども
へ山武士や腰に下げたるほらの貝 そーらほらの貝
へあの家柄なじよだ大工が建てたやら そーら建てたやら
へあのめらす 親にかくして金つけた

D 武士舞

⑪ 熊谷次郎…最初に肌着、股引の上に鎧を着け、頭にはシャグマを被り、白布で顔を隠した熊谷次郎が剣を持って舞台上に登場し、足を強く踏みしめながら舞う(写真7)。中歌になると、剣を扇に持ち替え、扇を持って勇壮に舞う。

この舞は源平合戦の一谷の戦いの源氏の武将・熊谷次郎直実と平家の公達・平敦盛が戦う様子を描いたもので、本来は熊谷の登場の後、敦盛が登場し、最後に二人の立ち廻りとなるが、現在の伊勢居地番楽では敦盛が登場しない一人舞となっている。

(前歌)

へ向ひ舞台の四つなるすまに



写真7 熊谷次郎

(中歌)

へ熊谷や 熊谷や 味方に弓をば引くと見る
戦野つづいてもものが出る

へやらいたましや敦盛は熊谷殿の手にかゝり
後 朝の露と惜しむけり

(舞の歌)

へ熊谷次郎や直実や敦盛殿を舞ってみろ

E その他

⑫空白舞・肌着に襷掛け、股引、鉢巻姿の四人の舞手が白を中心に廻りながら、白の縁や胴を棒でリズムカルに叩いたり、向かい合う二人が棒を打ち鳴らすテンポの良い舞(写真8)。伊勢居地番楽では番楽の最後にこの舞を舞う。舞手の周囲では団扇を仰いだり、声援を掛けたりと地元では観客が非常に盛り上がる舞である。



写真8 空白舞

(前歌)

へ伊勢はなし 津でもう津は伊勢でもつ アヨイヨイ 尾張名古屋はやん
さ城でもつ

へ鳩はどごさ行く鳩と鶏と遊びに出たば 鳩は豆喰し鶏りや米鳴ふ イヤ
サカサツサ 其処におちよこらやと銭が百落ちた 鳩が拾ったとて あつ
ちの方に引張るやら 鶏拾たとて こっちの方に引張るやら 其処にもつ
そらやと蟻こどんが出たば アイヤサカサツサ 我だ何をするけんかをす
るな けんかするなら俺が分けつける 鳩は八文 鶏二文 あとのさえあ
とのありきり蟻こどんの儲だえ
へおけさおけさ何をする 行燈の蔭でオヤオヤ 可愛い可愛いあんさまの
帯くけるオヤオヤ

(4)獅子舞の仕度

獅子頭と番楽の道具類は、かつては地藏堂内に保管していたが、虫がつくので現在は地区の公民館で保管している。

獅子頭は神舞で使われるものとやさぎ獅子のものがある。神舞で使われる獅子頭(縦29・5cm、横120・5cm、高さ17cm、鼻

高9cm)は額に生駒家の家紋である半車の紋を戴いている。獅子の髪は麻製。幕(縦170cm、横151cm)は巻毛と半車紋が染め抜かれている(写真9)。

一方、やさぎ獅子の獅子頭(縦25cm、横15cm、高さ11・5cm、鼻高7cm)は小振りのもので、初午祭で子供たちが家々廻りをする際にも使用される。額には金の鏡がはめ込まれている。髪は紐で幕は半車紋に水玉模様(写真10)。

(5)番楽の仕度

番楽幕(縦232cm、横282cm)(写真11)は翁千歳、三番叟が描かれ、左下には「伊勢居地獅子舞保存会」と書かれている。年代は不明。他にも「伊勢居地若者師子舞連」と書かれた古い幕(縦185cm、横312cm)や蕨折幕(縦250cm、横430cm)などがある。

面は一二点あり(写真12)。①可笑面(縦19cm、横14cm)、②女面(縦20・5cm、横



写真9 獅子頭



写真10 やさぎ獅子獅子頭



写真11 番楽幕



写真12 面①～⑫

13 cm) は蕨折で使用されるもので、福という焼き印が押されている。③女面(縦21 cm、横13 cm、福の焼き印あり)。④鬼面(縦21・5 cm、横14 cm)には裏に墨書があるが擦れて読めない。⑤三番叟面(縦21 cm、横14 cm)は三番吉奈戸で使用される面。⑥翁面(縦19・4 cm、横14 cm)には裏面に墨書があり、「大庭一光宝久／大工正蔵作／大正十一年六月」と書かれている。⑦女面(縦19・7 cm、横13・4 cm)、⑧武士面(縦20・9 cm、横14・2 cm)、⑨番楽面(縦19・5 cm、横14 cm)、⑩番楽面(縦19・6 cm、横14・8 cm)、⑪道化面(縦20・7 cm、横14・2 cm、福の焼き印あり)は番楽太郎で使用されるもの。⑫翁面(縦19・2 cm、横14・1 cm、福の焼き印あり)。他には鳥舞の鳥兜や番楽の衣装のほか、餅搗きの搗き棒、山の神の斧、熊谷次郎の鎧、一人餅搗きのややくなどの道具類がある。また、楽器類としては胴の中に「文久三年大工与右衛」と記された太鼓などがある。

(6) 歌・節・言立など

『師子舞神歌』(昭和二十六年七月)、『伊勢居地獅子舞神歌』(昭和五十八年正月吉日)、『伊勢居地神歌』(昭和六十三年八月)などが残されている。なお、

昭和六十三年の『伊勢居地神歌』は、『師子舞神歌』の写しで現在の神歌を歌う際に用いられているものである。

由利本荘市・にかほ市の休止中・消滅した番楽団体の調査でも聞かれた話だが、番楽では笛が重要だという話をよく耳にする。伊勢居地番楽の昭和四十二年十二月の聞き取りをまとめた前述の『獅子舞を語る』でも「いずれの方面でも一番むずかしいのは笛であります」というように語られているが、伊勢居地に限らず、舞を覚える時の口唱歌は笛の節を唱えるため、番楽は笛の音を聞かないと舞えないという。ちなみに口唱歌とは、お囃子の楽器の節を口で唱えることで、神楽の舞を習得する場合、太鼓や笛の節を唱えながら舞を覚えることが多い。全国的には笛より太鼓の唱歌で舞を覚えることが多いようだ。番楽の場合、太鼓のリズムが単調なため、笛の音で舞を覚えた方が習得しやすいものと思われ、笛の口唱歌を用いるのであろう。

番楽の調査を行ってみると、保存会には笛の担当者が一人しかいないという場合が多く、笛を吹ける人が何らかの原因で参加できなくなってしまう、番楽ができなくなってしまったという話を何度も耳にした。伊勢居地番楽でも平成二十九年は笛を吹ける人がいなくなり、八月二十七日の六夜待ちの獅子舞は中止となり、九月三日に行われたにかほ市主催の鳥海山伝統芸能祭では、テープに合わせて舞を披露していた。笛を吹ける人がいなくなり、番楽が継続できなくなり、そのまま何年も休止している団体や、消滅してしまった団体の事例もあり、早急な笛の伝承が必要だが、笛の伝習を行っている最中ではテープを用いても番楽を披露する機会を継続し、伝承を絶やさない努力が必要とされる。伊勢居地番楽では、現在笛の復活に取り組んでいる。今後の笛の復活に期待したい。

(7) 昔(過去)の状況

かつての伊勢居地村は横岡でを含む大きな集落で、伊勢居地のほかにも桂

坂、水岡、横岡にも獅子舞があったが、現在も活動を継続しているのは、伊勢居地と横岡だけになっている。明治時代には二十十日の日に獅子舞を舞っていたが、その後、中断したようだ。その後、大正九年（一九二〇）に復活した様子は、昭和四十二年十二月に伊勢居地の獅子舞の長老たちから聞き取りを行った『獅子舞を語る』に詳しい。獅子舞が中断された後、大正九年頃に、獅子舞を知っていた伊東文助翁が延命地藏尊で遊ぶ子供たちに獅子舞を舞うと当時は貴重だった砂糖をくれるということで、子供たちは喜んで獅子舞を舞うようになった。その当時は笛や太鼓もなく、老人の口唱歌に合わせて舞っていた。こうしたこともあり、伊勢居地では再び獅子舞復興の気運が高まり、大人たちも仕事の合間に舞や笛の練習をするようになり、しだいに仕事の後に地藏堂に集まり、舞を知っている者が若者や子供たちに舞を教え、みんなで練習に精を出すようになった。そして、祭、お盆、二十十日などで獅子舞を披露できるようになったのだという。当時の出し物は次の通り。

- 一 神舞、二 後獅子、三 ヨシナド舞、四 番楽舞、五 翁舞、六 熊谷次郎、七 三人餅つき、八 太郎（番楽太郎）、九 鳥舞、十 甚々舞、十一 三人立、十二 影清、十三 一人餅つき、十四 ユウラシヤラ、十五 ウレシキ舞、十六 木曾舞、十七 小号の舞、十八 ドウヤ舞、十九 万歳、二十 バクチ舞、二十一 山の神舞、二十二 ヤサギ獅子舞、二十三 空白舞

これを見ると、西目町の田高神楽や中沢番楽の舞われていた万歳やバクチ舞などの余興の舞もあったことがわかる。

伊勢居地では番楽とは呼ばず、獅子舞（ししめー）と呼んだ。現在でも八月二十六日晚に地藏尊の堂内で六夜待ちの獅子舞を行っている。六夜待ちの晩は午前三時頃に六夜待ちの月が出るが、現在では月待は行っていない。これについても聞き取りを行ったが、現在の保存会員の記憶でも六夜待ちをし

ていた頃の話覚えていない者はいなかった。しかし、現保存会員の知っている限りでは、日程を変えたことがなく、獅子舞は昔から八月二十六日の晩に行われ、日程を変えたことはないという。

（2）初午祭

にかほ市内の二月の初午祭では、子供たちが集落内の家々を廻り、稲荷神社の御札を配る。伊勢居地でも毎年二月の初午の日に初午祭として稲荷神社の御札を子供たちが集落内を廻る。伊勢居地の場合、番楽の獅子頭を奉じて家々を廻る点に特色がある。

伊勢居地稲荷神社の初午祭では、子供たちが獅子頭を先頭に太鼓、鉦、稲荷神社の赤い奉納幟を持ち「はちまんだー、はちまんだー」と声を掛けながら、伊勢居地稲荷神社から行列を始め、集落内の屋敷神として祭られている稲荷五社をすべて廻る（写真13）。「はちまんだー」の掛け声はかつては「はつんまー、はつんまー」と掛けていたとされる。これが段々と「はつまん」に変わり、今の「はちまん」に変わったのだという話が聞かれた。平成二十八年二月六日に行った調査の際は、少人数の子供たちの行列だったため、幟は一本だけ持っていたが、かつては多くの子供たちが行列に加わり、集落内の全戸の家の奉納幟を持って歩いたと言う。また、先頭の子は羽子板を二枚持ち、かちんかちんと羽子板を打ちながら歩いたという話も聞か



写真13 初午祭①



写真14 初午祭②

れた。

稲荷神社や稲荷祠の神前では、獅子頭を持った子どもが「正一位稲荷大明神」と唱えて獅子頭を二度歯打ちをする。稲荷社を廻った後は、一度公民館で休憩をした後、各戸への御札配りとなる。家の玄関先では、獅子頭を持った子供が「正一位稲荷大明神、五穀豊穰、家内安全、火の用心」と唱え、歯打ちを二回し、笏に載せたお札を家の方に渡し（写真14）、初穂料をいただく。一軒あたり一分程度で、この調査の時は二時間で四〇軒ほど廻っていた。

かつて初午祭に参加した方の話によると、御札を持つ子供をタユウ様と呼び、タユウ様が「正一位稲荷大明神」の唱え言を終えると、獅子頭を持った子どもが「お頭おいで」と言ってお頭打ちをしたという。以前は座敷にあがることもあったという。

初午祭はかつては子供だけでおこなわれた行事だったが現在は親が引率し、稲荷社参りを小学生が、各戸への御札配りは中学生の役割とされていた。しかし、現在の伊勢居地に中学生はおらず、たまたまこの年は小学生六年生がインフルエンザで学級閉鎖となっていたため、小学生四年生以下四人の子供たちが親たちに引率されて家々を廻っていた。また、子供たちが持つて廻る獅子頭は番楽のやさぎ獅子の頭で、初午祭の時は、獅子の幕を初午のものに付け替えて使っている。普通の獅子頭は子供たちには重いため、やさぎ獅子の獅子頭を使っているのだという。初午祭用の幕には「昭和三十九年二月初午 正一位稲荷大明神」と書かれている。

伊勢居地では初午祭は番楽とは関わりのない行事として捉えられているが、由利本荘市矢島町、鳥海町の番楽の盆獅子や岩手県側の神楽の春祈禱との共通性も見える。そこでこの初午祭についてももう少し詳しく見ていきたい。

伊勢居地のような番楽の獅子を伴う初午祭は、横岡でも行われている。そのため次に横岡の初午祭について見ていくことにする。横岡の初午祭は平成

二十九年二月十一日、十二日に調査を行った。初午祭の宵宮にあたる十一日の夜籠りには、午後五時に中学生による獅子舞があり、その後は直会となり、次に石持ち占いが行われた。この時に舞われる獅子舞は、御宝頭、十二段の獅子舞、御頭舞と呼ばれているもので、翌日の初午祭の家々廻りの際に配る御札、笏、神饌（スルメ）をそれぞれ獅子に嘯ませて浄めていた。翌十二日は初午祭の家々廻りが行われた。横岡の家々廻りでも伊勢居地の初午祭と同様に集落の家々を廻り、玄関先や座敷で獅子舞を舞い、稲荷神社の御札を配る。この時の調査では、朝九時半に地元の高校生一名と中学生五名が公民館に集まって家々廻りの準備を行い、その後、公民館で獅子舞を舞った後、集落の全三六戸を夕方まで廻った。

獅子舞の一行は太鼓を打ち鳴らし、正一位稲荷神社の幡を持って家々を廻る。横岡では座敷上がった舞う家があり、この年は三軒の家座敷で舞っていた。この時の三軒の家は一軒は子供が産まれた家（写真15）、残り二軒は立願の家であった。座敷で舞う場合は「お頭頂戴」と獅子舞の子が声を掛けてから家に入り、座敷で夜籠りと同じ舞を舞う。舞は三段構成になっており、二段目で笏を嘯むだけで、夜籠りの時のように御札や神饌を嘯むことはない。舞が終わると太夫役の子が家の方に御札を渡し、初穂料をいただき、簡単な直会となる。一方、玄関先で舞う場合は、玄関先で「お頭頂戴」と声を掛け、家の方が顔を出すと歯打ちを二回し、御札を渡し、お札を頂いて終了となる。

横岡の初午祭は伊勢居地と同じ内容だが、伊勢居地の方は内容が簡略化されていて今では聞き取りでしか確認できない部分も横岡の初午祭では実際に行われている。かつての伊勢居地村は横岡までを含んでおり、互いに交流



写真15 横岡初午祭

があつたため、行事にも共通性が見られるのかも知れない。

また、横岡番楽と初午祭の獅子舞にともに関わる笛吹きの方の話によると、番楽と初午祭の獅子舞の笛は、笛の調子（笛の長さ）も曲も全くの別物で、こういう点からも、初午祭の獅子舞は、元々は番楽とは異なる行事であつたことがわかる。

ところで、この初午祭の獅子舞は、御頭舞、御宝頭、十二段の舞などと呼ばれる近世の修験者が担った獅子舞で、番楽とは異なる芸能とされている。この番楽における祈禱の獅子舞の有無は、神田より子氏が明らかにしているように、近世の修験の組織形態に負う点が大きい。例えば、修験が一山組織を形成し、修験集落を築いた小滝の場合、修験者が御宝頭と呼ばれる獅子舞を巡行し、村人が番楽を担うというように、近世における担い手が異なり、かつての修験者の芸能がチヨウクライ口舞と御宝頭の舞であり、村人の芸能が番楽であるように、近代以降は個別の芸能として引き継がれてきた。一方、鳥海山北麓の矢島修験は小滝修験のように一山組織を形成せず、修験者が村に入り、早い段階から村人とともに獅子舞の廻村を行ったため、祈禱の獅子舞が番楽の中に定着した。そのため、鳥海本海流獅子舞番楽や矢島町の番楽には獅子舞がある。このように、近世の修験の形態の違いがそのまま近代以降の番楽における祈禱の獅子舞の有無となった。また、この初午祭の獅子舞の源流である御頭舞（御宝頭、十二段の舞）、本海流獅子舞番楽など旧矢島領内の番楽の盆獅子は、岩手県・青森県東部の旧南部藩領内の神楽で行われる春祈禱などと同様に、近世には修験者が率いる獅子舞が周辺地域を廻り、獅子舞を舞って御札を配布した修験の廻村行事であり、近代以降、村人たちがこれを継承し、現在に伝えたものである。獅子舞の形態は異なるが同じ機能を持つ行事が、東北各地に伝承されており、これが東北の神楽の獅子の大きな特徴とされている。これが伊勢居地や横岡の初午祭にも残されており、初午祭の獅子が番楽という芸能の範疇から外れると、決して軽視して

はならないのではないだろうか。また、由利本荘市西目町の田高番楽のように、祭礼の際にまず御頭舞が集落内を廻った後、神社の境内で番楽を行うというように、かつては御頭舞と番楽が同じ担い手たちによって祭りの中で共に行われており、御頭舞が番楽に流入する事例も今回の調査の中で見受けられた。なお、田高の場合、御頭舞は番楽と異なる芸能であるという認識は示されなかった。このように、近代以降の担い手の変化によって芸能の変化が現れる。中には元来は別々に伝承されていたものが、継承者不足などから互いに手伝うようになり、いつの間にか担い手が一緒になるという事例もあるだろう。伊勢居地や横岡の初午祭の獅子舞はこの過渡期にあるように思われる。

次に、この初午祭の獅子舞（御頭舞）の伝承がどこからやってきたのか、もう少し考えてみたい。伊勢居地での聞き取りの中で、伊勢居地の鳥海講が鳥海山に登った後、大物忌神社吹浦口ノ宮の御札を戴くという話があつた。また、横岡でも御頭舞の笛は吹浦から習ったものだという話も聞くことができた。この大物忌神社吹浦口ノ宮は、近世は江戸筑波山護持院下となり新義真言宗に属したが、吹浦修験の拠点であつた。五月三日の例大祭で吹浦田楽（花笠舞）とともに御頭舞が奉納されているが、現在では御頭巡行と称されている御頭舞の廻村行事が近世から行われていた。筒井裕氏の調査によれば²²⁾、蔵岡修験の御頭も同様に巡行を行っており、吹浦が主に遊佐より北を、蔵岡が飽海郡・東田川郡・西田川郡というように両者の棲み分けがされていたという。吹浦の御頭巡行は、大物忌神社宮司を筆頭とする御頭連中を毎年一月に地元の公民館や神社等に迎え、そこで御頭舞を依頼し、御頭舞奉納と御札を受けるといふものである。この吹浦の御頭舞の巡行の範囲は近年まで伊勢居地や横岡にも及んでいた。これらのことから伊勢居地や横岡には吹浦との関係性が窺えるように、初午祭の獅子舞もこの吹浦の御頭舞の影響が強いものと考えられる。なお、近世の文書でも吹浦の獅子を横切った他の獅子を有

する修験が吹浦に謝罪する内容のものが伝わっており、吹浦の御頭舞の権威が強かったことがわかる。吹浦の御頭舞が巡行する地域で行われる御頭舞は、吹浦の御頭舞と時期をずらして廻ったという話もあり、伊勢居地や横岡の獅子舞は吹浦の御頭舞と鉢合わせすることのないように巡行する時期をずらした結果、現在の初午祭に定着した可能性も考えられる。

(註)

(1) 『獅子舞を語る』語り…兼子甚吉、大場八十吉、記…菊地與蔵、私家版、昭和四十三年。

(2) 筒井裕「昭和期における鳥海修験者の神札の調製と配札」『山形民俗』十九号、山形県民俗研究協議会、二〇〇五年十一月、2～9頁。

(参考文献)

神田より子『鳥海山修験―山麓の生活と信仰―』岩田書院、二〇一八年三月。

(神田童浩)

第二節 釜ヶ台番楽

(一) 地域の概況

釜ヶ台は冬師山と南由利原に囲まれた沢合の北部に位置する。南は冬師新田村、西は冬師山を経て伊勢居地村に接している地域である。鳥海山北麓台地にある村で、西は海拔五〇〇mの仁賀保山地となつて、東には大谷地沼がある。近世は出羽国由利郡西小出郷のうちとなつていて、本荘藩六郷領であった。この釜ヶ台は鮎川郷の屋敷村の人びとによる高冷台地の開発村として寛永三年(一六二六)頃に成立した新田村とされる。『仁賀保町史』によればこれより早く、最上義光時代(中世末)にはすでに開発が始まっていたといわれ、矢島、由利の村人が開発を手がけたが、村からかなり遠いことから

管理が届かず、ついに冬師(旧仁賀保町)の四郎兵衛の管理下に入ったとされる。その後、元和九年(一六二三)頃に由利鮎川(旧由利町)の阿部茂右衛門一族が本格的に釜ヶ台の開発に乗り出し移住したというのである。

以降は順調に開拓が進み、高冷地の冷害と闘いながらも着実に発展してきた村である。『秋田県史』によれば、元禄十一年(一六九八)の出羽国由利郡之内村高帳に、「六郷伊賀守拜地中野村之内新田釜ヶ台村」とあるといい、高六八石六斗七升八合で、寛文元年(一六六一)の成立と記されているから、寛永三年の成立説との矛盾がある。ただこの村は新田開発によつて成立したことに間違いはなく、茂右衛門家の出身である屋敷村との関係も近年まで強固であったことがわかる。享保十五年(一七三〇)の村高は六一石との記録もあり、元禄十一年からみれば村高は少し減っているのだが、それは寒冷地のためとみられ、かなりの苦労があつたとみられる。

『羽後国由利郡村史』によれば、明治初年の戸数が四四軒、人口二二六人、耕地四町七反六畝二六歩。馬七一匹を飼育し、馬や炭を平沢村(旧仁賀保町)、金浦村(旧金浦町)などに販売したと記されている。昭和三十年から仁賀保町の大字となつた集落である。

(二) 名称・所在地・上演期間・場所

現在は釜ヶ台番楽といわれるものだが、元は獅子舞と呼ばれていた。釜ヶ台番楽と通称されるようになったのは、昭和四十八年に秋田県の無形民俗文化財に指定されことに起因するであろう。文化財の指定名称は釜ヶ台番楽となつている。これより以前の、昭和四十三年八月の発行された言い立て本(私家版・ガリ版印刷)には「釜ヶ台の獅子舞」とあり、「釜ヶ台獅子舞保存会」という名が表紙に書かれていることより、従来は獅子舞という名称がこの地域の通り名であったことがわかる。

その年の番楽はじめは七月一日の頭固めからである。この日を神降ろしと

もいった。これに対して幕納めは現在、十一月上旬でおこなわれるが、かつては九月八日であった。番楽は、頭固めから、幕納めまでの間に演じることが出来るもので、それ以外は正式（全演目）に演じてはならないという不文律があった。

番楽は集落内で演じることを基本としながらも、余所から頼まれるとそれに応じて出向くことがある。例えば、獅子神社の講中のあった長坂、徳沢（いずれも旧大内町）などに出向いて、二、三日は泊まりがけでおこなったもので、最初の夜は番楽の全舞を披露して、次の日朝から獅子で悪魔払いの門打ちをして回ったという。ただし、こうした余所に出向する時にも決まり事があった、村から出るときには先ず村内を小路渡りの拍子をつけて廻り、必ず阿部茂右衛門家にて獅子舞を一番奉納してから出向いた。番楽連中は村に帰る時にも、村の入り口から連中の番楽宿まで再び拍子（囃子）をつけて再び茂右衛門家で獅子舞を奉納してもどるというものである。この茂右衛門家は釜ヶ台の開拓の祖ともみなされ、旧家でもあり親方の家とも称されてきた。さらに茂右衛門林（山林）と獅子頭の関係もあって、鳥海山から来たというお獅子様が茂右衛門林に祀っていた薬師神社の屋敷を間借りして鎮座することになった、というのが今の獅子神社という。それで間借りを感謝し獅子舞を奉納することになったのだと伝承されてきた。

番楽を演じる場所は、現在は釜ヶ台多目的会館であり舞台のつけられた集会所でもある。昔は大きな民家を借りて宿として舞ったという。

(三) 歴史・由来

この番楽の起源は不明であるが、伝えによると釜ヶ台と冬師（いずれも旧仁賀保町）と屋敷（旧由利町）の三村の番楽師匠は同じ人であったといわれる。それを辿れば本海行人（京都醍醐寺三宝院に属する修験者）を師匠としたらしいという。ただ、冬師、屋敷は三拍子であるのに対し、釜ヶ台は五拍

子とされることより、三拍子は比較的楽に舞える拍子で、五拍子の場合には念入りで難儀な舞態であるというのだ。ために、釜ヶ台への伝承は本海行人が若い頃に伝承していったのだといわれる。だとするならば、冬師より早い時期に番楽が伝えられたことになり、その時期は中世末か近世初めということになるだろう。

この番楽は年三回の公演があつて、八月十四日、二十日、二十六日である。村の年中行事としても番楽はこの三回を欠かすことはなかった。戦前はさぶる盛況であつたが、戦後は神仏尊崇の念が薄れることによつて、番楽に対しても尊重の念が衰退していったという。昭和三十八年頃は、番楽を演じてきた一部の古老の無理解から若者との亀裂が生じ、番楽そのものに大きく影響して番楽の衰退となり、消滅の危機さえあつたとされる。しかし、昭和四十一年に集落の有志が保存会を立ち上げ昔日の姿にもどそうとし、集落一丸となつて番楽を支えてきたのである。その後も集落組織で支え、神社部の設置、講中などの信仰面の組織や維持方法も改められ、それによつて番楽と関わる年中行事を保持しようと努めてきた。

(四) 現況と過去の状況

釜ヶ台番楽はすこぶる年中行事が多い。

神降ろしともいう頭固めは七月一日であつたが今では中旬の都合のよい日選ばれている。この日の夕方、番楽連中は釜ヶ台多目的会館に集まり、まず神棚の前の祭壇に獅子頭と、翁面・太郎面・サンバ（可笑）の面を安置し、神酒、蠟燭などを供える。そして、番楽連中からは会場に着くとめいめいでこの神前を参拝する。やがて、先ず獅



写真1 初棚供養公演「サンバ」

子舞を一番舞い、次に「切り拍子」という囃子を奏でる。切り拍子は舞と舞の間に奏でる囃子のことだ。その後は総会のような形で、その年の出演日程を確認したり、会計などを報告する。そして直会となる。この日以降は週に二、三回の練習が始められ、盆の番楽披露の本番を待つ。

八月十四日の夕方は初棚供養として番楽が釜ヶ台多目的会館で披露される(写真1)。かつては初棚(新精霊・初盆)を迎える家を借りて番楽の全演目が演じられたもので、こうした舞は盆に迎えられたホトケに上げるためだとされてきた。

今、伝承されている演目は、神舞・獅子舞・拝舞・サンバ・翁・番楽太郎・鳥舞・二人舞・餅搗き・若子舞・さかさま番楽・三人立ち・熊谷次郎・牛若弁慶・やっちゃぎ獅子・ばくちサンバ・四人空白、である。根子切り舞・屋島もあつたが現在おこなわれていない。演目のうちで、ほぼ中頃になるとお花の披露がなされる。番楽衣装で木の枝(樹種は決まっていない)を持ち、扇を採り、幕の前に出て座り、「東西東西」と始めて目出度い口上を述べて、上がったご祝儀の内容と氏名を述べ、お礼をいうものである。この時、木の枝を必ず前に翳し、扇を手前に添えて述べるところに特色がある。

番楽宿というものがあつた、連中頭の家を宿として、獅子頭やお面を保管している。たいていはそこから支度をして出発し、コウジヨ渡り(小路渡り)の拍子を囃して多目的会館に向かう。さらにそれより前の夕刻には、呼び太鼓といって太鼓を叩いて村中を触れ回る行事もある。かつての番楽宿は獅子頭などを年中保管管理をしていたことから、宿に対してお礼をすることになっていた。お礼は金銭ではなく労働奉仕を主として、五月には田



写真2 悪魔祓い・初棚の家での獅子舞

圃の馬耕掛けを皆で奉仕したり、夏には宿の家の所有する山の下刈り作業をしたという。宿でもこれらに対して朝食などを振る舞った。

八月十五日は朝から悪魔祓いといって、村中の家々を廻り門打ちをして、初棚の家では座敷に上がって施餓鬼棚の前で、獅子舞(写真2)と拝舞(写真3)を披露する。所望する家では餅つき舞もあるという。さらに昔はこれに神舞も加えられていた。この悪魔祓

いでは村中を廻ることになっているのだが、最初に獅子宿で獅子舞を演じた後、茂右衛門家から舞い始めることが恒例である。茂右衛門家は村一の旧家であると同時に、釜ヶ台の開拓を先駆けて村を起こした人ともいわれることから大事にされてきたと思われる。茂右衛門家が所有する山林のうち、今でも茂右衛門林という地名が残されていて、獅子のコウジヨ渡り(小路渡り)の拍子にある神唄にも出ている。「日が暮れて、茂右衛門林を通たれば、木の葉を莫産にして、柴を枕にー、柴を枕にー」という文句であつた。

この日は村中の門付けをするわけだが、その道中では三カ所の村外れでの門祓いといって、ここでも拝舞をおこなう。拝舞というのは武士の出立で面つけて舞うものだが、拝舞というように本来は神様を拝む作法の舞いだといわれる。拝舞はこの他たいていの番楽に出される。

この十五日はホトケ送りとともされる日だが、悪魔払いの獅子が来ないとホトケを送り出してやれないとされたため、皆の家では獅子の訪れを待っていたという。釜ヶ台のホトケ送りはこの日、ガツギ馬や供物、花などをすべて墓で焼いてくるもので、川に流したりしないホトケ送りの行事である。この獅子の悪魔祓いは、十三日の冬師の悪魔祓いを「迎え獅子」と呼ぶのに対し



写真3 初棚の家での「拝舞」

て、釜ヶ台では十五日が「送り獅子」だとされている。この理由は定かではないが、十三日の盆迎えと十五日の盆の送りの日が選ばれて獅子が回ってくるためという意味であろう。

八月二十日は送り盆ということで夜に多目的会館で番楽が披露される。番楽の始まる前に、触れ太鼓で村中を回るのも恒例だ。宿で支度をしてこの会館までコウジョ渡りの拍子をつけて渡ってくる。後は楽屋に面と獅子を安置して獅子舞から始めて番楽諸曲を舞うが、最初に神舞(写真4)、次に獅子舞(写真5)、そして拝舞(写真6)、となり、それ以下は決まった順番はないがほぼ全演目の披露となる。最後演目にも決まったものはみられない。たいていは公演が終わると宿で直会をするもので、盛大な宴会ともなるようである。昔から「一杯酒は橋から落ちる」といって、必ず杯は重ねて飲むものであったためである。

八月二十六日は御利益様(ごりやくさま)といつて、この日の夜は薬師神社に番楽を奉納する。御利益様(ごりやくさま)というのは六夜待ちのことで、別当(神社部の当番)が神社に供物をして支度しておく。村の人びとはこの日の夜にお供えにおひねり(お米を少し半紙に包み上部を擦ってこぼれないようにしたもの)や饅頭や菓子、笹巻きなどを供えて拝む。それに酒肴を持参してここで直会をする。昔は、この日、神社にお籠もりをして夜半に出る月を待ち拝むものだった。番



写真4 神舞



写真5 獅子舞

楽連中は、この御利益様に薬師神社で番楽を奉納することになり、宿からコウジョ渡りの拍子を奏でながら神社まで来て、拝殿で先ず獅子舞を奉納し、次に拝舞をおこなう、その後は何の演目でも一、二番舞うものである(写真7)。六夜待ちの御利益様は夜半に出る三日月が船のようになって、それに帆柱として蠟燭が灯ったようにみえるものを拝むというものだ。そのため、夜半まで神社に籠もる行事で、これは主に女性が多い祭りとなっている。

次いで、今では八月末か九月初めに町村(旧由利町)の瑞光寺の道元講でも番楽が舞われる。釜ヶ台の村人はほとんどがこの寺の檀家であることと、道元講の当番が村に当たるともあり、特に念入りに番楽が奉納されるといふ。ここでの番楽は唯一、日中におこなわれるもので、この時、番楽連中の境内に入るにはコウジョウ渡りの拍子が奏でられて、本堂に上がるようになって

いる。舞いは本堂で演じるものだが、仏前に獅子頭とお面三点が飾られ、幕を張りその後ろに紐を張って面を吊し、ここを楽屋として着替えなどの支度をする。たいていは午後一時過ぎから始められ、演目ではやはり神舞・獅子舞・拝舞が最初となり、それに番楽諸曲が十番以上披露されてきた。ここでも演目の中頃にはお花の御礼口上がある。瑞光寺での番楽披露は新しい行事とされるが、既に始まりから三〇年は立っているとされる。



写真6 拝舞



写真7 二十六夜講での一人餅搗き舞

九月八日はかつて薬師神社の秋祭りでもあった。この日は二百十日（九月一日）の風祭りのお籠もり祈願のお果たし日ともされ、薬師神の縁日である八日選ばれたためであった。昭和五十年代まではこの日を秋祭りとして神社の祭礼であった。獅子神社からのご神体のお下りもあり、ご神体は再び神社に夜に納められた。この日は、「八日の獅子舞」といって民家を宿として番楽が舞われた。番楽は夜の七時過ぎから始められたことから、終わるのはたいてい真夜中に近かったという。

番楽の幕納めは、かつてこの秋祭りの九月八日としていたが、今日では十一月の中頃となっている。それは仁賀保町時代には文化祭などに出演するなど、道元講など公演が普及することによつた番楽披露の機会が増えていったからであるらしい。

幕納めは釜ヶ台多目的会館で夕方からおこなう。床の間に獅子頭と番楽面を三点飾り、神酒と蠟燭を供える。この日は獅子舞と拝舞が舞われて終わる。

釜ヶ台番楽では臨時に舞われる番楽もある。

秋の作祭りといって、その年の豊作を見込んで稲刈り前に神社に上がつて番楽を奉納するものである。獅子舞から始めて、四、五番の番楽舞が披露される。これは毎年の恒例ではなく、その都度、村の主立ち者が決めておこなう収穫祭のようなものだった。

また、家の普請の際に、棟上げ式に変わる地固めという柱がらみの舞もおこなわれる。これは本来、「地固め」と称するから、棟上げ前の柱立ての時に地鎮をかねて祈願する行事である。平成三十年八月三十一日におこなわれた工藤平吉家の場合は棟上げが既にされて屋根も葺かれた後であったが、この日に柱がらみの舞がおこなわれた。一階の床の間の付く部屋に簡易な祭壇を設置し、それに御幣三本立て、その前に獅子頭を安置し、米、酒、鏡餅（一重ね）、鯛、昆布、野菜、などの供物と、撒き餅（小餅を建て主夫婦の年の数だけ用意）を上げる。この式次第では、最初に玉串を捧げて、建て主が拝礼

をし、次に大工棟梁、親類や関係者が拝礼となった。次に、番楽連中の代表が神前の御幣を採り塩を持って、建物の東西南北の柱に向かい進み、塩を左右に撒き、御幣を大きく左右に振る。それに獅子頭を持ち、シリモチが獅子の尻尾を採つてこれにしたがい、この尾っぽで左右を大きく祓い、最後に尻尾を拝むようにして押し戴き終わる。やがて、神前に御幣と獅子頭がもどされ、次に奉納舞がなされる。初めに拍子がつけられ獅子舞をする（写真8）。祓い獅子という舞である。次に拝舞がある。終わると、建て主、棟梁によつて餅が撒かれる。次に、神酒と鯛が少しずつ参列者皆に配られ、拝戴をする。終わつて、酒宴となる。柱がらみというが、柱に獅子が絡むような所作は認められず、むしろ形式的な獅子祓いの儀礼であるようにみられる。拝舞はここでも欠かせない舞といわれる。地固めの柱がらみの風習は家屋だけではなく蔵や小屋といった付属建物の場合にもおこなわれてきたというものである。



写真8 地固め(柱がらみ)

(五) 獅子神社と番楽

釜ヶ台では村氏神を薬師神社とし、祭神を薬師大神、山ノ神としている。山ノ神は後に合祀されたものらしく、この社殿内には宮殿が二社あることからわかる。薬師神社の右隣に獅子神社を祀っている。獅子神社はいわば薬師神社の境内社のような形をとるが、その社殿の大きさは本社に引けをとらない。この獅子神社は、獅子頭をご神体とするといわれ、番楽連中らをはじめ、村人はもちろんのこと、各地からの崇敬の念を集めてきた。

獅子神社の行事は大きく二つほどある。

一つは正月のお下り。従来は小正月（一月十六日）であったが、平成前に

元旦の行事に変わった。お下りというのは獅子神社からご神体とされる獅子頭が村に下りられるもので、これに番楽の獅子が前立ちといって子供たちが捧持して、村を巡幸する行事である。

元日朝早くから別当（神社係）ほか、別当箱持ち（お札などの入っている箱）、それにご神体の着物（獅子幕）の裾を持つ人、灯明係、の四人で、ご神体のお着替えをさせ、番楽連中の拍子がつけられてお下りとなる。これには番楽の獅子も伴い前立ちを勤めるもので、それにお供といって一丈ほどの棒の先につけられた麻で、お祓いをしながら村を巡行して廻る。前立ちは、お供の者らは子供の役目である。お下りされた獅子神社のご神体は村の下から上へと廻る順となっている。この時、番楽連中による拍子（囃子）がつけられるもので、お供の者はお札持ちや賽銭箱を持つ者、外に、ご神体の髪の毛といわれる麻糸をつけた棒を持って廻るのである。各家々では、先触れとして棒を持った者がそれぞれの家の玄関腰板に二回棒を突いて音をたてる。それに続いて前立ちやお供の者が「お頭お出でー」と叫びながら家の玄関まで入り、悪魔祓いの意味として獅子の口を大きく開けて二回ほど噛み合わせるようにする。各家々からは、お餅を獅子に啜くえさせてお札をする。それでこの行事は「餅もらい」ともいわれてきた。この正月のお下りでは、大当番おうちばん、親方の家（茂左衛門家）、その年の祭り当番の家で休むことになっている。お休みとなる家では床の間にご神体と獅子頭を安置して休ませる。こうして巡幸が終わると再び神社にもどり、ご神体は御室に納められる。なお、小正月にこの行事がおこなわれた時代では十七日に宿を借りて餅もらいの餅を雑煮にして食べる風習があった。

もう一つの行事は獅子神社の祭礼のお下りである。獅子神社の祭りは古くは五月二十五日であったが、今は薬師神社の祭礼日である五月五日に変えられた。祭りの時はこの神社の別当（神社係）ほか、別当箱持ち（お札などの入っている箱）、それにご神体の着物（獅子幕）の裾を持つ人、灯明係、の四

人と決まっています、皆、羽織袴で正装をしたものである。社殿の狭いこともあるが、これ以外の者は社殿に上がられないという。獅子神社で宮司による祭式が終わると、外から見えないように社殿の入り口扉を閉める。この中で獅子神社のご神体のお着替えをするというのだ。祭式が終わる頃になると、番楽連中からは村外れから法螺貝を吹き鳴らし梵天唄を歌いながら神社に上がってきてお迎えをするというものである（写真9）。この頃



写真9 ご神体を迎えに行く（御獅子神社の祭り）

社殿の中ではお着替えがおこなわれる。お着替えというのはご神体に新たな麻糸を包むようにして巻き込み、それに獅子幕をつけてやるものだ。お着替えが始まる頃になると番楽連中によってコウジョ渡り（小路渡り）の拍子が奏でられるが、それが聞こえなくほど社殿ではパンギ（盤木）を叩き、鰐口わにぐちを鳴らし、社殿の扉や壁、床などを叩いて大音量を出す。これは獅子神社の神様は女神であることから着替えの音が聞こえると不敬だということで、わざと音を立て着替えの音を消すためだという。お着替えが終わると音を出すのを止めるが、拍子はそのままお下り（巡幸）にしたがって番楽連中による特別にこの時だけの拍子があつて囃されていく。この拍子というのは太鼓・笛・鉦に鰐口が入れられて奏でるものだが、普段は奏でることを忌み、練習さえできないものといわれる。この禁忌を破ると神様の機嫌を損ねるといつて戒められている。ご神体を捧持するのは祭り当番の者と決まっているもので、巡幸の時はこのご神体の幕の中に身体のみ弱な者や病気がちの者などが「呪ってくれ」といわれると、幕の中に入れてやるものだ。この巡幸には前立ちといって子供による番楽の獅子頭を捧持する役の者もいる。前立ちは「お頭お出でー」と連呼していく。さらに子供たちはお供といって皆がついて回

るのだが、そのうち一人は一丈くらいの棒の先に麻をつけたものを持つことになる。

獅子神社のご神体である獅子頭のお下りは、村廻りする巡幸になるが、途中お旅所となる宿が三軒ある。大当番、親方の家（茂右衛門家）、別当（神社係）の家、である。各宿に入ると獅子神社のご神体と番楽の獅子頭は床の間の祭壇に安置され、神饌が供えられ、祈祷がなされる。宿からお発ちになるときは法螺貝が鳴らされ、長持唄が歌われる。こうした巡幸が終わり神社に還ると、直ちにご神体は御室に納められるものだが、ご神体の御室の扉の開閉をすることのできる者は別当となつたこの村に住む長男でなければならぬといふ決まりがあつた。お上りの場合、村外れから神社までは再び梵天唄が歌われていく。ご神体を納めるときにもまた番楽の拍子がつけられ、さらに盤木を叩き、鰐口を激しく鳴らし、扉や伸し板まで叩いて大音量を出すのである。この作法は恐らく乱声というものである。

獅子神社の信仰では、別当は毎月二十五日の晩に神社に上がつて籠もりということがある。籠もりはその日の晩に供物を捧げて参詣者を迎えるものである。祭礼の前日（宵宮）の籠もりでは、お札（神札）と、オゴフといつて餅米をふかして作つたご飯を小さな半紙に少しづつ包んだものを作る。これらは氏子に配られるほか、参詣者に授与される。かつては味噌札というお札もだされていた（写真10）。味噌札は籠のような形だけの赤色の札である。味噌桶に貼ると味噌が腐らないとか、よい味噌が出来るといつて信仰されていた。



写真10 お獅子神社のお札版木

志願掛けといつて、子供の病気のときは別当を通して神社部に願いをかけたものである。神社部は番楽連中の中で独身男性が担つていたので、かつ

ては神社部全員で志願掛けを果たした。志願掛けで頼まれると、夏は川で禊ぎをして、冬は井戸で水を被つて神社に上がり祈願をするものである。志願掛けは氏子ばかりではなく他所からも頼まれることがあつたという。病気が治るとお果たしには神酒や手拭い、麻糸などが奉納された。

獅子神社には各地に講中もあつて、今、知られているのは葛岡、高尾（いずれも旧大内町）、亀田（旧岩城町）などである。獅子神社の祭礼に代参者が参詣をしてお札を受けていく。

子供を産んでも乳が出ない場合には、獅子神社に供えてある乳袋に入つているお米を借りてくる。この米はハネリ米というが精米した普通の米である。この米を借りてきて、毎日少しづつ米飯と混ぜて炊き、一週間ぐらい食べる。するとお乳が出るようになるという。お果たしには新しい乳袋にハネリ米を入れて奉納する。また田植え頃になるとソラデという手首が異常に痛む病気に罹ると、獅子神社に参拝して拝殿に供えられている麻糸を借りて、これを手首に軽く縛り付けておくといふ。お果たしにはもちろん新たな麻糸を奉納する。頭痛が酷いときには獅子神社から手拭いを借り出し、これを被ると治るといわれている。つまり獅子神社の利験は病氣平癒でもある灼かな神として信仰されてきたのである。

（六）獅子の舞態

釜ヶ台番楽では必ず獅子舞を最初として、次に拝舞が出される。それにサンバなどが続けられる。獅子舞が重要視され、細かな所作に注意がなされて舞われている。獅子振りでは、獅子は舞人の頭より下げて舞うことを禁じ、人の頭の上で獅子頭の調整をとり、獅子がまるで生きてるように舞わせるといふ。基本は四方固めといつて、順次四方に向けて同じ所作が繰り返されていく。この獅子舞には「獅子の眠り」といってわずかに静止する作法もある。下の方で舞わずときには足を曲げて膝をつけたり、腰を床につけてはいけ

ない。片方の足だけ後ろに伸ばすなどきつい作法もあり、獅子頭を震わすような作法にも気が引けないとされる。これを習得するには三年もかかり、六年は同じ舞を練習しなければならぬといわれている。この獅子舞は二人立ちであり、頭を持つ役はオカモチといい、幕の尾っぽを取る人をシリモチとよんでいる。

番楽の練習においては、初心者は三人立ちという舞いから習うもので、動きの速い単純な舞いから習い始めるといい、呼吸を合わせるコツをつかんでいくのだとされる。拝舞も基本的な舞いとされ、これも習得していく。拍子や言い立てはその都度習うというのである。盆前の練習が最後になる三日間は、拍子揃えといって、歌・内楽（囃子）・舞を合わせる総合練習のようなことをする。

演目は獅子舞、式舞、神舞、武士舞、女舞、道化舞、その他、に分類される凡そ一九演目となっている。獅子舞に次いで重要視されているのが、拝舞で、拝舞は盆の悪魔祓いや頭固め、幕納めなどあらゆる行事には欠かせない舞とされてきた。この舞は式舞の一つとされるが、舞態は武士舞に近いものである。餅搗き舞では水掛け婆という子供を背負う女役ものが登場し、桶に入った水を観客にも掛けて回ることがある。四人空白では白挽き唄（民謡）が歌われ、これに合わせて餅搗きの所作があるものだ。

獅子舞ははじめあらゆる番楽舞では、必ず幕の真ん中をたくし上げ、最初には手足だけを見せたり、扇を翳してみたり、顔や面も見せないのだという。そのためか、幕出の場、合尻から出てくる場面が多い。

(七) 楽器と囃子など

番楽の演舞にあたり囃子が奏でられるが、囃子のことをほとんど「拍子」と呼んでいる。拍子となる楽器には太鼓・笛・鉦（手拍子）があり、太鼓以外は複数つけられることもある。

舞台（図1）となる座敷でも会館でも、幕の裏は楽屋といわれて、ここに獅子頭と三面を台に安置し、他の面はすべて幕と平行に張った紐に吊下げて、舞いごとに使用面をとる。かつては獅子の連中はすべてこの楽屋で拍子をとるもので、太鼓叩きも幕の脇から少し顔を出す程度であったという。舞いの進行如何は幕の窓（幕の切れ目）から覗いてみるものであった。今は獅子方すべてが幕の前に出て演奏するようになった。

(八) 獅子頭・番楽面・道具類

獅子頭は二頭ある。古い獅子頭と新しい獅子頭に分けられるのだが、どちらにも銘がない。ただし古い獅子頭といわれるものは経年の傷や使用感が明らかかなものに対し、新しい獅子頭は塗りが新しいものとなっている。この古い獅子頭は軽いことから今では悪魔祓いの門付けに用いられ、新しい獅子頭は番楽舞に使用されている。隠居獅子などの名称はない。獅子につけられる幕は「獅子の着物」といっているもので、水玉模様で染め抜かれている。冬師の獅子幕は獅子の喉にあたる部分だけが赤い。昔、釜ヶ台の獅子と冬師の獅子が争いをしたといわれ、そのとき釜ヶ台の獅子が冬師の獅子の喉を噛み切ったために血が噴き出したことから、冬師では今でも獅子の喉が赤い布がつけられている。釜ヶ台の獅子はこのとき耳が噛み切られたという伝説がある。

獅子神社のご神体というのも獅子頭だとされている。現在はそこにご神体に毎年一回麻が新たに巻かれることから、その中は全くみることが出来ない。したがって、形状や大きさまで不明である。しかし、これがもしかして獅子

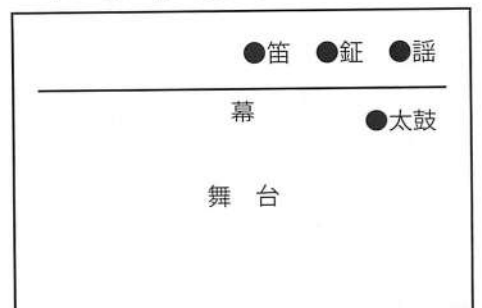


図1 舞台図

舞が始められた頃の獅子頭ではなかったか、とも想像せられている。古く、このご神体なる獅子頭は鳥海山から天拝川に流れてきたという伝承もある。

面は一三点所蔵されているが、紀年銘のみられるものはない。翁面・サンバ面・番楽(太郎)面・拝舞面(兄)・拝舞面(弟)・女神面・さかさ番楽面・餅搗き男面・餅搗き女面・山ノ神面・ゾウ面・鬼面・若子面、である。番楽を演じる時や、頭固め、幕納めなどに必ず飾られるのが、翁・太郎(番楽面)・サンバ、の三面である。なぜこの三面が祭られるのかは不明とされるが、恐らく、式三番による面を祭るということではないだろうか。

外に、山ノ神、ゾウ、鬼、若子、の四面は蔵折りという演目に使用される面だが、この演目が今は伝承されていないので、ほとんど用いられることはなくなった。烏帽子には、翁・拝舞・番楽・鳥舞(雌雄)があるが、烏帽子を被り舞われるのは式舞である。

番楽幕は唐獅子に牡丹の絵柄で染め抜かれたものである。

(齊藤壽胤)

第三節 冬師番楽

(一) 地域の概況

鳥海山北山麓台地に位置する冬師は、冬師山と南由利原に挟まれた沢の南部に位置し、北は隣村の釜ヶ台新田村があり、西方は冬師山を隔てて伊勢居地村に接している海拔五〇〇mあまりの仁賀保山地に属する集落である。近世は本荘藩六郷領の西小出郷に属し、近世初期の新田開発村であった。正保四年(一六四七)の出羽一國絵図にみえる「生駒領老岐守領分六郷伊賀守領分冬師村」である。『秋田県史』では元禄十一年(一六九八)の本荘藩領の高帳に二四石余りであったという。高地の新田開発村であったことから村高

が低いのは当然であったろう。

『仁賀保町史』などによれば、冬師村は馬場村から山名主として四郎兵衛という人物が派遣された記録があるといい、既に最上領(中世末)時代に開発が始められたらしいが、村の成立は寛永三年(一六二六)だとされている。しかし、高地開発のために寒冷と冬期間の多量降雪により春耕の時期が遅れることも多く、その難儀さは新田開発につきもの以上であったことは疑いない。

明治初年の『羽後国由利郡村誌』によれば、戸数二六軒、人口二三八人、「四方皆山ニシテ、其間僅二田圃アリト雖モ、十月ヨリ四月迄雪中ニアリ寒冷の気烈しく、九月ノ初メ降霜アレハ稲梁登ラス、運輸不便ナレトモ、薪炭饒カナリ、故ニ終木炭ヲ製シテ米塩ニ換フ」とみえる。明治初年頃でも米の生産高は変わらず、中世末以来の新田開発村であったにもかかわらず稲作の生産高には恵まれず、他所から米を買って食べる生活であったことがうかがえる。ただ、馬三八匹を飼育し本荘町に出していたらしく、またケラ糞も生産していたことが分かる。これは昭和四十年代頃まであって、実際にケラ売りした人の証言によれば、旧矢島町の元町新処の愛宕神社の祭礼日である四月二十四日に、冬期間に作っておいたケラ十枚を背負ってゆき、売ったものだという。人びとはこの代金でトロロイモ(山芋)を買ってきたという。四月のこの頃はまだ冬師にも矢島にも雪があつて往復路の難儀さは大変だったといわれる。

(二) 名称・所在地・上演期間・場所

冬師番楽は、もとは単に獅子舞と称していた。獅子舞という名称が普遍的であったのは、番楽諸舞に先立つて必ず獅子舞が演じられたこともあり、本海流とされる山伏神楽の獅子に対する信仰が強いものであったことを物語る。それにこの番楽舞連中の行事の一つに盆の獅子廻しがあり、これも獅子

舞で悪霊祓いをするという信仰によるものと思われる。しかし、昭和三十九年に秋田県無形民俗文化財に指定されるときに冬師番楽と通称されるようになり、今日も冬師番楽が通用されている。

番楽の公演は冬師集落内でおこなわれるのが原則で、毎年八月十四日夕刻より農村婦人の家で演舞されてきたほか、八月十九日は龍馬山神社に奉納のためとして龍馬山神社を氏神として祀る三浦喜助宅の座敷で舞われる。この二日間では獅子舞をはじめほとんどの番楽諸曲が演じられてきた。

その他に盆の十三日には「盆の獅子廻し」と称して、集落内各家々を門付けしながら（写真1）、初柵（新精霊・新ホトケ供養）を迎える家では座敷に上がり、供養柵の前で獅子舞を舞う。他でも、かつては六夜待とって八月二十六日の夜に番楽宿（保存会会長の家）座敷で番楽が披露された。また、九月八日には鎮守神明社の秋祭であることから、この日は朝から集落各家々を御獅子舞で門付けしたもので、夕方最後には宿で番楽舞を三、四番、舞ったという。五月八日の神明社例祭でも獅子廻しをしたとされる。にかほ市合併以前の仁賀保町時代には十一月三日の町文化祭に出演して演じることがあったために、番楽の幕納めの日を十一月十五日前後に選んで、この日、集落内の獅子廻しをした後に、宿で二、三の舞を舞って幕納めをした。これらは盆の番楽披露の外は、平成になる頃にほとんど廃れてしまったらしい。



写真1 盆の獅子廻し

その年に番楽を始めるにあたっての儀式を頭固めあたまがたといってきた。番楽はこの日から幕納めまでの期間しか舞われないものとされ、その始まりが頭固めである。番楽の舞納めは幕納めといい、今は十一月下旬に日を選んでおこな

うものである。幕納めをするとそれ以降は番楽舞をすることができないものだとしてきた。

(三) 歴史・由来

冬師番楽の起源は定かではない。『秋田県の民俗芸能』（昭和三十八年十月／秋田県教育委員会）では、平家の落武者が土着して狩や農耕を営んだとされて、その女房たちがかつての世の盛んなりしことを偲び、覚えた舞を子孫に伝承したという口碑があることを記していた。もう一つには生国不詳の兄弟がこの地に来て、兄は坂之下に住み、弟は冬師に住んでこの番楽を教えた、という伝承がある。土地の人びとは後者の伝承が史実に近いと考えている。

平家の落武者が土着して、その女房たちが伝承した番楽という説には少し無理がある。というのも、これまでこの獅子舞番楽を担う若者は冬師に住む未婚の男子、しかも長男でなければいけないとしていて、女性の関与は全くなかったものであり、それが獅子舞番楽の嚆矢こしにあたり女性（女房）が関わったということには甚だ疑問が残るからである。つまり冬師の獅子舞番楽は、かつては女性を忌み嫌うことから、この起源説にふさわしいとは考えられないであろう。さらに、平家の落人というものが冬師に土着したかも怪しいし、どの証拠もみつからない。一方、生国不詳という兄弟が坂之下と冬師に分かれて住んだという伝承では、その時期を特定することは不可能であるが、坂之下は旧矢島町に位置し本海流発祥の地という伝承をもつ荒沢（旧矢島町）に近いところであり、冬師からは両村は真東の方角線上にあたる。何によりも、冬師番楽はこの坂之下番楽と荒沢番楽から伝授されたということから、初めは坂之下に住み着いたという某（兄）が教え伝えたという伝承の方により合理性があるように思われる。

冬師番楽と坂之下番楽との演目の比較して、十種の演目が同様の内容をもつものであることがわかり、そのうち、にかほ市内の番楽には全くみられない

い「山ノ神舞」が冬師と坂之下にあることが指摘されている（『雄波郷』第六号／平成二十四年三月／にかほ市教育委員会、所収）。これからも冬師の番楽が坂之下の影響を受けていることが相違ないだろう。したがって、由来伝承のうちでも、生国不明であるが坂之下の土着したという某（兄弟の家、兄）が伝えたとするのが発祥由来に最も近いのではなからうか。

ほかには歴史的にほとんど知られることがない。

（四）組織

冬師番楽では現在保存会が結成されていて、保存会は番楽の公演を始め年中行事を全て担っている。保存会は昭和三十九年に秋田県無形民俗文化財に指定を受けるときに結成されたもので、以来、番楽を志す地元有志の男子だけで結成維持されている。現在は会長以下一七名の会員を有す。保存会結成以前では中学卒業後に地元に着している長男でなければならなかった。それはこの番楽を他に流出することを極度に戒めるためであったとされる。即ち、二男、三男など俗にいうオンチャラに伝承が及ぶと、この村から他出する可能性があったからで、それに若者がたくさんいたことと長男の権威も保つためといわれた。元来、番楽には女性に関わらないものとされたが、現在では女性も手伝いをする（舞以外の庶務など）傾向がみられる。

（五）現況と過去の状況

冬師番楽では、その年に番楽を演じることの期間が定められ、それ以外は番楽を舞うことができないとされてきた。そのために、その年の最初に番楽をおこなうためになされる儀式が頭固めである。かつては七月一日が頭固めの日であったが、今は七月上旬の都合のいい日とされ、特定な日とはしていない。頭固めの日は夕刻、農村婦人の家に集まり、予め会長家から移動しておいた獅子頭を床の間に安置して、一同で拝礼をする。供物は米、酒、鯛、

昆布、塩、水などに、蠟燭を点して捧げる。その後、獅子舞を一番舞って終わる。近年ではこの日、保存会の総会のようなことがおこなわれ、一年の収支決算、本年の予算や予め依頼されている番楽の公演日などを確認する。それから直会となり懇親を深める。農村婦人の家がなかった時代は、番楽宿は保存会会長の家が担ったことから、全て宿で頭固めや幕納めなどがおこなわれるものだった。そのため、盆や十九日の龍馬山神社奉納番楽などの獅子頭が出るのもこの宿からであった。盆の公演宿は農村婦人の家を借りておこなうが、獅子頭や番楽舞用具などは保存会会長の家に保管されているので、ここから出ることが多い。

頭固めの次の日からはほぼ一日置きくらいに練習がなされる。かつては、各自が夜に師匠の家に向いて習ったもので、指導は特に厳しかったらしいが、それでも師匠の家では練習が終わると握り飯、ガッコ（漬物）が振る舞われたという。近年では、この練習は農村婦人の家でおこなっている。

幕納めの日は特定日としたものはないようだ。かつては秋の収穫が終わる一段落した十一月二十六日で、秋の悪魔祓いの行事で獅子廻しをしてから夕方幕納めの儀式がおこなわれた。近年までは十一月二十六日ではなく十一月三日以降に悪魔祓いの獅子廻しがおこなったために、その後に都合のいい日を決めて幕納めをしてきた。この幕納めは夜に宿でおこなわれ、獅子頭を安置して供物を捧げて拝礼の後、獅子舞を一番演じて終わる。そして直会となる。幕納めをすると番楽舞は一切できないことになっていた。

しかし、かつて正月の十六日には悪魔払いの獅子廻しがあった。この正月の獅子廻しは現在では一月一日におこなわれているが、獅子廻しは幕納めという番楽舞終いをするとは別のものと考えられたためであろう。正月の獅子廻しは、一軒ずつ門付けをしながら各家座敷、神棚のある部屋で獅子舞をするものであった。これも期日の変更され、平成十年頃からは元旦の日に獅子廻しをすることとなり、玄関で獅子頭を振るのみとなっている。

番楽舞そのものが披露されるのは八月十四日と十九日であった。八月十四日の番楽披露は宿の家か特定の大きな家の座敷を借りておこなわれた。奥座敷と中座敷の間に番楽幕を張り、奥座敷で衣装など着けた支度して幕出をする。村の人びとや見学者は下座敷か茶の間が上がって見ることもあるが、婦女子らは家の外から座敷で舞うのを見ることが多かったらしい。今でも三浦喜助家での奉納演舞は家座敷でおこなわれている。

したがって冬師では特定な舞台を造ることはなかったものの、神明社（冬師の鎮守社）祭礼であった五月八日には地域の婦人会や青年会で祭りの余興奉納のために神社境内に仮設の舞台が設置されたことから、この舞台で番楽を披露することもあった、という。祭礼の番楽は臨時で、恒例とはしていないのだった。

八月十九日は龍馬山神社奉納の番楽がなされている。この日の舞台は三浦喜助家の座敷となるもので（写真2）、それは三浦家の氏神である龍馬山神社に番楽を奉納することの意味があるからという。

冬師三浦喜助家の龍馬山神社の創祀ははっきりしないが、獅子頭二頭が納められているほか絵馬が二三点あって、ほとんどが馬の図柄が描かれている。しかも奉納者は地元冬師に限らず仁賀保郷一带から旧本荘市にまで及んでいる。

龍馬山神社所蔵の獅子頭に銘はみられないが、絵馬には「嘉永五年七月」の銘が最も古い。三浦家の氏神としての龍馬山神社でありながら村人の信仰もあって、春から秋までの間、毎月十九日には夜籠りがあり、その日の夜に神社に上がり籠もり（祭り）をしたという。しかし、何故に三浦家が龍馬山神社を祭ったかははっきりしないが、龍



写真2 龍馬山神社奉納番楽(三浦喜助家)

馬山の信仰の源流は由利本荘市北ノ股の東にある龍馬山（三七八m）を本山とするのであろうと思われる。即ち、龍馬山の信仰は稲作の神として崇められていて、山頂には馬頭観音神社を祀っているものだ。龍馬というのは頭が龍で胴体は馬の姿をしたものとされ、馬頭観音のお使い、または化身とも信じられてきた。冬師には三浦家の氏神以外に、この神の分祀とされる龍馬山神社の祠もある。隣村の上坂（旧仁賀保町）との境にあたる大潟溜池の縁に祀られている小祠だが、ここでも八月十九日の午前には獅子舞が奉納されてきた。冬師では早の時に雨乞いのためにこの大潟溜池の龍馬山神社を参詣したという。それは龍神信仰としての水を司る神ともされたからであった。この大潟溜池の龍馬山神社には雨乞いの祈願ということで西目からも参詣にきたというほど、ご利益があったという。

盆の番楽披露が終わると六夜待といって、八月二十六日に神明社（村鎮守社）で獅子舞と番楽二、三番が演じられた。この時も舞台は特別なものではなく神社拜殿で舞われるものであった。次第に六夜待の行事は保存会会長の家が宿となって、ここで舞うものであった。昔はこの後、各地で六夜待が開かれているので、番楽をおこなっている他所を見に行くこともあった。冬師では屋敷番楽（旧由利町）に向き、道具を借りて自分たちも獅子舞や番楽太郎など、二、三番を舞ったこともあるという。しかし、六夜待の番楽演舞も、他所に見学に行くことも、昭和四十年頃にはやめている。

盆の獅子廻しの場合には初棚（新精霊）のある家のみで舞われる。精霊棚の前で御獅子舞が一番だけ舞われているもので、その前舞である神舞も、その後の拝舞も舞われなくなっている。正月及び秋の悪魔祓いとしての獅子廻しも特別な舞台はなく、希望者の家の場合に座敷で披露される。ただ、獅子廻しの場合には番楽宿から出ると最初は必ず佐藤仁兵衛家（親方の家）から始められることになっている。この家がなぜ最初なのかははっきりした理由はわかっていない。

冬師では番楽の舞台を特別に設置することはなかった。

盆におこなわれる番楽及び龍馬山神社奉納番楽では、宿から番楽の演じられる家までの間は小路渡りという囃子して行列をなしていくものである。これには神歌がつけられるもので、「打てば鳴る、打たねば鳴らぬ、この鼓で、心でうなる、心しらまいで、心しらまいで、エヤー」などの歌が入れられる。家の座敷に上がるときはヨセンという囃子がある。ヨセンは「ハイラーソコラー、ハイラーソコラー」という掛け声に似たものを必ず入れる。その後、獅子舞を演じるが、単に獅子舞を演じるときにもこのヨセンは付きものだとされてきている。

(六) 楽器の構成

楽器の構成は太鼓・笛・鉦（手平金）であり、それに神歌を唄う者、さらに言い立てをする者によって構成されている。番楽を披露するときは、番楽幕を張りその内側を楽屋、手前観客側を舞台とする。このとき観客側に出るのは太鼓叩きだけがでて、あとは楽屋に位置していた（図1）。今は囃子方の全部が舞台側に出て囃子方が見えるようになっていた。

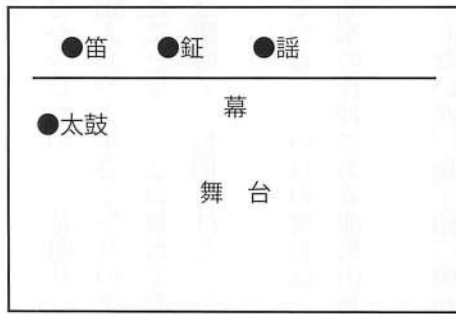


図1 舞台図

いずれも最初に楽屋（幕の内側）に入ると、太鼓を立ててその上に獅子頭が安置される。番楽舞を始める前には必ず一同で拝礼をする。

番楽の拍子は坂之下（旧矢島町）から伝承されたということもあつて三拍子とされるが、坂之下番楽より少し早い拍子だといっている。

(七) 番楽の演目

これまで知られている演目では、

- 獅子舞 * 神舞・御獅子・やさぎ獅子
- 式舞 鳥舞・翁・三番叟・* 地神舞・* 御神楽
- 神舞 * 山の神・* 三人立ち・* 小弓の舞
- 武士舞 * 山屋・* 牛若弁慶・* 頼光・* 屋島・* 信夫太郎
- 女舞 * 蔵折り
- 道化舞 番楽太郎・* 可笑・* 一人餅搗き
- その他 ばくち舞・空白舞

*印は途絶えたまたは現在舞えない演目。があるが、その他に拝舞があつて、これも必ず演じられたというが、今は舞えない。

獅子舞は番楽の先だつて舞われるものだが、これには神舞という下舞がつけられるもので、次に御獅子舞となる。そのため番楽の順番は初めに神舞、次に御獅子舞天神地祇の舞で、この二舞は決まつて舞われたが、その後の演目は必ずしも順番はない。たいていはこの獅子舞の後、拝舞があり、番楽太郎（写真3）、三番叟（写真4）、などという舞が演じられていくとされる。昔は必ず最後に演じられる舞が蔵折りであつたが、今日では餅搗き舞が最後となっている。

御獅子舞には神歌がつけられ、その文句は次のようである。



写真3 番楽太郎



写真4 三番叟

この館 はなぞのだいこうを たてた やら
 けたはりえもー この金にのりぼ うた このかねのりぼ
 うた

エヤー
 まいてきいて この家のお庭を 見渡せば

小金やうかぶ 足にからまる 足にからまる エヤー
 左より 右にまわれや ちぎりしや

ちぎをうかぶいしを はやくありいしを はやくありいしを
 エヤー

おがめや おがめや足おとう おがむれば

いかなるかみ あかさかりもった あかさかりもった
 エヤー

である。拝舞では「ハイラーソコラー、ハイラーソコラー」という掛け声が繰り返し入る。烏帽子を被り、刀を佩き、扇を持つ。屋島は一人舞。山屋は二人の武士が甲冑をつけシヤグマを被る。御神楽は、二人舞で雌雄の鳥甲をつける。番楽太郎は釜ヶ台番楽とよく似ていることから、やさぎ獅子は伊勢居地番楽がそっくりな舞だとされ、これは冬師番楽から演舞が盗まれたためだという。

(八) 番楽面

番楽面には一六点が伝わり豊富だ。

翁 白式尉で、翁舞に用いる。

番楽太郎 番楽太郎舞。

三番叟 吊り顎で、面では白色である。

屋島

拝面 拝舞に被る白色の面て。

信夫小太郎 右の上部が欠けている。

可笑 縦に割があり、膠で接着されたもの。蕨折りの舞に使用される。

あねこ 蕨折りの舞に使用される娘の面。

じおう 蕨折りの舞に使用される。

子供面 道化舞である一人餅搗きの舞に使用。

婆んば 一人餅搗きにだされる婆面。この面に唯一、紀年銘がある。「小出

福□□」「大工齊藤親四郎」「大正拾壹年旧十一月」と墨書されている。

男面 一人餅搗きに使用。

鬼面 蕨折りの舞。じおうが後で鬼になるときこの面をつけて出る。

さつま 彩色が施されていない、木肌がみえる面。「サツマ、サツマ…」の幕出の神歌がかけられ出てくる。

拝面 拝舞のときの面。

不明 一点。

(九) 番楽用具類

烏帽子(鳥舞・拝舞・翁・屋島・三番叟)・

鎧・シヤグマ・刀・空白棒・餅搗き棒・弁慶

の持ち棒・翁の着物(狩衣仕立て)・舞着物

(翁の着物)・帯・モンペ・袴・小手・あねこ

額当てなどである。

番楽幕は、「明治三十二年己亥七月吉日」

「金浦染師藍青」の銘があるもので、四枚を

縫い合わせたものである(写真5)。一枚ず

つの上に丸に橘の紋が付けられているもの

で、下の図には、翁、武士、三番叟の絵柄が



写真5 番楽幕

染め抜かれている。各縫い目には一尺くらいの窓というものがあり、縫い目がない。これは楽屋から舞台を覗き見るもので、番楽の進行状況や、拍子と舞を合わせるためにみる窓である。非常に大きなもので、幅が八〇〇cmに丈が一七二cmあり、木綿製の染め物である。これに裏地が付けられた豪華のものとなっている。

(十) 獅子頭

現行の獅子頭は番楽宿にもなっていた三浦仁右衛門家が平成十年に火災に遭ったことから、そのときにかろうじて火災を免れたもので、そのため今の保存会長である佐藤三蔵家に移され保管されてきた(写真6)。獅子頭には銘はないものの、獅子頭の信仰では、盆や正月の獅子回しでは特に悪霊祓いとして信じられ、病氣平癒にもこの舞が効験あるとされている。また、盆には特に初棚(新精霊)を迎える家ではこの獅子舞を演じるもので、獅子舞は一種の供養ともなると考えられている。



写真6 獅子頭

(齊藤壽嵐)

第四節 鳥海山小滝番楽

(一) 小滝集落における鳥海山信仰と金峰神社

小滝集落は鳥海山北麓の日本海側方面に位置する集落である。鳥海山は古代から神の山として篤く信仰されてきており、その山麓周辺には数多くの神社が祀られてきた。小滝集落に鎮座する金峰神社は、その中でもとりわけ重要な存在として注目される。この神社は古くから蔵王権現社と称し、蔵王権

現と鳥海大権現を祀ってきた。修験の祖とされる役小角が蔵王権現を感得したという伝承にちなむ木造蔵王権現立像三体が祀られており、平安時代後期作といわれる。また慈覚大師作と伝えられる巨大な木造聖観音菩薩立像(像高4・85m)も祀られており、平安時代中期作とされている。これらの仏像年代を考えても、小滝集落の金峰神社が古社として存在してきたことを知ることができる¹⁾。

次に金峰神社に奉仕する祭祀組織についてみてみる。その組織の中心は中世から活躍した修験者からなるもので、小滝修験と称されるものであった。近世の実態を表すものとして、慶長十七年(一六一二)の記録(最上檢地帳)によれば、小滝村三十五軒中に修験宗徒が五軒もあった²⁾。また『出羽国風土略記』には、「一、蔵王権現(祭神少彦名命)小滝村に有、三月十八日祭礼田楽等有、宗徒有院堂を龍山寺と云ふ、夏月鳥海参詣の宿坊也、廻國納経受帳に鳥海山龍山寺と書けり」とある³⁾。

小滝集落には龍山寺という修験寺院があり、鳥海山に登拜・参詣する信者たちの宿坊の役割を果たしていたことがわかる。文政二年(一八一九)の「小滝村絵図」(遠藤蔵之助家資料)には小滝住人の屋敷配列が詳細に記されており、その中で真言宗当山派の龍山寺を中心にして観行院、喜明院、和光院、清龍院という修験寺院の存在が確認できる⁴⁾。鳥海山の登拜口にあたる小滝は「坊中村」ともいわれ、修験者のための宿坊が立ち並ぶ集落でもあった。

小滝修験の中心をなす龍山寺末裔の遠藤貞臣氏の記録「瑠璃の珠くづ」(執筆年月日不詳)では、「吾が小滝村番楽ノ由来ハ古クシテ今其詳ナルコトヲ知り難キモ、古来鳥海山ノ御神事トシテ伝ヘラレタリ、即チ吾小滝村ハ修験ノ村ニシテ、字ヲ坊中村ト云ヘリ、学頭ニシテ鳥海山ノ別当ハ小滝院主龍山寺ナリ、修験等ノ舞ヒテ奉仕シタル舞ナリ」と記されている⁵⁾。

先にあげた『出羽国風土略記』には「祭礼田楽等有」とあるが、「田楽」とは金峰神社祭礼に舞われるチヨウクライ口舞のことだとされる⁶⁾。龍山寺所

蔵の天保九年（一八三八）の『鳥海山金峰山 神事古実記』（遠藤隆家文書）には、齋衡三年（八五六）の年に手長足長の悪鬼を退治するため護摩密法「法華八講祭」を行い、その後の祝宴で「祭法式之舞」、つまりチョウクライ口舞の七番を舞ったことが記されている⁽⁷⁾。このような芸能を担う人々とは、小滝修験に関わる人たちであった可能性を考えることができる。

なお、チョウクライ口という不思議な名称は、『鳥海山金峰山 神事古実記』に記されているように、古くは「祭法式之舞」と言われた。チョウクライ口と称するようになったのは、明治以降から昭和十年代の復興期において「長久比呂花笠舞」と称されたことにちなんでいるという⁽⁸⁾。

金峰神社祭礼行事において、このチョウクライ口舞の前に必ず舞われるのが獅子舞「御宝頭の舞」であり、別名「十二段の舞」ともいつている。この獅子舞について、同じく『出羽国風土略記』には、「蔵王権現に獅子頭有、古来より正月中仁賀保中巡行」とあり、古来正月に仁賀保の各戸を巡行して舞ったことがわかる⁽⁹⁾。

（二）番楽の名称

小滝集落に継承される番楽は「鳥海山小滝番楽」と称し、所在地は秋田県にかほ市象潟町小滝である。現在使用している言立本（年号不詳）には「鳥海山小滝番楽日山舞」と記されている（写真1）。一方、かつて用いていた言立本には「鳥海山小滝日山番楽」と記されていたという⁽¹⁰⁾。この言立本は現在失われていて所在が不明である。いずれにしても番楽名に「日山」の名称を用いていた。山形県遊佐町に杉沢比山という番楽が伝承されている。同じく「ひやま」を用いる。鳥海山小滝番楽と杉沢比山の関係性について、

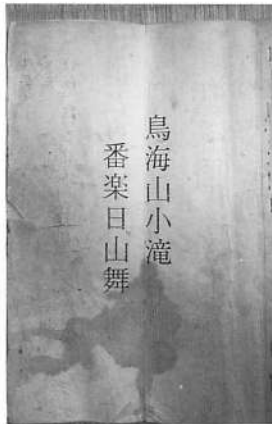


写真1 言立本表紙

現在でも杉沢比山側にとって自分たちの家持（本家）にあたるのが小滝番楽と捉えているとのことである⁽¹¹⁾。両団体の演目で、廃絶したものを含めれば現段階で把握できるもので、一三演目が共通している。だから同類または同根であるとはすぐさま言えない。異なる演目も少なくないのである。両団体の相互関係性については今後さらなる多面的精査が必要であることは言うまでもない。

（三）鳥海山小滝番楽の歴史・由来

鳥海山小滝番楽の起源について、明確な史料が残されておらず、詳細は不明である。現存する番楽面は一八面あるが、近年の赤外線調査によって、「万治二乙亥年四月」「溯名長左衛門二十三年作是」「重安判」と記されている面が一二点あり、これらは万治二年（一六五九）四月に溯名長左衛門重安によって彫られたことが判明した。他の五点の面も文化十年（一八一三）の可能性があるという⁽¹²⁾。なお、「溯名」の姓は小滝修験の系統であるという指摘もみられる⁽¹³⁾。これらの状況から、江戸時代初期には小滝番楽はすでに存在していたものと考えられている。元来は小滝修験者を中心に番楽が継承されていたのではないかと推察されるが、それを明確に裏付けるものはない。次は言立本『昭和拾六年八月 鳥海山小滝番楽舞 篠原作左工門持用』に記された内容である⁽¹⁴⁾。

「此ノ舞ハ鳥海山ノ御神事トシテ奉仕セシ天下泰平、国家安穩、武運長久五穀

豊饒ヲ祈ル神楽デアリマス、鳥海上ニハ六月朔日ヨリ八月朔日マデ神主ガ上ボツテ御祈祷ヲナシ、又道者ヲ案内シテ居リマス、サレバ此ノ舞モ六月ヨリテ孟蘭盆ヲカケテ舞ヒ、八朔ニハ神送リトテ御宮ニ舞ヒ納ムルノデアリマス、ソノ後ニ舞マスト稲ニ霜枯レノ害ヲ受クルト云ツテ、作祭りノ御神事トシテ尊バレテ居リマス」

このように、鳥海山小滝番楽は「作祭りの御神事」として、鳥海山信仰と一体となって六月から八月までに舞われてきたことを物語っている。

ここから、近代以降の鳥海山小滝番楽の衰退と再興の歩みを『象潟の文化』から拾ってみる^⑤。明治十年代は番楽の維持が困難になっており他村から熊谷・敦盛の演目を習い受けたりしている。明治二十年代は青年夜学会が盛んで、番楽を継承する若者が減少していつそう衰退の方向を辿る。明治四十年代は若子、曾我、田村その他の演目が行われなくなっていた。概して、明治時代は番楽の継続が大変困難な時期であった様子が記されている。

昭和に入ると、十一年に根子番楽が東京公演をはたしたり、地元マスコミなどに報じられたりして小滝の青年たちも大いに刺激を受ける。その後戦時中の中断を経て、昭和二十二年九月に横岡村、大森村、小滝村の番楽関係者の物故者慰霊祭の際に、小滝番楽は「番楽」「翁」「大江山」の三番が舞われている。昭和二十五年八月には「鳥海山小滝番楽保存ノ為約定書」が小滝村定会において決定され、以後の番楽継承のための関係者二十三名の契約が取り結ばれている。なお、この「約定書」には舞宿料金等の設定、番楽舞資金源確保、番楽舞組合設立、子供舞等後継者育成、出演時礼金、など細やかな規約・約束事がなされていることは今後の参考となる。

その後の小滝番楽の動きとしては、昭和三十一年には「舞ヘルト思ヘル舞」として、「番楽、翁、吉田、松迎へ、大江山、一ノ谷、猿番楽、三人立、太郎、一人餅ツキ、トンボウ」の十一演目が記されている。十一年八月白瀧旅館前庭で行われたのは、「吉田、番楽、翁、三人立、大江山、一ノ谷、番楽太郎、一人餅ツキ、空白舞」の九演目だったことも記されている。昭和三十九年には「小滝舞楽保存会」が結成されて、集落をあげて鳥海山小滝番楽とチョウクライロ舞がともに保存伝承がはかれることとなったのである。以上がこれまでの鳥海山小滝番楽のおおよその歩みである。

鳥海山小滝番楽は、平成元年三月十七日に秋田県無形民俗文化財の指定を

受け、平成二十四年三月八日には、国の記録作成等の措置を講ずべき無形の文化財の指定を受けている。

(四) 現在の上演時期と場所

(1) 金峰神社例祭前夜祭

毎年五月最終土曜日の前夜に、金峰神社例祭当番講中の庭、もしくは白瀧旅館か奈曾会館の前庭において、夜七時から約一時間半にわたり八演目を披露している。

(2) 盆公演

毎年八月十三日に集落内の奈曾会館前広場で、夜七時過ぎから十時半近くまで一五の全演目を披露している。三〇年くらい前までは十四日に行っていたが、現在では一日繰り上げて行っている。

(3) 神送り

九月一日に、金峰神社の宝物殿前の屋外にて演目「翁舞」のみを非公開で演じている。

以上のことから、鳥海山小滝番楽は金峰神社の祭礼行事に深くかわる芸能として継承されてきたものであることが理解できる。

(五) 組織

小滝番楽は単独の保存会はなく、「鳥海山小滝舞楽保存会」の中の一つの組織として位置づけられている。「小滝舞楽保存会」とは、次の五つの芸能・習俗の連合組織である。①御宝頭の舞(十二段の舞) ②チョウクライロ舞

③鳥海山小滝番楽 ④雅楽 ⑤アマノハギ

以上の①～⑤部門のリーダーとしてそれぞれ五人の部長がおり、それを統

括しているのが舞楽保存会である。舞楽保存会長の吉川菜一氏は、現在鳥海山小滝番楽の太鼓演奏者でもある。この五つの組織では役割を重複して担っている人が多い。

平成三十年八月現在、鳥海山小滝番楽の構成員の年齢構成は、二〇代一人、三〇代十人、四〇代九人、五〇代四人、六〇代六人（師匠格）、七〇代六人（師匠格）の総計三六人であり、平均年齢は五〇・一歳である。平成二十八年に地元消防団に入っていた若者三人が新たに加わったこともあり、伝承については当面は心配ないとのことである。

(六) 現在と過去の状況

(1) 幕開き・幕納など

① 過去

幕開きは旧暦六月朔日（六月一日）であり、幕納めは旧暦八月朔日（八月一日）であった。この期間は小滝修験龍山寺院主が鳥海山奥の院に登って祈祷を続けたとされる期間であり、また番楽連中が舞初めを行い、また金峰神社に舞納め（神送り）をする期間と一致していた。盆の十三日、十四日、十五日は、旧家や番楽連中の広い庭などで舞われた。お盆は先祖の霊が帰ってくるので、主として祖霊供養として行った。二百十日にも舞われたが、実際は九月一日の夕方にそれぞれ舞宿で番楽を行った。この日は旧暦八月朔日でもあり神送りの日である。番楽宿で舞ったあと、金峰神社社務所まで神歌（神謡）を歌いながら行列を組んでいった。社務所では演目「翁」か「松迎え」の舞いを納めた。終わって番楽宿に帰る際は、御宝頭の舞（十二段の舞）の「通りの拍子」を奏しながら帰るのが慣例であった。かつては、舞納め（神送り）以降に舞うことは禁じられ、そのルールを破ると稲の霜害が起きるとされて堅く守られてきた。このことは、前述したとおり、番楽そのものが鳥海山信仰や金峰神社の作祭りの神事と深く関わって継承されてきたことを物

語っている。

② 現在

金峰神社例祭前夜祭として、二〇一五年から五月最終土曜日の前夜に、金峰神社例祭当番講中の庭（または白瀧旅館か奈會会館の前庭）において、夜七時から約一時間半にわたり八演目を披露している。また、毎年八月十三日に集落内の奈會会館前広場で、夜七時過ぎから十時半近くまで一五の全演目を披露している。三〇年くらい前までは十四日に行っていたが、現在では一日繰り上げて行っている。九月一日には神送りとして、金峰神社の宝物殿前（屋外）にて演目「翁」のみを非公開で演じている。

(2) 舞台（図1）

かつては集落の民家を舞宿としてその庭で演じた。座敷または茶の間を楽屋とし、玄関に幕を張ってそこから出入りして舞う。庭には四方の筵やシートを敷いてその上で舞った。その場合は歌や囃子は幕の中に行っていた。舞台付の会場の場合は、幕を張り楽屋、神歌は舞台の袖の方に行っていた¹⁶⁾。

現在は民家を舞宿とはせず、集落の白瀧旅館や奈會会館の前庭で行っている。奈會会館の場合は、高さ一〇cm弱の板にゴザ八枚を敷いた舞台で演じる。番楽幕は楽屋に通じるように会館側に張る。

(3) 観客

特に八月十三日はお盆で帰省している人たち、家族・親子連れが多く参加

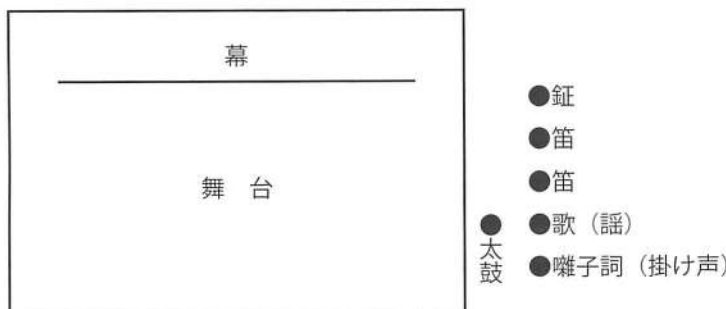


図1 舞台図

しており、舞台上に登場する演じ手に向かって実名をあげて声援が飛び交い、毎年ながら会場は熱気に包まれる（写真2）。

(4) 行事次第（八月十三日の盆公演）

奈曾会館の前庭に設営する会場の準備を整えてから、車で集落内を回り公演実施を告げるアナウンスをする。その後、奈曾会館の中の三社様の祭壇に翁・若子・吉田（三番叟）の三面を並べて講中全員で参拝を行う。三社様とは、



写真2 鳥海山小滝番楽を楽しむ集落の人々

先の言立本「昭和拾六年八月 鳥海山小滝番楽舞 篠原作左工門持用」によれば、「若子ヲ大神宮様ト崇メ、翁ヲ春日様ト、吉田ヲ八幡様ト崇メテ居リマス、（京都府吉田神社ハ春日神社ト同體ナリ）」とある。つまり、「翁」の舞は春日様、「若子」の舞は大神宮様、「吉田」の舞は八幡様という神々に対する崇敬の舞いということであろう。

開始時刻は夜七時を過ぎた頃になる。まず四種の神歌（神謡）を歌ってから公演を開始する。初め「番楽」を奉納するのが慣例となっており、そのあと小滝番楽部長が観客を前にして挨拶を行う。挨拶後は順次十四演目を舞っていく。すべて終了する頃には十時半近くになっている。その後は奈曾会館の中に入って講中全員での直会となる。

(5) 神歌（神謡）など各種の歌（謡）

① 通り（渡御）ノ神歌

番楽宿から舞宿まで、太鼓・笛・鉦・舞人など番楽団体が行列をなす際に歌われる神歌である。

② 振り込ミノ神歌

舞宿に到着すると歌われる神歌である。

③ 楽屋ノ歌

舞いの準備が整い次第歌われるものである。

④ 幕出ノ歌（ラエギ禮義ハ五常楽）

「楽屋ノ歌」ののち第一演目の「番楽」が始まるが、その直前に歌われる歌（謡）である。

ここまで歌（謡）が進むと、第一演目「番楽」の舞い手が幕内から登場して舞い始める、というのが基本的な流れである。

神歌（謡）については、和歌形式のリズム感に富んだ歌謡の中に、鳥海山への崇敬心や神仏への儀礼・祈願、修験者・道者の気高い任務などが読み取れ、その神聖性が随所にみられる。特に「通り（渡御）ノ神歌」や「幕出ノ歌」は太鼓の音色がゆったりと響き渡り、いつそう神々しさを奏でる。

近年は、五月最終土曜日の金峰山神社例祭の前日夜、現在番楽宿となっている奈曾会館から番楽会場（白瀧旅館前庭など）に到着するまでは「通り（渡御）ノ神歌」「振り込ミノ神歌」を歌う。到着してから公演が始まる前までは「楽屋ノ歌」「幕出ノ歌」を歌っている。八月十三日奈曾会館での定例公演（盆公演）では、各神歌は二番目以降は省略されているのが現状である。

(6) 上演演目

現在、鳥海山小滝番楽に伝承されているものは、以下の一五演目である。

- ① 番楽 ② 翁 ③ 吉田 ④ 松迎え ⑤ 鎧揃え ⑥ 大江山 ⑦ 田村 ⑧ 品ごき太郎（たるたる） ⑨ 三人立ち ⑩ 熊谷次郎直実 ⑪ 熊谷・敦盛 ⑫ 一人餅搗き ⑬ 四人餅搗き ⑭ さつま ⑮ 空白舞

右記の②翁、③吉田、⑤鎧揃え、⑦田村、⑩熊谷次郎直実、⑫一人餅搗き、⑭さつまの七演目は、昭和五十五年から六十年頃に復活したものである。金峯山神社の蔵王権現ご開帳の際に、当時の番楽部長遠藤清一郎氏の指導のも

とで試みられた。以下に演目の詳細をみていくが、平成二十八年八月十三日に舞われた順番どおり記載する。

なお、歌（謡）や囃子詞（掛け声）、言立て（口上）は言立本に基づいてカタカナで記す。演目の所要時間は、囃子が開始されてから囃子が終了するまでの時間であり、舞台で演じられる時間のみでない。演じ手の登場前と退場後も囃子が続く場合がほとんどなので、通常いわれているよりは多少長い時間帯となる。

A. 番楽（所要時間・約五分）（写真3）

〔云態・演目構成〕

「楽屋ノ歌」と「幕出ノ歌」が歌われた直後、舞い手が舞台中央の幕から登場する。引き続き歌（謡）とともに、舞い手は扇をおおぎながら舞台正面に進む。すぐ歌（謡）は終わり、囃子詞（掛け声）「アッヨイヤサ アッヨイヤサ エンヤサー エンヤサー」の繰り返しに合わせて舞う。時計回り（右回り）に同じ舞いを東・南・西・北の四方向で舞いながら一巡する。正面でまた同じ舞をして終わる。



写真3 番楽

次に笛と太鼓・鉦のリズム・テンポとともに、やや腰をかがめた姿勢で片手を伸ばし、広げた扇も前方に差し出す。足も前方に踏み出し、扇を前と後ろに大きく動かしながら舞いは続く。先と同じ威勢の良い囃子詞（掛け声）も続く。この囃子詞（掛け声）に合わせて四方向で舞い続ける。最後は「ソーラ ソーラ ヤー」の歌に乗って正面を向いたまま退場する。

退場した後は「楽屋ノ歌」の「舞フタ マフタ品ヤカニマウタ 品和（ヤカ）ニ舞フタ ヤー」が歌われて終了する。『昭和拾六年八月 鳥海山小瀧番楽舞 篠原作左工門持用』には、「優雅ニシテ気品ノ高キ威儀アル舞ナアリ」

と記されている¹⁷⁾。

〔仕度・扮装〕

高烏帽子を被り黒尉面をつける。刀を腰にさし、手には金銀色の扇を持つ。上半身は黒系の着物を着るが、右半分肩から下に着ている赤系の着物を出す。それに桃色の襷をかける。下半身は茶色の袴を着用する。白足袋をはく。

B. 三人立ち（所要時間・約四分二十秒）（写真4）

〔云態・演目構成〕

歌（謡）や「囃子詞（掛け声）」とともに、右手に扇と左手に棒を持った三人が幕から登場する。舞いは、歌（謡）および囃子詞（掛け声）の二つをセットに繰り返しされるのに合わせて、三人は舞台中央で向き合い手を大きく振りながら揃って足を踏み鳴らす。やがて、囃子詞（掛け声）で二人が交互に棒の下をくぐり抜け、もう一人は仰向きに一回転しながら三人の位置を替える。いわゆる「棒くぐり」の舞いである。囃子詞（掛け声）のたびに「棒くぐり」を繰り返す。



写真4 三人立ち

やがて少しテンポの速い曲に変わり、歌（謡）に乗って連続して「棒くぐり」の曲技を繰り返し広げる。「拝メヤ拝メ 四方浄土デ拝ムレバ イカナル オイデ喜ビヤ オイデ喜ビヤ」の歌に合わせて、最後は正面を向いて横並びになって退場する。

退場すると、すぐに「舞フタ マフタ品ヤカニマウタ 品和（ヤカ）ニ舞フタ ヤー」（「楽屋ノ歌」）が歌われ終了する。

〔仕度・扮装〕

三人とも頭部はシャグマに鉢巻きを付ける。上半身は胴部が灰色で袖が桃

色の半纏を着用して襷をかける。襷はそれぞれ黒色・赤色・黄土色のもの。腰には赤色・黄土色・水色の布を巻いて垂らす。下半身は黒色の股引と白足袋をはく。それぞれ細い棒を持つ。

C. 大江山（所要時間・約二十四分）（写真5）

〔芸態・演目構成〕

この演目は、現在では鳥海山小滝番楽と山形県遊佐町の杉沢比山だけが演じている。『山伏神楽・番楽』では、遊佐町の女鹿比山と岩手県の黒森神楽にもあつたと記している¹⁸⁾。

最初に「楽屋ノ歌」と「幕出ノ歌」が歌われる。終了直後に仮面を被った一人の武士が登場し、囃子詞（掛け声）に合わせて舞う。ほどなくして、もう一人の仮面の武士が登場する。その後二人は向き合いながら対称的に同じ動きの舞いを舞う。途中に言立て（口上）が入って舞いは静止するが、それが終わると「エイ」との掛け声とともに再び二人が舞う。そして「幕出ノ歌」で姫が登場する。しばらく三人で同じ舞を舞い続ける。しばらくしてまた言立て（口上）が始まる。

言立て（口上）および歌（謡）が続いている間は、三人の動きはほぼ止まる。「奥ヲサシテゾ帰ヘラルル 奥ヲサシテゾ帰ヘラルル」が二度歌われたところで姫は正面を向いたまま幕の中へ退場する。その後二人の武士は扇をしまいこんで刀を抜いて戦いの体勢に入る。そこへ斧を持った鬼人二人が幕から登場し、激しい四人の戦いが始まる。

二人ずつ相対して、それぞれの刀と斧を握り合いながら渡り合う。この格闘を通して間もなく鬼人二人は撃退され退場する。刀を納めた武士二人の舞いは続くが、一人が先に退場して間もなくもう一人も退場して終わる。



写真5 大江山

〔仕度・扮装〕

二人の武士は侍烏帽子に仮面を被る。頭部は鉢巻きを後ろに長く垂らす。上半身には赤系と黒系の色の鎧を着用し、赤系と黒系布の襷をかける。腕と手には手甲を用いる。腰には水色と茶色の布を巻き横に垂らす。袴をはいて足には脚絆を着用。白足袋に草鞋をはく。刀と扇を持つ。姫は仮面を被り髪を赤紐で結い長く垂らす。赤系に白紋様の着流し姿で黄色の襷をかける。腰には桃色の布を巻き付けて横に垂らす。白足袋をはく。扇を持っている。鬼人二人は仮面を被りシヤグマをつける。黒系と茶系の着流し姿で、腰には黒または白の帯を巻く。素足である。それぞれ斧を持つ。

D. 一人餅搗き（所要時間・約六分十秒）（写真6）

〔芸態・演目構成〕

「アツ ハリヤーツセ」「アツ ハリヤーツセ」の囃子詞（掛け声）とともに頭巾を被り左肩には棒をかついだ男性が登場する。この囃子詞（掛け声）は、太鼓・鉦・笛とともに最後まで何度も繰り返されて基調をなすものである。また「オウオ、オウオ、オウオ、オウオ オーモシロヤー」の歌は、舞いと舞いの区切りに必ず歌われ、場面転換がよくわかる。

それぞれ舞いは、時計回り（右回り）で東・南・西・北の順番に同じ舞いを展開する。登場

して最初は扇をかざして舞う。次は舞台中央に座り長い布を舞台の床に左右二回ずつ叩き付けながら、襷として体に付けていく。そして立ち上がりながら両手で棒を大きく振りおろし、餅つきのような振りをする。逆立ちに近い演技も行う。

最後の場面は座りながら襷をはずして棒に巻き付けて肩にかつき、扇を左



写真6 一人餅搗き

右に大きく振りながら正面を向きながら退場する。退場すると、最後は「楽屋ノ歌」で「舞フタ マフタ品ヤカニマウタ 品和（ヤカ）ニ舞フタ ヤー」が歌われる。

〔仕度・扮装〕

桃色の頭巾を被り、上半身は桃色の半纏を着用。襷をかける。腰には黄色の布を巻く。下半身は黒色の股引に白足袋をはく。棒と白扇を持つ。

E. 鎧揃え（所要時間・約十三分四十秒）（写真7）

〔芸態・演目構成〕

最初に「楽屋ノ歌」と「幕出ノ歌」が歌われ一人の武士が登場する。その後は囃子詞（掛け声）に合わせて扇を振り回して舞う。再び「幕出ノ歌」が歌われて、二人目の武士が登場する。二人は相対して扇を振りかざして、囃子詞（掛け声）に合わせて舞う。二人は対称的に左右違えでまったく同じ動きをとる。

しばらくして歌（謡）が始まる。五人の武士の鎧について、その特色ある優れた物具（ものぐ）を歌い上げていく。その間、二人は舞台

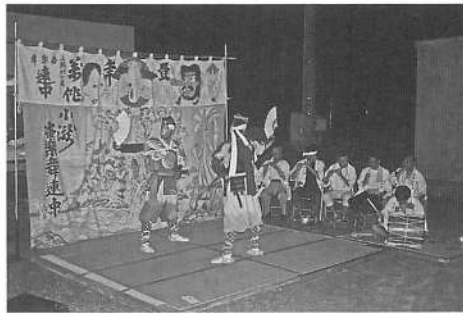


写真7 鎧揃え

中央で向き合いながら前かがみになり、右手で扇を大きく扇ぎながら聞き入る。歌（謡）が終わればわずかに言立て（口上）が入って、また元の舞を繰り返す。最後は正面を向いたまま二人は退場する。最後は「楽屋ノ歌」で、「舞フタ マフタ品ヤカニマウタ 品和（ヤカ）ニ舞フタ ヤー」が歌われて終了するのは同じである。

〔仕度・扮装〕

一人は侍烏帽子に面を被り鉢巻きを垂らす。上半身は胴に大きな赤丸が描かれる黒色の鎧を付け黒系の襷をかける。腕や手には手甲を付け、腰には水

色の布を巻く。下半身は桃色の裁着袴をはいて脚絆を着用。白足袋と草鞋をはく。もう一人も侍烏帽子に面を被り鉢巻きを垂らす。上半身は胴に大きな金色丸が描かれる赤色の鎧を付け桃色系の襷をかける。腕や手に手甲を付け、腰には豆色の布を巻く。下半身は小豆色系の裁着袴をはいて脚絆を着用。白足袋と草鞋をはく。

F. 翁（所要時間・約十五分三十六秒）（写真8）

〔芸態・演目構成〕

最初に「楽屋ノ歌」が歌われる。次に「チーリーリーヤードウヤ ターラーリードウヤ チーリーリーヤードウヤ ドウウーヤー」という詞章が入る。これは、平安時代末期（大治元年）の『法華五部九卷書』の一部、「千里也多楽里多楽有楽多楽有楽我利有百百多楽里多楽有楽」（チリヤタラリ タラアリヤラ タラアリヤラ ガリリアリヤ トウトウトウ タラリ タラアリヤラ）がもとになっている。このことは、東北地方の山伏神楽や番楽の翁の舞の「幕出ノ歌」に共通している¹⁹⁾。



写真8 翁

次に歌（謡）が歌われると、翁が中腰で扇を振りながら登場する。時折、歌（謡）の最後に「アアーエー アアーエー」という低音の囃子詞（掛け声）が何度も響き渡る。翁は、歌（謡）の間は舞台中央で中腰かまたは腰を下ろし、正面を向きながら扇をあおぐ。厳かな雰囲気舞いが続く。次の東・南・西・北の四方角の仏を拝む場面では、翁はそれぞれの方角を向いて扇を頭の上で大きく回して体を前に倒して拝む象徴的姿勢を繰り返す。これらの舞いを終えたら正面に戻る。

その後、これまでの緩やかなリズムは急に変わる。「ハエチャン ハエチャ

ン ハエチャン ハエチャン」の囃子詞（掛け声）に合わせて、翁は足踏みをし足を交互に前方に振り上げて飛び跳ねる動作に変わる。横岡番楽の翁にも後半にリズムが急に変わる場面がある。山形県遊佐町の杉沢比山にも共通する部分がある。この翁舞の後半の急変について、高山茂は由利本荘市鳥海町の本海獅子舞番楽についても、「舞の後半に調子が変わり動きが早くなることが多い」と述べている²⁰。どうやら鳥海山麓の翁舞の動きが後半に早くなるのは共通しているようである。このことに関して、鳥海山小滝舞楽保存会長の吉川栄一氏によれば、小滝では仕事の終わり頃になると急に早く仕上げる傾向にあることを「翁のあがりだ」と例えているとのことである。

翁舞の最後は早い歌（謡）になり、「翁ノイハレハ ゴウランジロ サイサイ サイトハ 急ガレタリ」「惣被い（ソハライ） 惣被い（ソハライ）ヤー」に乗って正面を向いたままアツという間に退場する。

退場後は「楽屋ノ歌」で「舞フタ マフタ品ヤカニマウタ 品和（ヤカ）ニ舞フタ ヤー」を歌って締めくくる。

〔仕度・扮装〕

日の丸を描いた剣烏帽子と白尉面を被る。全身白色の狩衣を着用。白足袋をはく。両面に金銀色の扇を使用する。

G. 熊谷敦盛（二人熊谷）（所要時間・約四分十八秒）（写真9）

〔芸態・演目構成〕

最初に早いテンポで歌（謡）が始まる。その直後に囃子詞（掛け声）が続く。「ヤー ソホラソホラ ソホラソホラ ハイラソホラ」。この掛け声の出だし「ヤー」とともに一人の武士が登場する。舞台中央で薙刀を振り回して激しく動き回る。時折、左手を目の上にかざして遠くを見つめる仕草をする。

やがて武士が立ち止まって幕の方向を見つめると同時に言立て（口上）が入り、二人目の武士が登場する。囃子詞（掛け声）を背景にして、二人の武

士は薙刀と刀を振り回して切り合いが繰り広げられる。この展開は目まぐるしい。二人は離れず一対となつて動き、時折腕を組んで同時にジャンプしたり、ほぼ対称的に動くコンビネーションぶりが特徴である。

間もなく一人の武士は撃退されて退場となる。一方の武士はしばらく舞うが、最後は相撲の弓取りのように薙刀を胸元で左右大きく回転させながら正面を向いたまま退場となる。二人の若々しく躍動的な動きが目立つ。この演目

では、退場後に「楽屋ノ歌」の「舞フタ マフタ品ヤカニマウタ 品和（ヤカ）ニ舞フタ ヤー」は歌われないことにも留意したい。

〔仕度・扮装〕

最初に登場する武士は、頭にシヤグマを被り、顔面は目だけを出して白布で覆う。上半身は赤色の鎧に赤色の襷を着用。下半身は黒色の股引と白色の足袋をはく。薙刀を持つ。二番目に登場する武士は、長烏帽子を被り、顔面は目だけを出して白布で覆う。上半身は黒色の鎧に黒色の襷を着用。腰には緑色の布を巻いて横に垂らす。下半身は黒色の股引と白足袋をはく。刀を持つ。

H. さつま（所要時間・約六分十秒）（写真10）

〔芸態・演目構成〕

この演目は横岡番楽にもあるが、岩手方面の山伏神楽や秋田・山形の番楽にはみられない特徴的なものである。「サーツマサーツマヤー サーツマサーツマヤー」という独特のメロディー（節）を持つ歌（謡）の繰り返しが行われているうち、一人の男性が杖をついて登場する。間もなく歌（謡）は終わり、男性は舞台中央に座る。マイクを使って囃子手との問答・掛け合い



写真9 熊谷敦盛

が始まって、おもしろ可笑しいやり取りが交わされる。しばらくして、また「サーツマサーツマヤー」の歌（謡）が繰り返され、男性は杖をついて舞台を一巡する。その後再び囃子手との問答・掛け合いが始まるのであるが、いわば即興劇といえる。会場はこのやり取りに笑いこぼる。最後は舞台を一巡して、観客のほうを向きながら手を振って幕に消えていく。

退場後には、「楽屋ノ歌」の「舞フタ マフタ品ヤカニマウタ 品和（ヤカ）ニ舞フタ

ヤー」が歌われる。舞いや演技らしい演技はほとんどない。道化舞の側面もあるが音楽芸能の中では異色の演目といえる。

〔仕度・扮装〕

手拭で頬被りして登場。黒色の仮面を被る。手には桃色の手巾をつける。上半身は黒色の半纏を着用。両膝には赤色の布を巻く。下半身は黒色の股引をはき裸足である。杖を持つ。

1. 品ごき太郎（たるたる）（所要時間・約五分十秒）（写真11）

〔云態・演目構成〕

「番楽太郎」とも言われている。滑稽な仮面を被った一人の男性が前かがみになって観客には後ろを向いて登場する。舞台中央に来て正面を向くと、会場から笑いが飛び出す。日の丸の扇を盛んに動かし、時に股間に持っているきながら腰を小刻みに振って女性を笑わせる。正面東を向いた舞いから南・西・北と四方を順番に舞い続けて舞台を一巡する。

途中、四方角の舞いの中で、「ハイッソハイサイ ハイッソハイサイ」の大きな二度にわたる掛け声に合わせて片手で扇を高くかざし、その直後に舞台上座りこむ。そこで右足をわずか上げた状態で扇を回す所作を演じる。



写真10 さつま

それを一方角で二回繰り返す。これらを四方角で演じながら、最後は正面に来て同じ演技を繰り返す。演じながら正面を向いて幕に消えていくのは同じである。「楽屋ノ歌」の「舞フタ マフタ品ヤカニマウタ 品和（ヤカ）ニ舞フタ ヤー」は歌われない。

〔仕度・扮装〕

手拭で頬被りをして茶色の道化面を付ける。

上半身は桃色の半纏を着用し青色の襷をかける。腰には黄色の布を巻いて横に垂らす。下半身は黒色の股引と白色の足袋をはく。日の丸の扇を持つ。

J. 松迎え（所要時間・約七分三十五秒）（写真12）

〔云態・演目構成〕

この演目は、にかほ市では鳥海山小滝番楽にしかみられないものである。『山伏神楽・番楽』によれば、「松迎え」は早池峰神楽の岳・大償では「翁」の裏舞として演じられている。また黒森神楽にもあり、秋田・山形の番楽のなかでは、西長野・富根・二階・女鹿・興屋・釜淵にも「松迎え」はあったという⁽²¹⁾。しかし由利本荘市鳥海町の本海番楽では、これ以外の団体でも演じられていることが言立本によって知ることができる⁽²²⁾。

最初に「楽屋ノ歌」が歌われる。その後は太鼓・笛・鉦の囃子のみ演奏となる。次に歌（謡）が歌われる。その途中から翁面の男性が中腰になり青竹を左肩にかつき、右に扇をあおいで登場する。歌（謡）が終わると「アアー



写真12 松迎え



写真11 品ごき太郎

エー」「アアーエー」の低い囃子詞（掛け声）の発声が何度も入る。その後
に言立て（口上）が入る。翁は舞台中央で止まったまま扇だけをおおぐ。

言立て（口上）が終われば、さらに次の歌（謡）が続く。この間、右手で
扇をゆったりとおおぎながら、両足を前後に踏み出して低く構える姿勢をと
り続ける。最初に正面東を向いて舞い、そして順次時計回り（右回り）で南・
西・北の方向を向いて舞う。

一巡して正面に戻ると、今度は歌（謡）が入る。このときの舞いは、青竹
は左肩にかついだままであるが、扇はたんで体全体を左右に揺り動かす所
作に変わる。この所作を舞台中央にて時計とは反対回り（左回り）で東・北・
西・南の方向で行って二回り（二巡）する。そして最後は、「此ノ扇才取り
おん直し舞ヲ一ト舞ヒ舞フヤ萬歳楽ヤー」という言立て（口上）で正面を向
きながら退場となる。その後、「楽屋ノ歌」の「舞フタ マフタ品ヤカニマ
ウタ 品和（ヤカ）ニ舞フタ ヤー」が歌われる。

最初から最後までゆったりとしたテンポとメロディーが基調で、気品が感
じられる儼かな舞いである。そういう意味では翁の舞いとはほぼ同じといえ
よう。しかし、松迎えの固有性は、松（実際は青竹）を目出たさや繁栄の象
徴として謡いあげ、実際にかついで丁寧に四方角を拝して舞うところにあ
る。当番楽の神聖性を表現する一つの演目といえる。

〔仕度・扮装〕

演目「翁」「吉田」と同じ日の丸を描いた剣烏帽子と翁面を被り、左手に
はいくつか紙垂がついた青竹、右手には金銀色の扇を持つ。上半身は白色の
狩衣を着用。下半身は白袴であり白足袋をはく。きわめて清楚かつ神聖な出
で立ちである。

K. 熊谷次郎直実（一人熊谷）（所要時間・約六分二十七秒）（写真13）

〔芸態・演目構成〕

武士の一人舞である。最初は速いテンポで歌（謡）が歌われ、囃子詞（掛

け声）が続く。そこで武士が登場する。刀を振りかざし、回転しながら一度
ずつ左右に大きく足をあげたり、リズムに乗っ
て両足を揃えて後ろ方向に小刻みに四歩飛ぶ。
じつに足さばきのみごとで、全身でキレのよい
舞いを演じる。この舞いを時計と反対回り（左
回り）で正面東から北・西・南へと続けて一巡
する。時計回り（右回り）が多い演技のなかで
は数少ない舞い方である。

正面に戻れば次の歌（謡）が入り、ゆっくり
したテンポに変わる。武士は舞台中央で立った
まま上半身を上下に動かしながら扇をおおぎ
続ける。途中で歌（謡）が入るが、それが終われば囃子詞（掛け声）の多い
歌（謡）に戻り、速いテンポに乗って同じ舞いを続ける。この歌に乗って武
士は正面を向いたまま退場する。この演目では「楽屋ノ歌」の「舞フタ マ
フタ品ヤカニマウタ 品和（ヤカ）ニ舞フタ ヤー」は歌われない。



写真13 熊谷次郎直実

頭にはシャグマと鉢巻きを付ける。顔面は目だけを残して白布で覆う。上
半身は金色の鎧を着用して黄色の襷をかける。腕と手には手甲。腰には黄土
色の布を巻く。下半身は黒色の股引と白足袋をはく。刀と白扇を持つ。

L. 四人餅搗き（所要時間・約九分五十五秒）（写真14）

〔芸態・演目構成〕

四人の男性が中心となるたいそう賑やかな舞いである。お囃子に乗って棒
を肩にかついで扇を持った男性が一人ずつ登場する。舞台を回って四人が出
揃ったところで全員中央に座り込む。囃子は止まって囃子手の一人と男たち
との問答・掛け合いが始まる。楽しいやり取りに会場は爆笑。四人が「せつ
かくここに来たついでだから餅でもついて行くかな」ということで、囃子が

始まって餅搗きの準備となる。

四人は立ち上がって、「ダンダンダンスク
ダンダンダンスク」と繰り返される囃子詞
(掛け声)に合わせ、両手で握った棒を上から
下に振り下ろし、餅搗きの所作を何度も繰り返
す。

「ダンスク ダンスク ハーリヤ ハーリヤ
ハーリヤ ハーリヤ ホー」のかけ声に合
わせた舞いは次第に熱気を帯びてくる。片足
をあげて棒を右から左へ、左から右へとすば
やく持ちかえる曲技なども交える。やがて、幕内から赤子を背負い左手にカ

ゴ、右手に扇を持った茶色い仮面の女性が登場する。この女性に対して会場
では「ユーコちゃん」と名付けてさかんに声をかける。道化の意味も込めら
れている。この女性はそのまま男性たちと一緒に餅搗きの舞いに加わ
るが、動きはユーモラスである。

間もなく餅を搗き終えると、男性たちによって突然観客に向けて菓子や飴
がばらまかれる。餅振る舞いの意味であろうか。女性は間もなく退場するが、
その後に男性たちも舞いながらの退場となる。「楽屋ノ歌」の「舞フタ マフ
タ品ヤカニマウタ 品和(ヤカ)ニ舞フタ ヤー」が歌われて終了となる。

〔仕度・扮装〕

四人の男性は桃色の頭巾を被り、上半身は茶系色(袖は桃色)の半纏を着
てそれぞれ黄・青・赤・緑色の袴をかける。腰にはそれぞれ黒・緑(二人)・
青の布を巻き付けて垂らす。全員桃色の手甲をつける。下半身は黒色の股引
と白足袋をはく。

女性は頭部には手拭と茶色の仮面を被る。桃色の着物を着用して背中に赤
子を背負う。その上から緑の袴をかけている。桃色の手甲をつける。下半身



写真14 四人餅搗き

は真っ赤な腰巻きと白足袋をはく。カゴと扇を持つ。

M. 吉田(所要時間・約四分五十秒)(写真15)

この演目名は、一般的には「三番叟」という
名で知られる。しかし、鳥海山小滝番楽は「吉
田」である。歌には「吉田殿ハ 櫻ハ波ニ埋モリ
テ 又来ル春ノ染ニ咲クヤ 墨染ニ咲クヤ」
などがある。その「吉田殿」に基づく演目名な
のである。横岡番楽も「吉田」である。

〔云態・演目構成〕

最初に「楽屋ノ歌」が歌われる。次に、囃子
が止んで歌(謡)が入り一人の男性が登場す

る。「オーサオツサ オーサオツサ」の囃子詞(掛け声)とともに、前かが
みになって扇を持って両手を上げながら前に行き、両手を下げながら後ろに
行く。この動きを三度繰り返して舞台正面の東から南・西・北と四方角に向
かって三度繰り返して一巡する。次に言立て(口上)が述べられる。この間
は舞台中央で立ったまま正面を向いて扇を上下にゆくりとあおぐ。

その言い立て(口上)の中に「三番サルガフ」「三番申楽(サルガウ)」と
出てくる。これらはいずれも「三番猿楽」のことであろう。横岡番楽の「吉
田」の口上にも「さんばさりごう」の文言がある。それも「さんばさるごう」、
つまり「三番猿楽」のことだと思われる。鳥海山小滝番楽と横岡番楽の言立
て(口上)にも、能楽の古態である中世の「猿楽」の言葉が残っていること
に注目したい。

次に、歌(謡)に合わせて再び前かがみになって扇を持って両手を上げな
がら前に行き、両手を下げながら後ろに行く。この動きを三度繰り返す。や
がて「オーサオツサ オーサオツサ」の囃子詞(掛け声)とともに、舞台正
面を向きながら次第に後退して幕内に消えていく。その後、「楽屋ノ歌」の



写真15 吉田

「舞フタ マフタ品ヤカニマウタ 品和(ヤカ)ニ舞フタ ヤー」が歌われて終了となる。

〔仕度・扮装〕

「翁」「松迎え」と同じ日の丸を描いた剣烏帽子を被る。鉢巻きをつけ後ろに長く垂らす。黒尉面を付ける。茶系の直垂を着用し腰には白色の布を巻く。白足袋をはく。金銀色の扇を持つ。

N. 田村(所要時間・約十三分五十秒)(写真16)

〔芸態・演目構成〕

武士と鬼人の対決の場面であるが、この演目は現在にかほ市内では横岡番楽にみられる。山伏神楽や他の番楽ではほとんどみられず、『山伏神楽・番楽』では山形県遊佐町にあった女鹿比山と鳥海山小滝番楽のみ記載されている²³⁾。そういうことでは希有な舞いといえよう。

最初に「楽屋ノ歌」と「幕出ノ歌」が歌われ、「エーイ」という囃子手側の声とともに一人の武士が登場する。武士は、「ハッ ヨイヤ サ」「ハッ ヨイヨイ」「ハッ ヨイサ ハイサ」「ハイ ソリヤ」などの囃子詞(掛け声)の繰り返しと囃子に合わせて、右手に扇を持って足踏みをするような所作や舞台を一回転する動きをとりながらリズムカルに舞い続ける。最初は東正面から、南・西・北の方面を向いて同じ舞いを続けて一巡する。正面に戻ってからは、言立て(口上)が入る。その間、武士は立って扇を回しながら静止した状態を続ける。

言立て(口上)が終われば、次のゆっくりした歌(謡)が入る。武士は腰を下ろして舞台中央で両手を上に上げて輪を描くように下に持ってきて、胸元で手を合わせて正面と左右交互に、歌(謡)にある観世音に拝むしぐさを



写真16 田村

七度繰り返し返す。特に最初と最後は大きく手を回しながら立つ。

次に述べられる言立て(口上)が終われば、「エーイ」という囃子手側の声とともに鬼人が登場する。前半と同じ囃子詞(掛け声)に乗って、刀を抜いた武士と鉞を振りかざす鬼人との戦いが繰り広げられる。これらの舞いは、舞台後方西から始まり、時計回り(右回り)に北・東・南と四方角で続き、最後にまた後方西に戻って同じ舞いが演じられる。全部で舞いが五度繰り返し返される。それが西方角から始まってまた西方角で終わる演目はめずらしい。最後は撃退された鬼人が正面を向いて後ろに下がりながら退場となるのは、他の演目とまったく同じである。その後、囃子詞(掛け声)に乗ってまた舞いを演じるが、ほどなくして武士の退場となる。

ここで「翁」の演目の最後にも歌われた「惣払い(ソハライ) 惣払い(ソハライ)ヤー」が歌われる。さらに「楽屋ノ歌」で「舞フタ マフタ品ヤカニマウタ 品和(ヤカ)ニ舞フタ ヤー」で終了となる。

〔仕度・扮装〕

頭にシャグマを付け、引き立て烏帽子を被る。顔面は目だけを出して白布で覆う。

上半身は赤色の鎧を着用し黄色の襷をかける。手と腕には手甲を付ける。腰には赤色の布を巻く。下半身は股引と白足袋に草鞋をはく。刀と扇を持つ。鬼人はシャグマを付け茶色の仮面を被る。全身は黒色の着流し姿。腰に灰色の帯を結ぶ。素足である。鉞を持つ。

O. 空白舞(所要時間・約十分二十秒)(写真17)

この演目は、にかほ市内では横岡番楽、冬師番楽、伊勢居地番楽、釜ヶ台番楽にみられる。さらに由利本荘市では屋敷番楽・坂之下番楽・前ノ沢番楽にもみられる。貝沢に「貝沢からうすからみ」があって、この演目だけ単独で演じられている。しかし、岩手方面の山伏神楽、および山形県の番楽にはほとんどみられない(真室川町八敷代番楽には「餅搗き」あり)。地域的に限

原作左工門持用』によれば、「此ノ舞、今小瀧村ニ現存スルノハ、番楽、翁、吉田、若子、松迎ヒ、日山（トンボウ）、狸々、鎧揃へ、幡揃へ、修験舞、大江山、曾我、田村、清重、堀川、鈴木、猿番楽、御神楽、蔵折り、等デアリマス」とあり、昭和初期の頃には十九演目が行われていたようである。

以上には現在行われていない演目がみえる。それは、①若子 ②日山（ト
ンボウ）③狸々 ④幡揃へ ⑤修験舞 ⑥曾我 ⑦清重 ⑧堀川 ⑨鈴木
⑩猿番楽 ⑪御神楽 ⑫蔵折りの十二演目である。逆にかつては行われてお
らず現在行われている演目は、①品ごき太郎 ②三人立ち ③熊谷治郎直実
④熊谷・敦盛 ⑤一人餅搗き ⑥四人餅搗き ⑦さつま ⑧空白舞の八演目
である。そうすると、これまで小滝番楽で行われたことのある演目は、少な
くとも合計して二七演目ということになる。

(七) 獅子の信仰と形態

鳥海山小滝番楽に獅子舞はない。一方、小滝集落に継承されてきた獅子舞は「御宝頭の舞」（十二段の舞）といわれるものである。なぜ鳥海山小滝番楽では獅子舞は舞われず集落では舞われたのか。番楽で舞う必要はなかったのか。御宝頭の舞は、毎年一月二日の小滝集落の巡行、一月七日の金峰神社七日堂、五月最終土曜日（金峰神社例祭）のチヨウクライロ舞の直前、十二月二十日に近い土曜日（「当番渡し」、などに舞われてきた。丁重な獅子舞が小滝集落の中で番楽とは別個に舞われている。番楽とは別に舞うこの御宝頭の舞と鳥海山小滝番楽との関係をどのように考えるべきか。

先に記した言立本『昭和拾六年八月 鳥海山小瀧番楽舞 篠原作左工門持用』では、「神舞（じんまい）」の演目が記されていない。神舞は獅子頭および獅子舞があればこそ成り立つ演目である。他方、にかほ市内で近隣の冬師番楽・釜ヶ台番楽・伊勢居地番楽・横岡番楽（鳥海山日立舞）・水岡番楽（中断中）の言立本には「神舞」は記されている。その中で鳥海山小滝番楽のみ

記されていないのはなぜか、大変不思議である。鳥海山小滝番楽では当初から獅子舞は演じられなかった、という仮定が生まれるゆえんである。

山形県飽海郡遊佐町に継承される「杉沢比山」という番楽でも獅子舞は演じられない。しかし、獅子舞自体は杉沢集落には存在し、それは御頭舞とか十二段の舞といわれるものである。この獅子舞は、現在では八月十五日の本舞で拝殿での神事において舞われるようになってきたが、本来は番楽からいわば独立して存在してきたのである。

鳥海山小滝番楽と杉沢比山の共通点として、番楽においては獅子舞が演じられないということである。歴史背景として小滝と杉沢はかつての修験集落であり、修験者が集住して活動していたこと、そこで御宝頭の舞や御頭舞・十二段の舞の獅子舞が身近に存在していたことである。

これ以外に、修験者あるいは修験集落と獅子舞の関係については、両者の歴史的関係性を踏まえて別稿で論じているので、本稿ではこのくらいの言及に留めておきたい。

(八) 番楽面、道具類等

(1) 番楽面

所蔵する面について、以下に演目ごとに示す。

①番楽 ②翁 ③吉田 ④松迎え ⑤鎧揃え（二面） ⑥大江山（渡部の綱・頼光・姫・鬼・鬼の五面） ⑦田村（鬼女面） ⑧品ごき太郎 ⑨幡揃へ ⑩曾我（十郎面） ⑪堀川（女形） ⑫蔵折り（翁爺・オカシの二面）。以上総計一八面である。

前述したが、八月十三日公演当日、奈會会館の中の三社様の祭壇に翁（春日様）・若子（大神宮様）・吉田（八幡様）の三面を並べて、講中全員で参拝を行っている。なお、この中に万治二年（一六五九）「瀧名長左衛門重安」作の古い面が二面も存在することは冒頭に記したとおりである。

仮面の形状について、道化・女（姫）・鬼などを除いて、一様に小型のほそ

面で眉毛がつり上がり、細目なのが特徴である。あまり技巧をこらさぬ表情が共通であり、「瀏名」姓の作者のものが二面もあるということであれば、当然作風は似てくるだろう。

(2) 番楽幕

上下二枚の幕を所有する。公演ではその二枚を繋げて使用する。舞台後方で左右にポールを立てて幕を吊り下げる。幕全体の大きさは、横幅三七〇cm×縦二七〇cmである。左右に切れ込み穴が二つあり、ともに縦三九cmある。上部には「豊年満作 上郷村小滝 番楽舞連中」と記されている。その文字の間の中央部に鶴、右に熨斗・天狗、左におかめの絵が描かれている。下部の中央には鯉の滝登りが雄大に描かれており、それを挟んで右に熨斗目図、左に「小滝番楽連中江」が記されている。幕右上部の小さな枠内に記された年号は「大正 歳八月」と読める。大正年間作成の幕であろうか図柄が鮮明である。

(3) 衣裳

すでに各演目紹介の「ア・仕度・扮装」で詳細に記している。鳥海山小滝番楽では衣裳・衣類関係は演目ごとに個人持ちで、風呂敷に包んで各自が自宅に保管している。その他道具類は奈曾会館にケースに収納している。

(4) 楽器

桶胴太鼓（一人）、篠笛（六つ穴）（一人）、手平鉦（じゃが）（一人）の構成である。太鼓のバチは「太ブチ」「細ブチ」の二種がある。「太ブチ」は神事性の強い演目、例えば翁舞、吉田（三番叟）などを演じる際に用いる。一方、「細ブチ」は娯楽性の強い演目、例えば一人餅搗きや四人餅搗きなどを演じる際に用いる。

囃子手として、笛三人、太鼓二人、唄い手二人、鉦一人がいるが、特に笛三人が一緒に練習できる時間がなかなかなく、音曲をそろえるのに困難さを抱えている。

(5) 鳥甲・錫杖等道具類

すでに各演目紹介の「ア・仕度・扮装」で詳細に記しているが、あらためて演目ごとに被り物・採り物を含めた道具類を以下に記す。

- ① 番楽（烏帽子・刀） ② 翁（烏帽子・扇子） ③ 吉田（烏帽子・錫杖） ④ 松迎え（烏帽子・扇・錫杖・青竹） ⑤ 鎧揃え ⑥ 大江山（烏帽子二固・刀二本） ⑦ 田村（烏帽子・刀） ⑧ 品こぎ太郎（シャグマ） ⑨ 三人立ち（シャグマ・木棒三本） ⑩ 熊谷治郎直実（シャグマ・長刀・刀） ⑪ 熊谷・敦盛（シャグマ・烏帽子・刀二本） ⑫ 一人餅搗き（無し） ⑬ 四人餅搗き（木棒四本） ⑭ さつま（無し） ⑮ 空白舞（頭巾・木棒四本）

(九) 鳥海山小滝番楽資料

文書・記録類

- ① 言立本『昭和拾六年八月 鳥海山小滝番楽舞 篠原作左工門持用』
- ② 『象潟の文化 十七』「鳥海山小滝番楽考」には、次のような文献史料が掲載されている。
- ・ 遠藤貞臣（明治十二年～三十七年）『瑠璃の珠くづ』（未定稿）
- ・ 遠藤蔵之助所蔵『獅子舞』（嘉永七年）
- ・ 龍山寺所蔵文書「乍恐申上まする獅子舞乃事」（年代不詳）

（註）

（一）『象潟町史 通史編上』象潟町教育委員会、二〇〇二年三月、336～342頁。本稿は「第六章 鳥海山の信仰と町内の寺社」によっているが、「第二節 小滝の金峰神社」では、本稿で

記した内容以外にも蔵王権現像と聖観音について詳述している。

- (2) 註(1)、834頁。第七章の中の「鳥海修験と宿坊村小滝」では、山形城主の最上義光によって実施された慶長十七年(一六一二)の「最上検地帳」が、小滝集落に修験者が存在していたことを示す最古の記録であるとしている。

- (3) 進藤重記『出羽国風土略記』巻之八、歴史図書社、一九七四年三月、816頁。本書は享保寛延より宝暦十二年(一七六二)までの二〇年間に書かれたもので、昭和三年の復刻版をもとにした再発刊本である。

- (4) 『史跡鳥海山―国指定史跡鳥海山文化財調査報告書―』(秋田県由利本荘市・秋田県にかほ市・山形県遊佐町、二〇一四年三月)の344頁には、「小滝村絵図」をもとにして小滝修験一覽とした表にまとめている。「小滝村絵図」そのものは、『延年チヨウクライロ舞』(秋田県象潟町教育委員会、一九八三年)の19頁に掲載されている。

- (5) 『象潟の文化』十七「鳥海山小滝番楽考」(象潟町教育委員会、一九八八年四月)8頁に掲載されている遠藤氏の明治以降の記録である。番楽そのものの由来は不詳ながら、小滝の修験集落の概況と番楽との関連を示唆する貴重な記録と捉えて引用した。

- (6) 『延年チヨウクライロ舞』(秋田県象潟町教育委員会、一九八三年三月)の「第二章 チヨウクライロ舞」(44〜113頁)に詳述されている。チヨウクライロ舞は、現在は毎年五月最終土曜日に金峰神社例大祭で同神社境内にある土舞台で奉納されている。この前夜祭(金曜夜)に金峰神社例大祭当番講中の庭(現在はその限りではない)で鳥海山小滝番楽は演じられる。金峰神社・修験・番楽との関連を考察するうえで、このチヨウクライロ舞は欠くことのできない芸能要素である。

- (7) 『鳥海山金峰山 神事古実記』(遠藤隆家文書)は天保九年(一八三八)に小滝村の淵名舜庵記によって記されたものであるが、その内容が活字本として全文掲載されているのは、神田より子著『鳥海山小滝修験の宗教民俗学的研究』二〇〇七年六月、71〜77頁である。

- (8) 『象潟の史跡ガイドブック』象潟町、一九八九年三月、52頁。

- (9) 註(3)に同じ。

- (10) 鳥海山小滝舞楽保存会会長の吉川栄一氏の談話であるが、現在も小滝番楽の団体名簿には

「鳥海山小滝日立番楽連中」という名が付いている。

- (11) 右と同じ吉川栄一氏の談話であるが、近年の小滝番楽側と杉沢比山側との懇談会の席上、杉沢比山の師匠格の人々は自分たちの本家にあたるのが小滝番楽であるということを述べていたという。

- (12) 『象潟町史 資料編1』象潟町、一九九八年三月、909頁。

- (13) 『本海番楽―鳥海山麓に伝わる修験の舞―』鳥海町教育委員会、二〇〇〇年三月、14頁。この中で、高山茂は鳥海山小滝番楽に「万治二年(一六五九)銘の古い面が存在することから、鳥海山麓では江戸初期に番楽が行われていたことを記している。その際に高山は「測名」の姓は修験系の家であるとの話を聞いているとしている。本稿ですでに触れた『鳥海山金峰山 神事古実記』の最後に、「小瀧邑 淵名舜庵 謹述之」が記されている。万治二年の番楽面制作者「測名重安」が「淵名舜庵」に繋がる家系であるかどうかは即断できないが、記憶に留めておくべき姓であろう。

- (14) 言立本「昭和拾六年八月 鳥海山小滝番楽舞 篠原作左工門持用」の書き出しの部分に「鳥海山小滝番楽舞之事 阿部貞臣述」とある。阿部貞臣とは先に記した龍山寺の末裔にあたる遠藤貞臣氏で、遠藤氏が述べた内容が言立本三頁目の「神歌」が始まる前まで綴られている。

- (15) 註(5)『象潟の文化』の16〜23頁に掲載されているが、その内容は昭和十年十一月に著された「小滝番楽の歴史」によっていると記している。

- (16) 『秋田県の民俗芸能』秋田県教育委員会、一九八五年三月、38頁。

- (17) 註(14)の7頁。

- (18) 本田安次『山伏神楽・番楽』井場書店、一九七一年六月、418頁には遊佐町の女鹿比山と岩手県の黒森神楽にもあったと記している。

- (19) 高山 茂「翁詞章冒頭部の形成―その推移過程について―」『民俗芸能研究』第四号、民俗芸能学会、一九八六年十一月、16〜28頁。

- (20) 註(13)の85頁。

- (21) 註(18)の135〜147頁。

(22) 註(13)の64～68頁にある「鳥海町・番楽諸曲一覧(一)～(五)」による。

(23) 註(18)の421頁。

(24) 註(18)の429～430頁。

(25) 菊地和博「鳥海山麓に伝承される修験系芸能(番楽)の考察―秋田県小滝楽・横岡番楽

と山形県杉沢比山の比較検討―」『紀要』第八号、東北文科大学、二〇一八年三月、75～

77頁。この中で、小滝や杉沢はかつて修験者が集住していた村であり、修験者が御宝頭の

舞や御頭舞という獅子舞を演じていた歴史的経緯から、番楽芸能のなかで獅子舞がなく

とも支障はなかった可能性を示している。

(参考文献)

『秋田県の民俗芸能』秋田県教育委員会、一九八五年三月。

『秋田県の民俗芸能』秋田県教育委員会、一九九三年三月。

『秋田の民謡・芸能・文芸』秋田魁新報社、一九七〇年五月。

『延年チヨウクライ口舞』秋田県象潟町教育委員会、一九八三年三月。

『雄波郷』第六号、にかほ市教育委員会、にかほ市郷土史研究会、二〇一二年三月。

『象潟町史資料編I』象潟町、一九九八年三月。

『象潟町史資料編II』象潟町、一九九六年九月。

『象潟町史通史編上』象潟町、二〇〇二年三月。

『象潟町史通史編下』象潟町、二〇〇一年三月。

『象潟の文化』十七『象潟町教育委員会、一九八八年四月。』

『象潟の民俗誌』象潟町地域文化調査会、二〇〇四年二月。

『史跡鳥海山―国指定史跡鳥海山文化財調査報告書―』秋田県由利本荘市・秋田県にかほ市・山形県遊佐町、二〇一四年三月。

『本海番楽―鳥海山麓に伝わる修験の舞―』鳥海町教育委員会、二〇〇〇年三月。

本田安次『山伏神楽・番楽』井場書店、一九七一年六月。

(菊地和博)

第五節 鳥海山日立舞(横岡番楽)

(一) 横岡集落の概要

秋田県にかほ市象潟町横岡中屋敷に、「鳥海山日立舞」といわれる芸能が伝承されている。一般に「横岡番楽」とも呼ばれている。横岡は鳥海山麓のなだらかな丘陵地帯にある集落である。戸数は九六戸でほとんどが兼業農家であり会社勤めの方が多い。専業農家は五、六軒のみである。

このような集落状況において、歴史民俗的に注目すべき「上郷の小正月行事」がある。この行事は「サエの神行事」ともいわれており、国の重要無形民俗文化財の指定を受けている。この行事は、毎年一月十五日に小屋に祀られたサエの神(塞ノ神)に人々が参拝し悪霊退散などを祈るものであるが、さらにその日の夕方から真夜中まで子どもたちが鳥追い唄を歌いながら集落を巡る「鳥追い」の行事が伴っている。このような行事は現在では伝承が途絶えた地域も多いなかで、全国的にも貴重な民俗文化といえる。

(二) 名称・所在地

名称は「横岡番楽」であるが「鳥海山日立舞」とも称する。かつては「横岡獅子舞」とも言った。保存会の名称が「横岡獅子舞連中」であったことは、現在使用する幕に記されていることからわかる。所在地は秋田県にかほ市横岡である。

(三) 横岡番楽の歴史・由来

横岡番楽の起源は明確な史料を欠き定かではない。しかし由来伝承として手がかりとなるものは、現にかほ市横岡地区の齋藤新氏が昭和三十八年(一九六三)に記した『横岡郷土芸術 鳥海山日立舞』(写真1)と現由利本荘市

鳥海町上百宅地区の齋藤七蔵氏が昭和五十一年（一九七六）に筆写した『獅子舞言立其之他記』である^②。さらにそれらを網羅するかたちで発刊されたものが平成十六年（二〇〇四）『横岡郷土誌』である^③。以下では『横岡郷土芸術 鳥海山日立舞』や『横岡郷土誌』を参照して横岡番楽の由来をみてみることにする。

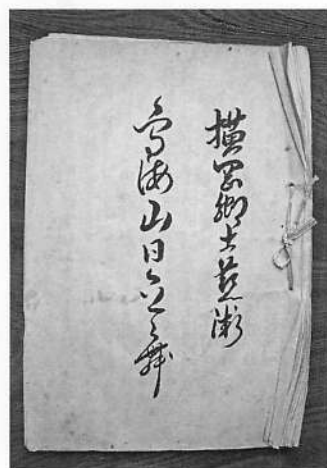


写真1 『横岡郷土芸術 鳥海山日立舞』

まず芸能の基盤が作られた話としては、寛永十七年（一六四〇）に讃岐国高松から生駒家が矢島に国替えになった際に横岡村も領土となり、生駒氏を慕って矢島まで来た能楽師たちが芸能を領民に伝えたことに始まるという。そして番楽の由来では次のような伝承が紹介されている。下百宅の文平という人物は、仁賀保に箕を売りに出かけて数日間戻らなかつた。どうしていたのかと尋ねられたら、横岡の若者たちに獅子舞を教えるよう頼まれ舞を教えていたということであった。その後毎年七月になると、文平は箕を売りに横岡に出かけたということである。また、一方での伝承として、百宅集落に住む村上文平は、横岡領の前倉のトツタカという地区で箕を作るための木の皮を盗んでいるところを横岡の人に発見され、逃亡したが捕まってしまった。彼は横岡に連れて来られて箕づくり作業をさせられた折りに、たまたま口ずさんだ舞の歌を集落の人が耳にするとところとなり、乞われるまま伝えたのが武士舞の「しのぶの舞」であったという。

以上、これらの話がどの程度信憑性をもつかはわからないものの、横岡番楽の成り立ちが百宅の番楽を含む本海獅子舞番楽との繋がりを示唆するものとして受け止めることができる^④。横岡番楽は、かつては毎年七月九日に生駒家の祈願所となっていた熊野神社の祭礼で舞われ、領主より奉納された

品々や領主の万歳を祈り慰めつつ寺路で舞うことを恒例としたとも伝えられている^⑤。

さらに上演に関連して次のようにある。ただし、年代がいつ頃なのか詳細は記されていない^⑥。

七月九日以外に舞われることについては、横岡村には名主・組頭・五人組・年番・伍長を以つて組織されたものがあり、この人達が上作と見込んだ時に村の若者十五才より嫁をもらうまでの若者達が願出、六月朔日神下し、七月九日寺路、七月十三日三太郎、七月十四日清五郎、七月十五日治郎作と各家の前で夜に舞い更けるを知らずに舞い続けたものである。又神送りとして八月朔日これも又稽古の宿の前で舞い、当番、寺地、殿村、村上一家一軒持、中屋敷下村より各夜一晚に付き十二軒より白米五合酒、酒材料、ろうそく一本を奉納させ、それをその日舞わぬ若者達に集めさせるのである。

以上、右記日付はいずれも旧暦で記しているが、現在の新暦の番楽日程と一致している。内容から大変活発に番楽が行われていたことが伝わってくる。

現在の横岡番楽保存会は昭和三十四年四月一日に発足した。正式発足以前の取り組みとしては、昭和二十二年四月一日に番楽の道具類の修復をはかり、さらに戦時中に途絶えていた（四年間ともいう）舞いの復活に取り組んでいる。この年の八月十三日に横岡番楽は本格的に再開している。ただしこの際に、「うば舞」「とり舞」「葎折りの女郎」の演目は復活されなかつたという^⑦。

昭和三十九年十一月十七日秋田県無形民俗文化財の指定を受け、平成二十四年三月八日には、国の記録作成等の措置を講ずべき無形の文化財として指定を受けている。

(四) 上演時期と場所

現在の定期公演は毎年八月十三日と十五日であるが、保存会への聞き取りによれば、かつては八月十四日も上演していた。しかしのちに十四日は青年会の若者がこの日は盆踊りをやりたいと希望したこともあって、十三・十五の両日に行ってきた経緯がある。以前は三日間を「本舞」としていた時期があったが、現在の本舞は十三日・十五日の二日間である。

かつて本舞では、まず練習や身支度などをする集落内の獅子舞宿(番楽宿)から、「小路渡り」の神歌と拍子で行列をなして会場の舞宿となる農家へと向かう。到着するとさらに「振り込み」の神歌が行われ、いよいよ舞宿の庭先でゴザを敷いて演じた。このことは集落四か所の農家でそれぞれ行っていたものである。現在の定期公演は横岡自治会館前の広場で行っている。降雨が予想される場合は最初から会館に隣接する米倉庫の中で行う。八月十三日は当集落では墓参りの日であるが、毎年会場は帰省客や家族・親子連れで満員となる。翌々日十五日も同じ状況である。

(五) 組織

横岡番楽(鳥海山日立舞)は、「獅子舞連中」と呼ぶ保存会を組織している。横岡番楽保存会は、昭和三十四年四月一日に発足して、当初は保存会長・保存会副会長など五四名の会員が存在した。平成十三年の会員記録をみると、会長・副会長など二五名となっている。平成二十四年では会員二二名となって漸次減少傾向にあったが、平成三十年現在は二八名を数えている。現在の会員の年齢構成は、二〇代一人、三〇代五人、四〇代三人、五〇代六人、六〇代四人、七〇代二人、八〇代四人である。平均年齢は五〇・四歳である。

(六) 現在と過去の状況

(1) 幕開き・幕納め

毎年七月一日に「神下ろし」を行って番楽の幕開きとしている。その日は二十時以降横岡自治会館に集合して、祭壇に使用するすべての番楽面(九面)を並べて全員で参拝し、上演の成功を祈願する。それが終わってから横岡番楽保存会の総会を行って当年度の諸々の取り組みの確認や承認を行う。この日は現在特に番楽は舞わないが、かつては神前で儀式的に舞っていたという。八月七日は不幸があった家々を供養して回り、その際は全演目を披露した。次の日程としては、先に記した八月十三日・十五日の「本舞」があり、それが終われば、毎年九月一日に「神送り」を行い幕納めとしている。「神下ろし」と同じく、祭壇に使用するすべての番楽面を並べて、全員で参拝して無事終了したことを感謝する。この日は、現在は十九時三十分以降に横岡会館にて原則一八全演目を演じる。神送りの舞を終えてからの上演は原則行わないルールであることに、今も変わりはない。

(2) 舞台(図1)

先に記したとおり、公演はかつて舞宿である農家の庭先で幕を張って行っていたが、現在は横岡自治会館前の広場で行っている。雨天の場合は脇にある米倉庫の中で行う。舞台は高さ二〇cmくらいの木製台を四枚組み合わせる。

(3) 観客

お盆の十三日・十五日の公演は帰省した人々で大変な賑わいをみせている。家族連れや友人たちなどで参加する人々が多く、特に若者や子どもの姿が目立つ。飲み物や食べ物を持ち込んで、談笑しながら演技観賞を楽しんでいる風情である。

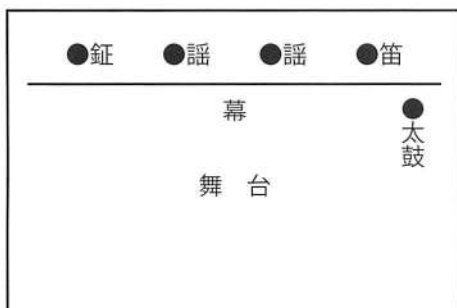


図1 舞台図

身近な人々が舞い手として登場するので、見る側としても盛んに拍手やかけ声を繰り返しており、舞台との一体感が醸し出されている。二日間の参加者はおよそ七割の方々が同じ人だという。毎年真夏の夜に家族や集落全体が楽しみ合える芸能として、番楽が地域社会になくてはならない存在となっており、すっかり地域に溶け込んでいる印象がある。地域の連帯意識を生み出す力にもなっているのではないかと考えられる(写真2)。



写真2 鳥海山日立舞を楽しむ集落の人々

(4) 行事故次第

公演当日の本番(本舞)までの行事故次第であるが、かつては演技の練習や関連する行事などはすべて「番楽宿(獅子舞宿)」と呼ばれる本拠地で行った。番楽宿の祭壇には、演技で使用するお面をお供えして関係者全員が節目で参拝する慣習が保たれてきた。公演当日は、演じる舞宿(農家)までの道中は、太鼓打ち、笛吹き、鉦打ち、神歌かけ、舞い手たちが行列行進する「小路わたり」が行われる。その間に一二番まである「小路わたり」の神歌が歌われた。いよいよ舞宿に到着すると「振込」の歌五番を歌う。舞宿の神前にはお面やお神酒を洗米、塩などを供えて参拝する。それが終わったあとはお神酒を全員でいただき本舞の準備に入った。本舞は農家の庭先であった。それがすべて終わると、最後にまた面を安置しお膳を供えて参拝し終了となった。

(5) 上演演目(上演順序)

現在行われているものは以下の一八演目である。

- ① 番楽 ② 翁 ③ 吉田 ④ 熊谷 ⑤ 屋島路 ⑥ 猿番楽 ⑦ たるたる ⑧ 三人立ち ⑨ やさぎ獅子 ⑩ 堀川 ⑪ 景清 ⑫ 重蔵 ⑬ ゆらゆら ⑭ 田村
- ⑮ 一人餅つき ⑯ 団七 ⑰ さつま ⑱ 空白舞

以上であるが、すべての演目に歌がある。唄い手は現在三人である。

次にかつての演目とその順序は以下のとおりである。

- ① 神舞 ② 番楽 ③ 翁 ④ 吉田 ⑤ 屋島路 ⑥ 熊谷 ⑦ 堀川 ⑧ 田村 ⑨ 団七 ⑩ とり舞 ⑪ 一人餅搗 ⑫ 太郎太郎 ⑬ 三人立 ⑭ 屋島 ⑮ 景清
- ⑯ 重蔵 ⑰ ゆらゆら ⑱ やさぎ獅子 ⑲ 蔵折の女郎 ⑳ 空白からみ ㉑ 猿番楽 ㉒ さつま

右演目は『横岡郷土芸術 鳥海山日立舞』が記述された昭和三十八年当時のものである。演目順番が相当入れ替わっており、これよりさらに「うば舞」の演目があったということで、現在よりは五演目多かつたことになる。

同じく『横岡郷土芸術 鳥海山日立舞』には、さらに「口上渡」「ふりこみ」「幕合」「くねり拍子」等があると記している。これらは演目ではなくいわゆる神歌(謡)であろうが、現在の言立本『郷土芸能 鳥海山日立舞』には、神歌(謡)は以下にも述べる「小路わたり」「振込」「五拍子幕合」のみ記されており「くねり拍子」はない。『象潟町史 資料編1』にも採録されていない。いつの時代か欠落してしまったことが考えられる。

(6) 芸能・演目構成および仕度・扮装

言立本に基づき、各演目に共通する囃子の歌(謡)や言立て(口上)は基本的にひらがなで記すことにするが、囃子詞(掛け声)はカタカナで表すことにする。各演目の「所要時間」とは囃子が始まってから終わるまでの時間であり、舞い手が登場している時間帯よりもやや多めの時間となる。

第一演目が始まる前は、幕の中にて「五拍子幕合」の一番目のみ歌われる。それは、「からかみさんちよや、鳥は天とぶ、ちようせとぶ 空とぶ鳥 羽

をのすよに羽をのすよにヤー もうたもうたすのやかにもうた、すのやかにもうたやー ハエンヤサ」という歌である。これが終わると、第一演目である「番楽」の歌詞の二番目「番楽太郎や番楽太郎や 岩谷にこもつて番楽つねこそめんてたけれ」が歌われ、それが終わり次第幕の中央から「番楽太郎」が登場する。

前述したとおり、神歌(謡)には「小路わたり(一二番)」「振込(五番)」「五拍子幕合(三番)」がある。さらに「番楽」が始まる前に「神舞(じんまい・四番)」があるが、現在は舞われていない。これらの内容は横岡番楽保存会が所蔵する言立本「郷土芸能 鳥海山日立舞」(裏に「表紙 昭和三十九年十二月一日 中村定雄書」とある)に掲載されている。また先にも述べた『横岡郷土誌』や『象潟町史』にも詳細に採録されている⁹⁾。

A. 番楽(所要時間・約五分二十五秒)

【云態・演目構成】

一人舞である。「エーエーエーエー、そうりやそうりや そうりやそうりや ヤーハエンヤサ」の囃子詞(掛け声)に合わせて踊り始める。最初舞台正面(東)に向かって踊るが、時計回り(右回り)に南(左手)、西(真後ろ)、北(右手)、そしてまた正面に戻って舞う。舞台を一巡して正面で五度目の演技を披露して退場する。全演目を舞う前の清めの舞(露払いの舞)として演じるとされている。

途中、「ハエンヤサ」「ハッ」「ハッ」「ヨイソリヤ」「ヨイヨイヨイヨイ」「ソーリヤソーリヤ」「ハイサ」などの囃子詞(掛け声)が絶えず入り、その声に合わせて手足を振りながらゆったりと踊り続ける。総ての方向で、踊りながら右足を舞台に付けながら時計回りに円を描くように四度振り回すのが印象的である。基本的には右手に扇を持つが、しばしば両手で扇を持って振り回す。

【仕度・扮装】

烏帽子を被る。覆面姿で目だけをわずかに出して顔全体を白布で覆う。上半身は縫い合わせた柄物の着物に赤色の襷をかける。下半身は袴をはき腰には水色の布を巻いて長く垂らす。白足袋を着用する。

B. 翁(所要時間・約十分三十秒)(写真3)

一人舞である。歌詞の一番目に「ちりりんやろうや ららりるや ららりるや ららりるや ららりるや」の詞章がある。鳥海山小滝番楽の翁では、「チーリーリーヤードウヤ ターラーリードウヤ チーリーリーヤードウヤ」が歌われる。これは平安時代末期(大治元年)の『法華五部九卷書』の一部、「千里也多楽里多楽有楽多楽有楽我利有百百多楽里多楽有楽」(チリヤタラリ タラアリアラ タラアリアラ ガリリアリア トウトウトウ タラリタラアリアラ)に基づくと思われる。このことは、東北地方の山伏神楽や番楽の翁の舞の「幕出歌」に共通しているという¹⁰⁾。

歌詞一番に続いて、二番目「おりやいづくのおきなぞや おりやなよその翁ぞや おきなが先に生まれつつ まづわさきに生まれつつ」と歌われる。そのときに翁が幕中央から登場してよいよ演技を開始する。

【云態・演目構成】

歌詞には、東は「阿弥陀の浄土」、南は「薬師の浄土」、西は「観音の浄土」、北は「釈迦の浄土」とあり、それに合わせて東・西・南・北の聖なる四方角を拝む舞を行う。国土安穩、天下泰平、五穀豊穰などを寿ぐものといわれる。一つ一つの方角の舞を終えるたびに、囃子詞(掛け声)の「オーエ」に合わせて体を丸めて足を交互にあげて体を入れ替えながら舞うが、そのときの太鼓が「ダンダンダダッダ ダンダン」の軽快なリズムが奏でられる。



写真3 翁

舞は東・南・西・北の順で舞台正面から時計回り（左回り）で続けられるが、終わった後に、リズムは急に変わって「ハヨイヨイヨイヨイ」の囃子詞（掛け声）に合わせて、頭と上半身を上に向けて両手足をかけっこのように前に動かし、さらに後ろに下がる所作が数度行われる。一般的に静的印象が強い翁の舞であるが、特に後半から早い動きが目を引くのは、同じにかほ市の鳥海山小滝番楽や由利本荘市鳥海町の本海獅子舞番楽と類似しているといえる。

特徴的なのは、横岡地区ではこの翁の面は「八幡様」とも考えられ、土地の神（産土神か）として捉えられていることである。後述する他のいくつかの演目の面にも地域の神々が想定されていることが注目される。右手に扇を持って絶えず動かしながら舞う。

〔仕度・扮装〕

烏帽子を被り白色尉面をつける。上半身に着用する狩衣の衣裳は、濃紺にたくさん丸形金紋がほどこされた立派なものである。ただし、かつて使用していた同型の豪華な狩衣衣裳は、現在保存会によって大切に保管されている。下半身は薄茶系の袴を使用。腰には黄緑色の布を巻いて後ろに垂らす。足には白足袋を着用している。右手には扇を持つ。

C. 吉田（所要時間・約六分二十秒）（写真4）

〔芸態・演目構成〕

他団体の演目では「三番叟」という場合が多いが、ここでは「吉田」である。歌（謡）には、「ハア 吉田ののの」とつるとかんめとかんまくれいてさいさい心でまかしたり よへささ おささ」とあるが、この「吉田」にちなむと考えられる。鳥海山小滝番楽の「吉田」も三番叟のことである。しかし、同じにかほ市内でも釜ヶ台番楽は「さんば」、冬師番楽は「三番叟」である。近隣にあっても演目名は一樣ではない。由利本荘市鳥海町に伝承される本海獅子舞番楽の二三講中（番楽団体）では、上宅講中にのみ「吉田」の

演目名がみられるが、その他はすべて「三番叟」である。

演じ手が幕から登場する際には、「つるとかんめとかんまくれいて さいさい心でまかしたり よへささ おささ」という歌（謡）が何度も歌われる。登場してからもこの歌（謡）に合わせて舞う。前屈みの姿勢を貫き、扇を両手でつかみ体を左右に揺さぶりながら、足を交互に踏み鳴らすようにして時計と反対回り（左回り）で舞台を動く。その後は言立て（口上）ごとに、今度は時計回りで扇を振り回しながら一回転を繰り返す。言立て（口上）の最後の「イヤイヤ」に合わせて首を横に振る。言い立てが終われば、再び「つるとかんめとかんまくれて さいさい心でまかしたり ヨイサヨイサヨイヨイヨイ」という、似たような歌詞が六番歌われ、それに合わせて舞い続ける。

ところで、歌（謡）後半に「さんばさりごう」の文言がみられる。これは「さんばさるごう」つまり「三番猿楽」のことであろうと思われる。同じにかほ市の「鳥海山小滝番楽」にも「三番サルガフ」つまり「三番猿楽」があり、横岡・小滝いずれの番楽の言立て本にも、能楽の古態である中世の「猿楽」の言葉が残っていることは大いに注目したい¹¹⁾。

最後に、三番叟が「春日様」であるとされている。先ほどの翁が「八幡様」である。このように地域固有の庶民信仰に繋がりを持つものとして留意したい。

〔仕度・扮装〕

烏帽子を被り黒色尉面をつける。上半身は縫い合わせた柄物の着物に薄桃色の袴をかける。下半身は黒系の袴を使用。腰には赤色の布を巻いて後ろで



写真4 吉田

垂らす。足には白足袋を着用している。右手には扇を持つ。

D. 熊谷（所要時間・約九分二十秒）（写真5）

〔芸態・演目構成〕

一人の武士舞である。『平家物語』の「敦盛最期」の一場面を表す。鎌倉時代初期、一の谷の合戦において源氏側武将の熊谷二郎直実と平氏の若い武将平敦盛との一騎打ちが演じられる。言立て（口上）には「幕合」とあり、登場するまでに幕内で「ハイヤー ハエラソホラ ソホラソホラ ハエラソホラ ソホラソホラ」などの囃子詞（掛け声）が続く。やがて熊谷が幕から出て来るが、しばらくその囃子詞（掛け声）が続いた後に、「くまがい二郎やなおさねや あつもりうたんとおつて見れ」の歌（謡）に変わる。これらの歌（謡）に合わせて熊谷は目まぐるしく舞う。



写真5 熊谷

その舞いは、両手で刀を持って激しく突いたり、片手で刀を右上段から、さら左上段から大きく振り下ろしたり、まさに激しい戦いの場面を想起させる所作を演じる。また、同時に足を高く左右にあげたり、両足を揃えて低くジャンプしながら後ろに三歩下がったり、体全体のきびきびした動きを伴っている。そうしているうち、途中ゆったりした歌（謡）に変わる。

しかし、その歌（謡）の後は再び同じ歌（謡）と調子に戻る。戦いは終わったことを示すのであろう。後半は刀を置いて扇のみを用いて前半と同じ舞を繰り返す。前半、後半ともに舞台四方角を向いて舞う。武士舞に相応しい活発勇壮な舞である。

〔仕度・扮装〕

頭にはシャグマを着用する。覆面姿で目だけをわずかに出して顔全体を白布で覆う。上半身は着物の上に色鮮やかな鎧を腰まで付けている。下半身は

股引をはき腰には赤色の布を巻いて後ろで垂らす。黒足袋をはく。刀と扇を持つ。

E. 屋島路（所要時間・約五分十秒）（写真6）

〔芸態・演目構成〕

二人の武士舞である。『平家物語』にある屋島で行われた源氏と平氏の合戦の場面を演じたもので、一人は長刀（薙刀）を持ち、もう一人は刀を持って戦う場面を演じている。

最初に登場するのは薙刀を持った武士である。両手で薙刀を持って左右上下に袈裟切りを大きく繰り返しながら豪快な動きを披露する。途中から言立て（口上）が入って一旦動きを停止する。その間二人目の武士が刀を持って登場。

すぐさま抜刀して両者切り合いの場面が展開される。囃子詞（掛け声）「ハイヤー ハエラソホラ ソホラソホラ」が何度も繰り返されて、それに合わせた息の合った二人の動きが見ものである。二人は離れず一対となつて、時折腕を組んだりほぼ対称的に動くコンビネーションぶりが特徴である。薙刀の水平切りが行われるが、相手はジャンプして逃れる場面が何度かある。刀の振りや足さばきなど若々しく躍動的である。最後は刀を持った武士が退場して、残った武士は、大相撲の弓取りのように薙刀を両手で回転させる見事な曲技が拍手を呼ぶ。

〔仕度・扮装〕

二人の武将ともに頭にシャグマを付け、覆面姿で目だけをわずかに出して顔全体を白布で覆う。上半身は着物の上に色鮮やかな鎧を腰まで付ける。下半身は黒色の股引をはき、腰には薙刀の武将は黄色、刀の武将は赤色の布を巻いて後ろで垂らす。黒足袋をはく。



写真6 屋島路

F. 猿番楽（所要時間・約三分五十秒）（写真7）

この演目は、にかほ市内ではかつて鳥海山小滝番楽で行われていたが、現在では横岡番楽だけが行っているものである。由利本荘市鳥海町の獅子舞番楽一三講中では、番楽の最初に舞うという意味の「先番楽」の演目はあるが、「猿番楽」の演目名はない。そういう意味では、横岡の「猿番楽」は近隣の番楽の中では大変稀少なものといえる。

〔芸態・演目構成〕

一人舞である。幕内で「エー 番楽太郎や番楽太郎や 岩谷にこもって番楽」が歌われ、間もなく舞台上に登場する。

「ハア ヨイヨイヨイヨイ」「ソウリヤ ソウリヤ ソウリヤ ソウリヤ ソウリヤ ソウリヤ ヤー」などの囃子詞（掛け声）に合わせて早いテンポで踊る。扇は基本的に右手に持つが、時折両手に持って巧みに回しながら踊り続ける。第一演目の「番楽」は五拍子といわれ比較的ゆったりした舞であるが、この「猿番楽」は三拍子ということでテンポが早い。また舞いの内容も異なっている。ただし、歌（謡）と囃子詞（掛け声）はテンポの違いはあるがかなり類似したもので、一瞬同じ演目の繰り返しかと思ってしまうほど似通っている部分が多い。

〔仕度・扮装〕

烏帽子を被る。覆面姿で目だけをわずかに出して顔全体を白布で覆う。上半身は縫い合わせた柄物の着物に水色の襷をかける。下半身は茶色の袴をはき腰には赤色の布を巻いて後ろで垂らす。白足袋を着用する。

G. たるたる（所要時間・約三分）（写真8）

〔芸態・演目構成〕



写真7 猿番楽

この演目は、「たるたるたるたるやー ばんがくたる すなごきたるやー」と繰り返して歌われるように、別名「番楽太郎」「すなごき太郎」ともいわれる。一人による道化舞であり、観衆の笑いを誘う演目である。「ハ ヨイソリヤ ハイソリヤ ハイソリヤソリヤ」という囃子詞（掛け声）につづいて登場する。黒色の仮面を被り頭部は手拭で覆っているが、鼻毛を思わせる白色の布地がやたら長く垂らし、見るからに滑稽である。さらに背中には橙色の縫いぐるみの赤子をおんぶして、やや前屈みの姿になりながら、扇を片手に盛んに振り回しながら踊り続ける。

囃子詞（掛け声）の「スッテンテン ハッ ステンテンズクスッテンテン ハッ スッテンテンテ アリヤスツサイドッコイシヨ」などに合わせた熱演が続く。時折、両手で持った扇を下腹部に持って行き、軽く腰を回してやや卑猥な所作を演じる。「すなごき」本来のポーズを若干残しているが、子どもも多く見学している中では、かつてのような大胆な所作ははばかれる時代となっている。

〔仕度・扮装〕

黒色の道化面を着用する。頭は白の手拭で覆う。上半身に緑色の襷をかけるが背中の赤子も一緒にくるむ。黒色の股引と黒色の足袋をはく。腰には橙色の布を巻いて後ろで垂らす。

H. 三人立ち（所要時間・約四分五十秒）（写真9）

〔芸態・演目構成〕

三人舞であり棒術舞ともいわれる。にかほ市内にある番楽でも「三人立ち」と記している。由利本荘市鳥海町の中直根・二階・前ノ沢の三講中は「三人



写真8 たるたる

立」であるが、「さんになたて」といつているようである。本田安次著『山伏神楽・番楽』では「立」は「太刀」だろうと記している¹⁰。山形県金山町の稲沢番楽や真室川町の釜淵番楽では「三人太刀」と記し、演技内容はほぼ同じであるが、棒ではなく太刀を使った舞いを披露する。岩手県の山伏神楽団体は「三人立」と書いても実際は太刀を使用している。しかし、にかほ市の「三人立ち」は「棒術舞」というように、実際に木製棒を使用して太刀は使わない点が他と大いに異なる。

全体を貫くメロディーは、「吉田」の「つるとかんめとかんまくれいてさ いさい心でまかしたり」とほぼ同じである。しかし、歌（謡）と囃子詞（掛け声）は、「きんめにはしめておんがむれば さいごのまつりこそめでたけれ ハッ ありやすさ よへはすさ ありやすさ よへはすさ よえよえ」というものである。登場してしばらくは扇を右手に持って舞うが、間もなく扇をさつと舞台に捨てて腰に差していた一本の細い棒を抜く。このあつという素早い動きは一瞬であり、目をつぶっている間に見逃してしまうほどの瞬間技といってもよい。

その後、歌（謡）に合わせて三人が左右両脇の棒を持ち合って舞う。時にはクロスさせた棒どうしを叩き合い、激しく音を出す。そして最大の見せ場は、三人が互いに左右の棒の端を握りながら離さず、身をかがめながら棒の下を一人ずつ順番に巧みにくぐり抜ける。それを連続して途切れなく舞い続ける場面である。この連続技に観客も歓声を上げて惜しみない拍手を送る（当日は小学生と中学生による「三人立ち」の演技も行われている）。

〔仕度・扮装〕



写真9 三人立ち

三人ともに頭にはシャグマを着用しひたいに鉢巻きをする。上半身は二人は赤色、一人は水色の襷をかける。下半身は腰にそれぞれ赤色・水色・黒色の布を巻き後ろに垂らす。全員が黒の股引姿で黒足袋をはいている。

1. やさぎ獅子（所要時間・約四分十五秒）（写真10）

この演目はかつて冬師番楽から「獅子舞」とともに習ったが、その後「やさぎ獅子」だけが残ったという。

〔芸態・演目構成〕

二人舞である。「やさぎじし うまれておちる かしらふるもの かしらふるもの ヤー ハー よーえよーえ よーえよーえ」の歌（謡）で登場。一人は獅子を持ち、一人は幕取りの役割である。前の一人は小型で黒色の獅子のカシラを右手に持ち、左手でカシラの口鼻部分を押さえ、頭部全体をクルクル回し続ける。歌詞の「かしらふるもの」の通りに振り続ける。後ろの一人は獅子のしっぽ部分を持ち上げながら回し、前の人動きに合わせて舞う。常に二人は動きを一致させながら、獅子のからだを左右に揺らしたり、時おり同時に上下に跳ねたりする。獅子はこの舞いを繰り返しながら舞台正面から時計と反対（左回り）に回り、舞台四方角を被う意味を込める。一巡して舞台正面に戻った後は、今度は前の人獅子を被って舞う。被りながらも最後までカシラを回し続け、最後は舞台を回らずに正面を向いたまま後ずさりしながら幕の中に消えていく。動きの少ない舞いであり規則的な所作を繰り返す。本来はこつけない仕事草を伴うが、現在は二人とも小学生が演じることもあって省略されているむぎがある。

やさぎ獅子は、いわゆる獅子舞のように歯打ちをしたり、悪魔払いの所作やご祝儀を口に加えたりする場面はまったくない。この獅子舞は、由利本荘



写真10 やさぎ獅子

市島海町の十三講中では「切り上げ獅子」といって最後に舞うことが多く、コミカルで動きの早いものといわれる。

〔仕度・扮装〕

二人は法被を着ている。前の一人は鉢巻き姿で水色の袴をかけ、腰に黄色の布を巻き後ろに垂らす。後ろの一人は「ひよとこ」のような道化面を着用し白手拭で頭部を覆う。赤色の袴をかけ胴部には黄緑色の腰布を巻き後ろに垂らす。

J. 堀川（所要時間・約七分二十秒）（写真11）

〔芸態・演目構成〕

『平家物語』『義経記』では、源頼朝の命を受けた手下達が京都六条堀川の源義経の屋敷に夜討ちをかけたが、義経が奮戦して敵を撃退したとある。江戸時代に入ってから、人形浄瑠璃「御所桜堀川夜討」が人気を博した。番楽の演目「堀川」は四人舞で、この「堀川夜討」がもとになっているものと考えられる。はじめ幕内では歌（謡）が始まるが、歌（謡）の途中から薙刀を持った女性と刀を持った男性が登場する。さらに続く歌（謡）に合わせて二人が対になって舞い続ける。歌（謡）の間には「ソーリヤ ソーリヤ ア エンヤサ」の囃子詞（掛け声）が入る。間もなく言立て（口上）が述べられる。この言立て（口上）が終わったとたんに、鉞を手にした赤と黒の鬼神たちが幕から登場する。たちまち双方が対峙しての戦いを表す場面が展開される。ほどなくして鬼神たちは撃退され退場、そして二人も幕の中に消えていく。



写真11 堀川

〔仕度・扮装〕

男性は頭部にシャグマ、顔面は目を除いて白布で覆う。上半身は膝までき

らびやかな鎧を身につける。腰には水色の布を巻き後ろに垂らす。下半身は黒色の股引と黒足袋をはく。刀一本を差す。女性は長髪に白鉢巻きで胸には赤色の袴をかけ後ろで長く垂らす。腰には黄色の布を巻いて後ろに垂らす。白色（袖のみ桃色系）の着流しの姿で白足袋をはく。薙刀を持つ。赤鬼面は頭部は桃色の布で覆い上半身は赤い半袖着物、腰には水色の布を巻く。下半身は膝までの赤色下着を着用。黒鬼面は頭部は黄緑色の布で覆い上半身は水色の半纏、腰には赤色の布を巻く。下半身は青色に紋様の入った袴をはく。両者とも裸足であり鉞を右手に持つ。

K. 景清（所要時間・約七分二十秒）（写真12）

〔芸態・演目構成〕

一人による武士舞である。景清は平家の武士であった。歌舞伎十八番の一つで、「牢破りの景清」として知られており、「荒事芸」が見せ場となっている芝居をもととしている。杉沢比山、興屋などにしか見られず、番楽の演目としては稀少である。

歌（謡）とともに舞台上に登場して、囃子詞（掛け声）に合わせて右手に扇をかかえて前後左右に大きく振り回しながら、足をあげ跳躍をしきびきびと舞う。途中から「かげきよや かげきよや つまのあこやにたばかり」の歌（謡）が入ると緩やかな動きに変化し、時には動きは止まる。しかし扇は右手で大きく前後にほぼ水平に振り続けて、後ろから体の前にきたときには特に強く振り回すのが特徴である。その後、再び歌（謡）のテンポが早くなり、それに合わせて舞いも素早く変化する。舞いや動きの緩急がはっきりしてわかりやすく、振りの所作も大きく若々しい身のこなしが印象的である。



写真12 景清

楽や他の番楽ではほとんどみられず、『山伏神楽・番楽』では山形県遊佐町にあった女鹿比山と鳥海山小滝番楽のみ記載されている¹³⁾。

武士と鬼神の戦いの場面である。言立て(口上)には、稲瀬の田村時宗という人物が天皇の宣旨で勢州鈴鹿山の立烏帽子という鬼神を征伐する場面が記されている。保存会の演目紹介では「清水寺の縁起と坂上田村麿が観音の助けで東夷征伐の戦いで平定したことを演じている」とある¹⁴⁾。この演目は横岡番楽以外は鳥海山小



写真13 田村

滝番楽にしかみられない稀少なものである。はじめ幕内では歌(謡)が始まるが、それが終わると二人の武士が登場する。「ソーリヤ ソーリヤ ア エンヤサ」という囃子詞(掛け声)に合わせてしばらく舞う。間もなく言立て(口上)が始まると、舞いの動きを止めて扇のみを前後に振る所作となる。扇は右手で大きく前後にほぼ水平に振り続けて、後ろから体の前にきたときには特に強く振り回すのが特徴である。このことは「景清」の扇の動かし方とまったく同じである。

言立て(口上)は、「おん前まかりたつたるつわものは いかなるものと思ふらん」と述べ、稲瀬の太郎年秀の嫡子稲瀬の田村時宗と申すものが天皇の宣旨で勢州鈴鹿山の立烏帽子という鬼神を征伐することを告げる。このように、何者であるかを名乗りながら登場の目的を述べるのはいくつかの演目に共通しており、なかば定型化したスタイルである。さらに途中で歌(謡)が始まり、これまでとはリズムが変わる。

途中座り込んだりするが、やがて立ち上がった、足をあげ手を広げ両腕を大きく上方へ伸ばし、さらに下へと降ろす。これを扇の回りをまわりながら四回繰り返す。

歌(謡)では盛んに「南無や大師の観世音」が唱えられ、「鬼神を討たせし給え」と祈る文言がある。舞いは観世音菩薩に必死に祈る心が表されており、他の演目には見られないじつに象徴的な演技が見どころである。

やがて鉞を持った鬼神が登場して武士との戦いが始まるが、比較的ゆるやかなリズムのうちに戦いを表す舞いが展開される。他の演目の武士舞では、二人の戦いぶりが動きの激しさで表されるものが多いが、この場合はその限りではない。わずかな戦いのち鬼神は撃退されて退場。その後歌(謡)に合わせて舞い、そして退場となる。

「仕度・扮装」

武士は烏帽子を被り、顔面は目だけを出して白布で覆う。鎧を着用し刀を持つ。腰には黄色の布を巻き後ろで垂らす。黒の股引と黒足袋をはく。鬼神はシャグマをつけ赤面を被る。赤色の下着とパンツをはき、裸足である。腰には豆色の布を巻いて後ろで垂らす。右手に鉞を持つ。

○ 一人餅つき(所要時間・約四分四十秒)

「芸態・演目構成」

この演目は、にかほ市内では鳥海山小滝番楽、冬師番楽(現廃絶)、伊勢居地番楽(現廃絶)にみられる。餅をつく男性と道化役の女性の二人舞である。はじめに男性が登場し、扇を持ちながら両手を振り、足を交互に上げながら「ありあすっさい ありやすっさい ありやすっさい ありやすっさい ありやありやありやありや」の囃子詞(掛け声)に合わせて舞う。舞台中央から時計回り(右回り)に四方角を舞って一巡して正面に戻る。男性は中央で座って襷をかけているところに、ほおかぶりしアネコ面を被った女性がバケツを持って登場する。言立て(口上)には双方の言葉の掛け合いになっているが、「唄」は女性の言葉、「舞」は男性の言葉で、餅つきをめぐる二人の会話を想定したのだろう。

やがて、襷をかけ終えて立ち上がった男性が棒を持って餅つきの所作を始

める。他方、女性は男性の尻めがけて柄杓でバケツから水を汲んでペタペタ付ける所作をする。女性は時には観客に向かって水をまいて笑いを誘う。男性は演技しながら舞台を一巡して、さらに上下に棒を振り下ろして餅つき所作を繰り返す。女性は出来上がりつつある餅をめぐらして水をまく所作を続ける。男性はこっけいなしぐさをしながら女性と対になって踊る。やがて男性は幕の中に消えていき、その直後に女性はバケツに残っている水を舞台にまきちらして退場する。男性の餅つきのけんめいさの一方で、男性を励ます意味を含んだ女性のこっけいな道化ぶりが対照的に演じられる。

〔仕度・扮装〕

男性は赤系の頭巾を被り、上半身は白系の長めの半纏を着る。黒の股引と白足袋をはく。腰には水色の布を巻いて後ろで垂らす。赤い襷をかけている。女性は頭は黄色の布で覆い、白っぽいアネコ面を被る。白の着流し姿で肩には手拭、赤い襷、膝には前掛けを着用している。

P. 団七（所要時間・約七分三十五秒）（写真14）

〔云態・演目構成〕

三人舞である。この演目は岩手県の山伏神楽や秋田・山形両県の音楽の中であまり目にするのではない貴重なものである。内容は史実と歌舞伎をもとにした仇討ちの場面である。江戸時代の寛永十三年（一六三六）に奥州白石郡坂戸村で白石城主片倉小十郎家臣の志賀団七が通りがかりに百姓の与太郎を斬り殺す事件が起った。その後与太郎の娘「宮城野」と妹「しのぶ」は武道の修練を積み、寛永十七年（一六四〇）に白石川六本松河原にて父の仇討ちを遂げる。それを脚本にした江戸歌舞伎「宮城野・信夫婦妹仇討ち」が上演されて



写真14 団七

人気を博した。この出来事をもとにしたのがこの演目である。

歌（謡）が始まり、「てきはむかいのふなばなり てきはむかいのふなばなり むこうのきしまでいそいでれ」と、白石川の仇討ちの場面が述べられている間に、幕から二人の女性が登場する。最初に、「はえやそら はえやそら そらそらや さい さい さい」などのテンポの早い歌とかけ声に合せて舞う。ほどなくして二人を紹介する言立て（口上）が始まると二人は静止する。

言い立て（口上）では、宮城野は鎖鎌、しのぶは薙刀を持ち、親の仇打ちに必要な武術を十分積んでこの場に臨んでいることを告げる。いよいよ敵の屋敷に近づいて二人は大声で団七の名を呼びつける。「団七 その夜きくよりもこしやくな女の子わつぱめと刀をぬいて出かけたなり」と歌われると、幕から団七が登場して入り乱れての合戦場面となる。戦いは小刻みで早いテンポの囃子詞（掛け声）に乗って互いに武器を振り回す。あくまでリズムに合わせた振り付けであり、動きの素早さに圧倒される。こうして団七はついに打ち倒されて退場となり、仇討ちを成し遂げた二人も幕の中に消える。

〔仕度・扮装〕

姉の宮城野は頭にシヤグマをつけ白鉢巻きを着用する。小袖の着流し姿であるが上半身は赤色の襷をかける。腰には黄色の布を巻いて後ろで垂らす。白足袋をはく。鎖鎌を持つ。妹のしのぶも頭にシヤグマをつけ白鉢巻きを着用。小袖の着流し姿であるが上半身は青色の襷をかける。腰には水色の布を巻いて後ろで垂らす。白足袋をはく。薙刀を持つ。

Q. さつま（所要時間・約十分三十五秒）（写真15）

〔云態・演目構成〕

この演目は鳥海山小滝音楽にもあるが、岩手県の山伏神楽や秋田・山形の音楽にはないものである。舞台では、「さつまさつまやー さつまさつまやー」の囃子詞（掛け声）とともに、編み笠を被って二本の杖をつく腰曲り

の老人が登場する。舞台中央にて編み笠を取れば黒の道化面を被っている。座りながら、背中に巻き付けていた風呂敷を広げ始め、中に入れたシャグマや鉞、扇など、演技で使う用具類を一つ一つ取り上げて紹介する。それが終われば観客とやりとりを交えながら、一人語りを繰り広げる。言立て（口上）には問答・掛け合いの内容が記されているが、現状はこの通りに展開している訳ではまったくなく、アドリブをきかした即興劇ともいべき展開である。

言立て（口上）にもある「得意の歌」を歌う場面では老人みずからマイクを持って歌い、観客も手拍子をとりながら一体となって場を盛り上げる。最後は風呂敷もたたみ、編み笠を被って帰り仕度をして立ち上がる。二本の杖をつきながら、囃子詞（掛け声）「さーつまさーつまやー さーつまさーつまやー」に合わせてゆっくり幕に消えていく。劇の中に現実が組み込まれて成立している演目であり、不思議な余韻が残る芝居である。なお、この演目では太鼓を縦にして上から一面のみ小刻みに叩いており大変めずらしい。

〔仕度・扮装〕

編み笠を被り、黒仮面（道化）をつける。濃紺の上着で腰に水色の布を巻いて後ろに垂らす。下半身は白地に青紋様の袴をはく。杖二本をついてとぼとぼと歩く老人の姿である。背中には用具類を入れた風呂敷を持つ。

R. 空白舞（所要時間・約七分五十秒）（写真16）

〔芸態・演目構成〕

四人舞であり棒術舞ともいわれる。言立て（口上）では演目名が「空うすからみ」となっている。この演目名は由利本荘市鳥海町で演じられる「貝沢からうすからみ」など、他団体の類似した演目を思い起す。同じにかほ市内



写真15 さつま

で「空白舞」を演じるのは三団体である。岩手方面の山伏神楽、山形県の番楽にはみられない。いずれにしても地域的に限定された演目といえるのではなからうか。

四人の男性が杵を表す棒を持って白で餅つきを行う舞である。最初は「秋田音頭」とともに登場する。「秋田音頭」です。ハイキタカサツサコイサツサコイナー」の軽快な民謡に合わせて、白を中央にして四人が時計回りと反対（左回り）で白の縁を軽く叩いて一巡する。歌とともに、しゃがんだり立ったりしながらの動きが加わる。だんだん飛び上がって白をついたり、後ろ向きで左右から手を回して白をついたりする所作が入る。白を叩く音がリズムカルで楽器のように聞こえ、見事な技がぎぎぎと披露されていく。

次は「さんば」で笛のメロディーが流れる。さらに「伊勢音頭」「うすひき」「はと」の歌が続く。「うすひき」では「上作だ上作だ 田の稲見れば丈は一丈で穂は二尺」という豊作を祝う文言がある。「うすひき」の後は「とりさし舞」があり、「みっさいな みっさいな 鳥刺し舞とはみっさいな」の歌が入る。鳥刺し舞は民俗芸能の中に多く取り入れられているものであり、この演目に挿入されているのも大変興味深い。

最後は「だいじだいじー あけるはだいじー」の歌で締めくくる。ここでは四人の舞いの動きが止まり、持った棒はすべて白の中に入れられる。餅つきは完了したという意味であろう。そして「千秋万世ふくのとなり よそにはやらすとご退散 どうもありがとうございましたー」という幕内から発する言葉で四人の舞いは終了し一礼して退場する。

以上のように、空白舞は民謡や生活・作業歌などからなる「小演目」を組



写真16 空白舞

み込んで成立している。曲技の持つ妙味を観客とともに楽しめる、いわゆる観賞芸といえよう。なお、先の「さつま」と同じく、この演目でも太鼓は立てて小刻みに叩くのが特徴である。

〔仕度・扮装〕

四人ともに頭に鉢巻きを巻き、上半身は白系の半纏に赤色（二人）・黄色・桃色の襷をかける。腰には赤色・黄色・紫色・桃色の布を巻いて後ろに垂らす。下半身は黒の股引、黒足袋をはく。四人とも餅つき用の細い棒を持つ。

(7) 楽器と囃子の位置

幕の中には鉦と笛、歌い手がおり、太鼓は着流し姿で舞台向かって右端に座って打ち鳴らし続ける。笛一人のみが幕外右端で舞台には上らず椅子に座って吹く。

(8) 休止・途絶演目

現在演じられていないものは、①神舞②鳥舞③姥舞④蕨折りの女郎⑤屋島の五演目であるが、歌詞は残されている。

(七) 獅子の信仰と形態

(1) 番楽内獅子舞の有無

横岡番楽（鳥海山日立舞）では獅子舞が演じられない。近隣の冬師番楽から獅子舞を習って演じていた時期があったということであるが、現在では演じられなくなっている。しかし、この番楽にかつては獅子舞が存在したことを窺わせるものがある。言立本「郷土芸能 鳥海山日立舞」（表紙 昭和三十九年十二月一日中村定雄書）の「鳥海山日立舞の歌詞」には「神舞（じんまい）」という演目がみられるのである。

そもそも「神舞」は獅子頭および獅子舞があればこそ成り立つ演目である。

つまり、番楽各演目に先立って舞う獅子舞を神舞というのであり、一例では獅子頭を舞台前方に安置させ、そこに神を呼んでカシラに降臨させたのち、カシラを持って獅子舞を演じ始めるといった団体がある。にかほ市内では、近隣の冬師番楽・釜ヶ台番楽・伊勢居地番楽・水岡番楽（中断中）の言立本に「神舞」が記されており、実際獅子舞は舞われている。さらに、言立本の「小路わたり」三番目と「五拍子幕合」三番目にほぼ同じ獅子舞の文言が入ったものが歌われる。獅子舞がまったくなければ、その語句が入った歌は歌われないだろう。

以上のことから、横岡番楽に本来獅子舞はあったと考えられる。現地での聞き取りでは、かつては「横岡獅子舞」と称しており、その担い手は「獅子舞連中」だったという。その年の番楽の根拠地とでもいうべき「獅子宿」も置かれていた。

なお、由利本荘市鳥海町の二三講中（番楽団体）では、「神舞」は演目名として記されないが、一番目の「先番楽」の前に必ず神舞を舞っている団体が多い。

(2) 獅子頭（やさぎ獅子） 図「獅子頭法量」参照

カシラ全体は黒漆塗りであるが、目と口の縁は赤漆塗りである。歯と目は金色に彩色されている。頭髮は無色の麻からなる。両耳は垂れ下がる。頭頂部には盛り上がった金色の円鏡がある。カシラ上顎には「酒田市今泉タカハシ氏造 昭和四十七年十二月」と記されている。小ぶりの獅子頭である。

(3) 獅子「御頭様」

横岡地区では集落の鎮守である神明社に祀っている獅子「御頭様」がある。大型の黒色のカシラで頭髮は多くの色紙を垂らしており、遊佐町の大物忌神社吹浦口之宮の獅子と同型等のものようである。正月元旦は神明社の祭典

であり、この御頭様が獅子舞を演じながら集落を巡行する。二月の初午の行事でも同じように巡行してきた。かつて八月二十六日は尼寺(あんじゅさま)にて獅子舞を演じた。参加主体はおばあさんたちで、念仏を唱えて夜十一時頃まで行った。以前は夜籠りまで行ったという。横岡の御頭様巡行は、修験集落における修験衆徒たちが担ったものではなく、社家や村人たちが担ってきたものと考えられる。

(八) 番楽面

横岡番楽には以下の面が使用されている。

- ①翁面 ②面(「吉田」・「熊谷」・「屋島路」に同じ面を使用) ③鬼面(「堀川」に使用。「昭和三十八年 斎藤新作」とあり最も新しい面である) ④鬼面(「田村」に使用) ⑤アネコ面(「一人餅つき」に使用) ⑥道化面(「やさぎ獅子」に使用。「中村」の文字あり。前々会長中村定雄氏購入とのこと) ⑦道化面(「ゆらゆら」「たろたろ」「さつま」に同じ面を使用) ⑧⑨不明面(かつて「蔵折りの女郎」に使ったか?)。

以上全部で九面が存在する。このような面は特に大切に扱われ、先にも記したとおり祭壇に奉納されて、「神下ろし」や「神送り」には面にお供え物をして参拜が行われて信仰の対象とされてきた。その一端を表すものとして、『横岡郷土誌』には、「アネコ面 産土様・神明様、翁面 八幡様、吉田春日様、おかし面山の神様、鬼面しよき大神」と記されている⁵⁾。このことから、横岡番楽は鳥海山の神への崇敬の心とともに、産土神や地主神など、地域生活に密着した神々への信仰心も含めて継承されてきたことが窺われて大変貴重である。

(九) 番楽幕

番楽幕には、大正年間に村中から多額の寄付をいただいで本荘の染物屋に

依頼して作ったものがあつた。黒地に波に千鳥が描かれ、「横岡村中安全」の文字が入っていたがこれは現存しない。現在のものは、右側下方に「大正十一年旧七月吉日 横岡獅子舞連中」とあるが、実際は「昭和四十七年 複製」とあつて比較的新しいものといえる。図柄は舞台で翁舞と三番叟が左右に分かれて舞っている姿を大きく描いており、色合いも割合にシンプルなものである。上段には二人、下段には一七人と発起人五人の計三四人の名前が記されている。縦二三三cm×横五二四cmの大型の幕である。縦五cm以上ある切れ込み穴は五つ存在する。

(十) 衣裳

すでに、各演目紹介の中の「イ・仕度・扮装」にそれぞれの衣裳を簡潔に記した。ここでは特に翁衣裳について記したい。この衣裳は能装束であり金糸の織物で濃紺地に金色紋様があしらわれた豪華な狩衣である。この翁衣裳について、かつて秋田県文化財会委員長奈良環之助氏が横岡を訪問した際に、保存会所蔵資料で最も価値あるものと太鼓判を押したとされている。したがって、保存会では大変貴重な衣裳として実際の演技では代替えのものを着用し、従来のもは使用せずに大切に保存してきたいきさつがある。

(十一) 楽器

桶胴太鼓(一人)、篠笛(六つ穴)(一人)、手平鉦(じゃが)(一人)、太鼓は幕の内側から「調子がわり」の掛け声(合図)で細いバチ(三拍子)と太いバチ(五拍子)に持ちかえる。太鼓一個(一人)のみ幕前の舞台の上で演奏している。鉦(一人)、笛(一人)は幕内にて演奏。しかし笛は時おり幕外に出てきて演奏する場面がある。

(十二) 烏甲・錫杖等道具類

これも、すでに各演目紹介の中の「イ、仕度・扮装」で記しているが、あらためて十八演目ごとに道具類「被り物・採り物等」を以下に記す。

- ① 番楽（烏帽子・扇・刀） ② 翁（烏帽子・扇） ③ 吉田（烏帽子・扇） ④ 熊谷（シヤグマ・鎧・刀） ⑤ 屋島路（シヤグマ・鎧・長刀） ⑥ 猿番楽（烏帽子・扇・刀） ⑦ たろたる（シヤグマ・扇） ⑧ 三人立（シヤグマ・棒三つ） ⑨ 堀川（シヤグマ・長刀・刀・鎧） ⑩ 景清（シヤグマ・扇・刀） ⑪ やさぎ獅子（獅子頭） ⑫ 重蔵（シヤグマ・烏帽子・扇・長刀・刀） ⑬ ゆらゆら（扇） ⑭ 田村（烏帽子・扇・刀・鎧） ⑮ 一人餅つき（棒） ⑯ 団七（シヤグマ・鎖鎌・長刀・刀） ⑰ さつま（笠・扇・杖・風呂敷） ⑱ 空白舞（棒四つ）

（十三） 鳥海山日立舞（横岡番楽） 番楽資料

文書・記録類

- ① 言立本「郷土芸能 鳥海山日立舞」横岡番楽保存会（表紙 昭和三十九年十二月一日 中村定雄書」と記入）
 ② 齋藤新『横岡郷土芸術 鳥海山日立舞』、一九六三年二月
 ③ 『横岡郷土誌』横岡郷土誌編集委員会、二〇〇四年六月

（註）

- （一）『象潟の民俗誌』象潟町地域文化調査会、二〇〇四年二月、22頁～23頁。
 （二）『本海番楽―鳥海山麓に伝わる修験の舞―』（鳥海町教育委員会、二〇〇〇年三月）19頁において、高山茂は横岡番楽が百宅から伝授された経緯を記しており、そこで二つの資料を紹介している。この中の『横岡郷土芸術 鳥海山日立舞』は、現在横岡番楽保存会が所蔵しているが、その最後の部分に「此の小冊子は昭和三十七年暮、齋藤新一翁の依頼により、色々ないい伝えや聞いたことなどをもとにして寄せ集めたもの」と記されている。
 （三）『横岡郷土誌』横岡郷土誌編集委員会、二〇〇四年六月、372頁～3407頁。文化編第三章の「三、鳥海山日立舞」で、①由緒～⑩鳥海山日立舞詞章「神謡と言立」まで、じつに

詳細にわたって歴史記録が掲載されている。特に⑩は三つの神謡、二三演目の歌（謡）や言立て等が記されていて大変貴重である。

- （4）註（2）の19頁で、高山茂は「横岡番楽が、本海番楽から何らかの影響を受けたことを示す言い伝えのように思われる」と記している。

- （5）齋藤新『横岡郷土芸術 鳥海山日立舞』一九六三年二月、七枚目（7頁）。

- （6）註（3）の374頁。

- （7）『雄波郷』第六号、にかほ市教育委員会・にかほ市郷土史研究会、二〇一二年三月、49頁。土田秀喜氏は、鳥海山日立舞は戦時中途絶えていて、再び舞われるようになったのは昭和二十二年頃からであり、その際にこの三演目が途絶えて今に伝えられていないと記している。確かに、現在の言立本『郷土芸能 鳥海山日立舞』には、この三演目の歌（謡）や言立て（口上）が記載されており、かつて舞われていたことが明らかである。

- （8）註（5）の八枚目（8頁）。

- （9）『象潟町史資料編Ⅰ』象潟町、一九九八年三月、956～972頁。

- （10）高山 茂「翁詞章冒頭部の形成―その推移過程について―」『民俗芸能研究』第四号、民俗芸能学会、一九八六年十一月、16～28頁。さらにこの中で高山は、「例外なく『ちりやたらり』ではじまる鳥海山麓の番楽は、逆峰当山派、すなわち真言系の修験によつて伝えられたものであることをここで指摘しておきたい」と述べていることが注目される。

- （11）『秋田の民謡・芸能・文芸』（秋田魁新報社、一九七〇年五月）133～134頁には、「猿能楽・能楽」という見出しの文章の最後に、横岡番楽に猿能の名が残ることを指摘している。また関連することとして、言立本『郷土芸能 鳥海山日立舞』の「猿番楽」では、「能楽の古い形を残している」と記していることにも注意を払っておきたい。

- （12）本田安次『山伏神楽・番楽』井場書店、一九七一年六月、474頁。

- （13）註（12）の421頁。

- （14）『鳥海山日立舞』横岡番楽保存会、二〇〇五年六月、7頁。

- （15）註（3）の374頁。

(参考文献)

- 『秋田県民俗芸能誌』秋田県民俗芸能協会、一九八〇年十二月。
 『秋田の民謡・芸能・文芸』秋田魁新報社、一九七〇年五月。
 『雄波郷』第六号、にかほ市教育委員会、にかほ市郷土史研究会、二〇一二年三月。
 『象潟町史資料編Ⅰ』象潟町、一九九八年三月。
 『象潟町史資料編Ⅱ』象潟町、一九九六年九月。
 『象潟町史通史編上』象潟町、二〇〇二年三月。
 『象潟町史通史編下』象潟町、二〇〇一年三月。
 『象潟の民俗誌』象潟町地域文化調査会、二〇〇四年二月。
 齋藤新『横岡郷土芸術 鳥海山日立舞』一九六三年二月。
 『横岡郷土誌』横岡郷土誌編集委員会、二〇〇四年六月。
 『鳥海山日立舞』横岡番楽保存会、二〇〇五年六月。
 『本海番楽―鳥海山麓に伝わる修験の舞―』鳥海町教育委員会、二〇〇〇年三月。
 本田安次『山伏神楽・番楽』井場書店、一九七一年六月。

(菊地和博)